

920.2
M173



始



920.2
M=73

支那
小說戲曲史概說

大東洋協
教會
宮原民平
著

東京
共
立
社
版

大正
14.12.22
內交

まへがき

久しく我が讀書界から閑却せられてゐた支那の小説戯曲が、近時頓に異常の注意を拂はれるやうになつたことは、文藝のため慶賀に勝へない所である、たゞ現今に於て、一般の人は、支那文の原書を讀む力に乏いので、多くは翻譯によつてその欲求を充たさうとしてゐる、これは蓋し已むを得ないことであらう、中には漢文訓讀の法に倣つて、支那口語體の文章を讀み、自ら以つて意を得たりとしてゐる者もあるが、原文の眞趣を捉むことのできない點は、翻譯文を讀むのと大した相違はない、畢竟支那文は支那音で棒讀しなければ徹底しないのである、然し我國では、専門の研究者すら支那音で棒讀することができず、その爲に、重大な誤謬に陥つてゐる人さへある程だから、一般の人に對して、棒讀は無理な

注文である。

それは兎も角も、小説戯曲を玩味しやうとするからには、その發達の徑路を一通り識つて置かねばならぬ、支那に在つて、それ等は如何にして芽生し、如何にして生育したか、單に作品だけ見て歴史を顧みないのは、船を知つて水を知らぬものである、たゞ從來一般の人の讀むに適する平易な小説戯曲史が無かつたことも事實である、そこで吾輩不才その任ではないが、敢てこの缺陷を補はうとして本書を著した、これは誰にもわかることを主眼として書いたのであるから、學究的の考證穿鑿は成るべく省き、叙述も簡明にとめた、尤も解説や引例等は、も少し詳記したい希望をもつてゐたが、豫定の紙數を甚だ超過することを恐れ、不本意ながら餘程手控へた、また文例はすべて和譯して載せたが、斯うしては原文の妙味を殺ぐこと勿論である、然し一般の人に難解な原文を載せたのでは本書を出す主旨に戻るから、妥當ならずとは知りながら拙譯

を施したのである、なほ本書は極めて短期間に執筆し、充分推敲する邊を得なかつたので、或は不審の點が無いとも限らぬ、これは大方の叱正を望むものである。

大正十四年十一月上院

東京小石川にて

天 樵 生 誌

支那小説戲曲史概説 目次

第一章 平民文學發達の障礙……………一

第二章 古代の神話傳説……………五
天地創成の神話——盤古氏——太陽神話——風原——月の神話——人類發生の傳説——天地の破壊

第三章 所謂漢代の小説……………三
古代の小説——虞初——神異經——東方朔——海內十洲記——漢武故事——漢武內傳——西王母の進化——漢武洞冥記——飛燕外傳——雜事秘辛——淮南子

第四章 歌劇の先驅……………三
神前の歌謡——春秋代時の俳優——蘭陵王——大面戲——玄宗の梨園——李龜年——唐の戲劇——宋の雜劇——支那戲曲は歌劇——漢の樂府——李延年——胡樂の輸入——音樂の區別——唐の樂府——漢末長篇の叙事詩

第五章 六朝の小説……………二九
佛教思想の混入——拾遺記——搜神記——搜神後記——異苑——續齊諧記——述異記——搜窺志

支那小説戲曲史概説 目次

——世説新語——博物志——西京雜記其他

第六章 亡逸したる六朝小説……………三六

列異傳其他——幼稚なる小説——厭世的觀念——迷信の記録——陶潜の桃花源記

第七章 唐代の傳奇……………四〇

小説形式の三體——唐詩と小説——唐代傳奇と後世の傳奇——會真記——西廂記の源泉——海山記

——迷樓記——開河記——柳毅傳——虬髯客傳——唐小説の四分類——李林甫外傳——李泌傳——

東城老父傳——梅妃傳——楊太真外傳——長恨歌傳——劉無雙傳——馮燕傳——紅綃傳——謝小娥

傳——劍俠傳——秦隱娘——貞婦——游仙窟——木島明神——霍小玉傳——李娃傳——韋家柳傳

——楊娼傳——杜子春傳——南柯記——枕中記——離魂記——周秦行記——人虎傳——白猿傳——

唐人説書——唐代小説の數——外來宗教の影響

第八章 宋金戲曲の進歩……………四六

歌劇の四要素——樂曲の變遷——詩と詞——填詞の一例——詞の全盛は宋代——西調蝶戀花——鼓

子詞——大曲——滑稽戲——雜劇とは何か——雜戲——平話本——諸宮調——摺彈詞——宋の雜劇

數——南北曲の分離——金の雜劇院本——五花爨弄——院本の役割

第九章 宋代の小説……………五〇

口語體小説の興起——口語文學擡頭の五原因——宋の文語體小説——太平廣記——説話人——説話

第十章 北曲の完成……………五五

人の分類——諷刺小説——五代史平話——京本通俗小説——大唐三藏取經詩話——大宋宣和遺事
——水滸傳の粉本——小説類似書

元の北曲——元曲の數——元曲選——古今雜劇——雜劇作者——關漢卿——白樸——馬致遠——王

實甫——鄭光祖——喬吉甫——北曲完成期——雜劇家の地方別——北曲の六大家——北曲中の傑作

第十一章 北曲の體製……………五七

北曲の十二宮調——套數——北曲の曲數——詞と曲との別——北曲の形式——一劇は四折——北曲
の楔子——北曲の脚色——北曲は唱者一人——題目正名

第十二章 西廂記概観……………五九

絃索四廂——西廂は五本雜劇——西廂の作者——金聖歎の第六才子本——西廂の構成——陳眉公
——西廂記梗概——北曲の悲劇——西廂の擡擧

第十三章 南曲の興隆……………六一

温州雜劇——南曲の先祖——南北曲の差異——琵琶記——高明——琵琶記の名稱——琵琶記梗概
——琵琶記の材料——毛聲山の第七才子書——幽閨記——莉奴記——白兔記——殺狗記——元の院

第十四章 元代の小説……………一七

支那小説戲曲史概説 目次

水滸傳の作者——水滸傳の故事——梁山泊傳説の雜劇——水滸傳の諸本——李卓吾の水滸傳——金聖歎の第五才子書——三國志演義——毛宗崗の第一才子本——隋唐演義——隋煬帝史——說唐——粉粧樓——平妖傳——鬼神小説の先驅

第十五章 明代の戲曲……………一九

元明戲曲家の身分——南曲の貴族化——吳派と越派——六十種曲——明の傳奇の傑作——玉茗堂四夢——還魂記——紫釵記——南柯夢——邯鄲夢——石渠五戲曲——燕子箋——春燈謎——明の雜劇——寧獻王——周憲王——盛明雜劇集

第十六章 明の文語體小説……………二八

剪燈新話——剪燈餘話

第十七章 明の鬼神小説……………三三

四遊記——西遊記の作者——西遊記諸本——悟一子評の西遊真詮——西遊記の續本——封神傳——西洋記

第十八章 明の人情小説……………三三

三大奇書——金瓶梅——隔簾花影——金瓶梅の續本——雙美奇緣——平山冷燕——好逑傳——鐵花仙史

第十九章 明清の奇談集……………三九

三言——拍案驚奇——西湖二集——醉醒石——今古奇觀——今古奇觀類似書

第二十章 明清の歴史小説……………四一

二十四史通俗演義——愚臣の傳記——龍圖公案——包拯に関する雜劇

第二十一章 崑曲と近代戲曲……………四四

魏其輔——樂器——崑曲の名稱——崑曲の滅亡——散調——京調——梆子——現在の樂曲

第二十二章 清代の戲曲……………四八

戲曲の作者——吳偉業——袁于令——李玉——李漁——笠翁十種曲——李漁の戲曲論——尤侗——洪昇の長生殿——孔尚任の桃花扇——張堅の玉燕堂四種——萬樹——夏綸——南陽樂——蔣士銓——紅雪樓九種曲——楊潮の吟風閣傳奇——陳煥の玉種堂五種——黃憲清の倚梅樓七種——周文泉の補天石傳奇——清の戲曲盛行時代——長齋の傳奇——戲曲評論の書——現今の脚本

第二十三章 清代の奇談集……………五三

聊齋志異——子不語——樹微草堂筆記——聊齋の類似書

第二十四章 李漁より曹雪芹まで……………五九

十二樓——後水滸傳——蕩寇志——野叟曝言——儒林外史——紅樓夢——紅樓夢の作者——紅樓夢の材料——紅樓夢の續書

第二十五章 道光以後の創作

鏡花緣——施公案——彭公案及類似書——兒女英雄傳——蠅史——燕山外史——品花寶鑑——花月
 痕——青樓夢——三俠五義——七俠五義——其他の重俠小説——海上花列傳——老殘遊記——官場
 現形記——二十年目視之怪現狀——孽海花——小額——淫書

附

録 歷朝年代表……………三〇四
 小説戯曲家略傳……………三〇五

戰國——隋……………三〇六

唐宋。金……………三〇七

元……………三〇八

明……………三〇九

清……………三一〇

——終——

支那小説戯曲史概説

宮原民平 著



第一章 平民文學發達の障礙

支那文學の中で、その發達が最も晚れたものは小説と戯曲であつた。支那に文字の創
 製せられたのは少くとも四千年をさかのほつた遠い昔である。(黃帝の時の史官に倉頡
 といふ者が居つて文字を造つたといふ傳説によれば四千五百年以上となる) 従つて、支
 那に於ける詩歌文章はすでに上古から著しい發達をして、その修辭といひ思想といひ、今
 日吾人が觀て、その雄偉壯麗に驚かすにゐられないものが少くないのである。ところが
 小説や戯曲になると、頗る貧弱を感ずる。ありていに言へば純文學の立場から見た小説
 戯曲は元(元)二二七七年——一、三六六年から後に起つたもので、その以前には無かつたと言
 つても差支へない。

一たい何故に、支那では、小説戯曲が、それ程に發達が晚れたのであらうか。わたくしは、その原因として、左の五つのことを認める。

- 一 支那人の現實的性格
 - 二 儒教思想
 - 三 科擧の制度（官吏任用試験）
 - 四 文字の困難
 - 五 言文の不一致
- 一 支那人の古い住居地は、黄河の流域であつた。この地方は、人間が遊んでゐても食つてゆかれるやうな豊かな天恵はないので、住民は自然農耕に勞役し、日常の生活のために油断なく働かねばならなかつた。従つて空想に耽り、冥想を樂しむやうな餘裕がない。何事でも現實の生活に直接に利害の及ぶことではなければ、住民の心を捉へなかつた。斯んな有様であるから、雄偉な小説戯曲の生れやう筈はない。
- 二 儒教は、黄河流域住民の特産で、最も現實的な道德思想であつて、孔子はその代表的の人である。儒教思想では、すべての道德は、現世に於ける群衆生活の秩序を保つものなればならぬとしてゐる。荒唐不稽の談に類した小説戯曲は、怪力亂神を語らぬといふ

孔子とその學徒から看れば、世に益無く害あるものである。

- 三 支那人の理想は、高官に墜つて天下を治め、一身一家を世に耀かし、名を後世に傳ふることであつた。而して、さうするには先づ官吏とならねばならぬ。官吏となるには科擧に應じなければならぬ。科擧とは文官として採用せらるべき資格を得る試験である。これは唐の時代に始まり、清の末まで、内容に若干の變更はあつたが、續いた。要するに儒教を支那の帝室に都合の宜いやうに解釋させ、天下の讀書士をして、古人の糟粕中に頭腦を埋没させて、他を顧る暇を與へないやうにする手段であつたとも言へる。それ故字句の構成に巧に記憶力の強い者が勝つので、偉大な思想家や非凡な政治家は卻つて世に出る途を塞がれた。小説や戯曲に充分な才能をもつてゐる者が假りにあつたとしても、それ等の才能はすべて科擧のために消磨されたのである。
- 四 漢字は字形が複雑であるばかりでなく、その數も實に夥しく、平素使用する文字でも一萬前後はある。そのために文字教育が一般に普及しない。従つて民衆に字を讀み得る者が稀である。平民文學とも稱すべき小説戯曲の愛好者たり後援者たる民衆が多數字を識らぬ者であつては、此種の文學は發達しやうがない。
- 五 小説戯曲は平民文學である以上、その叙述は通例當時の口語體が用ゐらるべきもの

である。或は雅俗混合體を用ゐることもあるが、概して新らしい自由な思想を古文體で表はすことは不適當であるから、各國に於て小説戯曲の名篇と謂へば、大抵當時の口語若くは口語に近いものである。然るに支那は一種の崇古思想から、過度に古文を尊重し、口語を重んじなかつた。且つ從來の帝室は古文尊重を統治の一手段とし、これを以て階級制度の維持に利用した傾があつた。されば、同じ人類の死にも、崩といひ、薨といひ、卒といひ、死といふ、斯んなことは口語では大した區別はないが、文章では、ちやんと區別しなければ、文章にならぬと言はれる。そこで、この古文尊重の習慣が上下にゆきわたつて、少し字を識る者は、皆争つて文語體の文章を書き、口語體の文章を書くことを屑しとしなかつた。従つて口語文の發達は晚れるし、小説戯曲の進歩をも見なかつたのである。

第二章 古代の神話傳説

前述の如く、小説戯曲の發達は、支那では頗る阻碍せられてゐたけれど、その種子とも謂ふべき神話傳説は、かなり古い時から存在し、種々怪異な物語が、談片的に傳へられてゐた。たゞ儒教の所謂「鬼神を敬して之を遠ざく」といふ思想のために、價値ある神話傳説が、中途で餘程失はれたものが有るに違ひないと思はれる。

然し、わたくしは、先秦の書、ことに『莊子』『列子』『韓非子』『山海經』『楚辭』『左傳』等に於て、古い神話傳説を窺ふことができるのを喜ぶ。けれども一つ不思議なことは、何れの國にも缺かさない所の天地創成の神話は、上記の諸書には見えてゐない。但し、たとへば『列子』の『天瑞篇』に「昔は聖人が陰陽に因つて天地を統べた」云々から「清輕なるものは上つて天となり、濁重なるものは下つて地となり、沖和の氣なるものと爲る、故に天地精を含み、萬物化生する」等の文句はあるが、是は『列子』述作當時の意見であつて、決して天地創成の神話と見做すことはできない。そこで、天地創成の神話としては、秦の徐整が『三五曆記』に記したと稱せられる所の盤古氏の話を擧げてみる。

天地創成の
神話

盤古氏

それに依ると「天地の初は、雞卵のやうなものであつたが、盤古氏は其中に自然に生じて、一萬八千歳経つたとき、天地が開闢し、清く軽い部分は、上つて天となり、濁つて重い部分は、下つて地となつた。盤古氏は其中に在つて、一日に九變し、天では神となり、地では聖となつた。そして天は一日に一丈づゝ高まり、地は一丈づゝ厚くなり、盤古氏はまた一丈づゝ身長が延び、かうして一萬八千歳を経、天は高さを極め、地は厚さを極め、盤古氏の身もその長さを極めた」

といふことである。また盤古氏に就いては幾多の神話があつて、梁の任昉の著はしたと謂ふ「述異記(後出)には、

『盤古氏は死んで、その頭は四岳(泰山、衡山、華山、恒山)となり、目は日月となり、脂膏は江海となり、毛髪は草木となつた』

といふてある。秦漢頃の俗説では、

『盤古氏の頭は東岳(泰山)となり、腹は中岳(嵩山)となり、左臂は南岳(衡山)となり、右臂は北岳(恒山)となり、足は西岳(華山)となつた』

と傳へ、先儒の説に、

『盤古氏の涙は江河となり、氣は風となり、聲は雷となり、瞳は電となる』

とあるさうだ。或はまた、

『盤古氏が喜べば天晴れ、怒れば天曇る』

との話もあり、尙盤古氏は、一神人かと思へば、昔吳楚の間では、

『盤古氏夫妻は陰陽の始である』

とも傳へてゐるさうである。想ふに盤古氏神話は支那南方のもので、黄河流域を根據としてゐる北方漢人種は、別様の天地創成神話を有つてゐるらしい。それが何時しか消滅して、南方の神話のみが保存されたものと考へられる。現に廣西省の桂林に盤古氏の廟があるといふことも、盤古氏神話が南方に深い關係をもつことを思はせる。

大抵何國にも缺けてゐない神話は太陽神話である。支那の太陽神話は、戰國楚の屈原(約西紀前三〇〇年頃)の「天問篇」の中に、

『湯谷より出で蒙汜にやどる明より晦に及び、行くところ幾里ぞや』

と出てゐる。そして屈原はさらに「九歌」中の東君といふ詩で、太陽が東天より上らんとする壯觀を叙して、

『夜皎々として既に明らけく、龍輻に駕し、雷に乗り、雲旗をたて、委蛇し、長太息してまさに上らんとす』

と歌ひ、西に入る日を以て、

『青雲の衣、白霓の裳、長矢を擧げて天狼を射、わが狐をとりて淪降す』

と歌つてゐる。抑も支那上代では、日輪を御して行く者を羲和と名づけてゐた。屈原の離騷にある、

『われ羲和をして節をとめ、崦嵫(日の没する山)を望み迫ることなからしむ』
の羲和はそれである。「山海經」には、

『東南海の外、甘泉の間に羲和の國があり、羲和といふ女子が居て、帝俊の妻となつて、十個の日生み、常に甘泉に浴せしめた。故に日は羲和の子である』

と出てゐる。いづれにしても羲和は太陽神である。(堯の時には羲和は官名)

太陽が十個出たといふことも支那では有名な神話で、「莊子」にも、
『むかし十個の日が並び出て萬物が照りつけられた』

ことが書いてあり、「淮南子」(これは前漢の書の傳ふる所では、

「堯の時に十個の日が出て、草木燠枯し、天下非常に困んだので、堯が羿に命じて、仰いで射しめたるに、九個の日に中つて、日の中の九羽の鳥が死んで、羽翼を落とし、一個の日だけ残つた』

とのことである。屈原が「天問篇」の中で、

『羿(いづくんぞ)日をいる、鳥(いづくんぞ)羽を解く』

と述べたのはこの神話である。後漢の王逸(一四〇年頃)の云ふ所では、「天問篇」は、屈原が楚王に放逐せられて、山澤を彷徨したとき、楚の先王の廟や公卿の祠堂に、怪異なる圖があるのを見て、之を作り、壁に記したとのことであるから、これ等の神話は、もと祠廟の裝飾として古くから有つたものと見える。尙太陽の中に鳥が居ることは、前記の如く「天問篇」にあるが、「淮南子」には、

『日中に踐鳥あり』

と云ひ、その注に「踐」とは三足であると説明してゐる。三足鳥の傳説も古いものである。太陽神話に對して、月の神話は、どんなものがあるかといふに、著しいことは月中に兎がゐるといふことである。「天問篇」には、

「夜光何の徳ありて死してまた育するか、その利はこれ何ぞか、へつて、菟腹に在り」と述べてある。晋の傅玄の「擬天問」では、

『月中に何かある、白兔藥を搗く』

と頗る明瞭に云ひきつてゐる。また日輪に羲和といふ御者があるやうに、月球には望舒

と名づける御者がある。屈原の「離騷」に、

『望舒を前にして先驅せしむ』

とあるのはそれである。「淮南子」には、

「羿が西王母から不死の薬を貰つたのを、羿の妻姮娥が竊んで月に奔つた」

とあり、その姮娥が月中の蟾蜍であることは、後漢書天文志の注に出てゐる。ずつと後のものであるが、唐の段成式の「酉陽雜俎」には、

「月中に高さ五百丈の桂があつて、その下には常に一人が斧を以つて斫つてゐる。しかし樹の創は斫るに随つて、元の通りに合し、果てしがない、その人は西河の吳剛といふ者で、仙を學んで過があり、そのため樹を伐ることを命ぜられた」

とある。此の話などは、一地方に傳へられた民間の古い傳説であらう。「龍城録」にあるやうな唐の玄宗皇帝が、夢幻の中に、月の中の廣寒宮に遊んだ話は、當時のこしらへ事であらう。

人類發生の傳説

人類發生の傳説としては、前記の盤古氏神話の外に、「淮南子」に、

『黄帝陰陽を生じ、上駢耳目を生じ、桑林臂手を生ず、これ女媧の七十化する所以なり』とあつて、許慎の注に、

『黄帝は古の天神造る所の人、時に化して陰陽を生ず、上駢桑林はみな神名なり』とある。また、

『突に海人を生み、海人若菌を生み、若菌聖人を生み、聖人庶人を生む、凡庸者は庶人より生まる、これ人の始なり』

とある。だい分理屈はつた言ひ方である。これは上古の傳説ではないかも知れない。東漢の應劭の撰と稱する「風俗通」に、

『俗説に、天地開闢して、まだ人民が無かつたとき、女媧が黄土をまろめて、人を作りはじめたが、仕事の間合はなくなつて、繩を泥中に引いて人を作つた、それで富貴の人は黄土製であるが、貧乏人や凡庸者は、繩引きで出来た粗製品だ』

これは如何にも北方の傳説らしい。しかも何となく耶蘇教の創世説に似てゐる所が面白い。

天地の破壊

上古の神話で著しいものは、天地破壊の話である。我國の天照大神の岩戸隠れの話、耶蘇教のノアの洪水の話と共に、世界大異變である。「列氏」の「湯問篇」に、

『天地もまた物であり、物には不足がある、故に昔女媧氏は、五色の石を練つて、その闕けたるものを補ひ、鼈の足を斷つて、四極を立てた、その後、共工氏といふ者が、顛頊と帝と爲

ることを争ひ、怒つて不周の山に觸れた爲め天柱を折り地維を絶つた。それ故、天は西北に傾き、日月星辰就き、地は東南に空處が出来たので、すべての川はその方へ流れる』と記してある。これは天體が常に西に向つて移るのと、支那の地勢は西北が山で、東南が海であるから起つた神話である。「天問篇」に、

『康回(共工氏)さかんに怒り、墜、何の故に東南をもつて傾く』とあるのも此事である。「史記の三皇紀」によれば、

『共工氏は祝融と戦つて勝たず、怒つて頭を不周山に觸れたので、山崩れ、天柱折れ、地維缺けた。女媧は五色の石を鍊つて、天を補ひ、蓋の足を断つて、四極を立て、蘆灰をあつめて、滔水を止め、冀州を救つた』

とあつて、「列子」とは若干異つてゐるが、兎に角同一の根源から出た北方神話である。

以上は天地創成に關係ある主要な神話を擧げたのであるが、此の他に古代帝王の傳説、神仙妖異の傳説等もかなり有る。たゞ支那の神話傳説は、いづれも断片的で、纏まつた雄篇が出来なかつたことは、吾人の物足りなく感ずる所である。

第三章 所謂漢代の小説

小説と言ふ語は支那で新しい語ではない。しかし此の語の初の意味は、今日の小説といふ明確な意味はなく、單に小説シヨウゼツとか奇聞キブンとかいつた程の軽い意味であつた。記事短篇隨筆、口話、いづれも小説であつたのである。「漢書藝文志」に『小説家者流は蓋し稗官ハヱクワンに出づ、街談巷語、道聽塗説者の造る所なり』と記してあるが、稗官といふのは、民間に傳へられてゐる話や噂を訪ねて、之を記録する官吏である。つまり今日の探訪記者のやうな職務をもつてゐた。それ故その集めた小説なるものは、今日の新聞雑誌の記事に類したものであつたらう。いま漢書藝文志に列擧してある小説なるものを記せば左の通りである。

古代の小説

- 伊尹説 二十七篇
- 鬻子説 十九篇
- 周考 七十六篇
- 青史子 五十七篇

第三章 所謂漢代の小説

師曠 六篇

務成子 十一篇

宋子 十八篇

天乙 三篇

黄帝説 四十篇

封禪方説 十八篇

待詔臣饒心術 二十五篇

待詔臣安成未央術 一篇

臣壽周紀 七篇

虞初周説 九百四十三篇

百家 百三十九卷

右すべて十五家千三百八十篇あるが、その中で、「黄帝説」までは古い傳説集で、「封禪方説」、「待詔臣饒心術」、「臣壽周紀」、「虞初周説」等は漢代の作である。たゞ「待詔臣安成未央術」は漢代の作と考へられるが確なことはわからない、百家に至つては記載の順序によれば漢代の作らしいがよく見當がつかない。而して右の小説も悉く名を「漢書藝文志」に留め

たゞけで内容はすべて傳はらず、「青史子」だけは梁の時まであつたらしいが、隋の代（五八九年—六一七年）には亡逸してしまつた。藝文志の撰者たる班固（東漢の人、西紀六十年頃）自ら云ふ所によると、是等の書は大抵古人に託したり、古事を記したりしたもので、誤謬もあり淺薄であると、けれども其中には今日の人に看せたならば面白いものが有つたかも知れぬ

「虞初周説は、周の時代の傳説集であらうが、作者虞初は張衡の「西京賦」に「小説九百、虞初に本づく」と云はれてゐる者で、河南の人、前漢の武帝紀前一四〇年—八八年に愛された方士である。方士といへば神仙の説を述べて、不老不死等を講ずる輩であるから、虞初の周説にもさうした怪異の話が澤山収めてあつたこと、思はれる。

前記の書以外に、今日なほ漢時代の小説として、その書の傳へられてゐるものに左の諸書がある。

神異經 一卷 東方朔撰

海内十洲記 一卷 同右

漢武故事 一卷 班固撰

漢武内傳 一卷 同右

漢武洞冥記 四卷 郭憲撰

飛燕外傳 一卷 伶玄撰

雜事秘辛 一卷 撰者不明

第一に掲げた「神異經」は、東方朔の作つたものとせられてゐるが、東方朔といふのは前漢の武帝につかへた滑稽家で、字を曼倩と云ひ、博識智辯わが曾呂利新左衛門的の人物である。「神異經」は實は彼の作ではなく、後世の人（晋以後）の偽作たるは明かである。支那人はよく書籍の偽作をして、それに難有味を附けるために、古人の名を借用するが、この「神異經」もつまりその同類である。しかもこれには張華（晋人）の注と稱するものが記してあるが、やはり偽作である。「神異經」は大たい山海經を真似たもので、地理異物を誌したもののだが、文章は立派であるから、六朝（二二二年—五八八年）の文士の作であらうとの説がある。

「神異經」の中から、今試に二つの例をとり出してみると、

『西南荒荒とは不毛の邊地中に詭獸を出だす形は兎のやうで、面は人の如く、人の言語を話し常に人を欺く、東と言へば西であり、悪いと言へば善い、その肉は美味であるが、之を食ふと嘔つきに爲る、また此の獸を誕とも名づける』

神異經
東方朔

海内十洲記

「崑崙の山に銅柱がある、天まで届いてゐるので天柱といふ、周圍が三千里で、圓く削つたやうだ、下に回屋がある、方百丈、仙人九府之を治め、上に大鳥が居る、その名は希有といふ、南を向き左翼を張つて東王公を覆ひ、右翼で西王母を覆ふ、背上に小さな毛の無い處があるが、それが一萬九千里あり、西王母が年々その翼上に登つて東王公に會する』

「海内十洲記」も實は後人の偽作で、東方朔の撰ではないが、前の「神異經」と共に、「隋書」の「經籍志」に名を載せてあるから、かなり古いものではある。これは漢の武帝が西王母から、祖洲瀛洲玄洲炎洲長洲元洲流洲生洲鳳麟洲聚窟洲等十洲のことを聞いたが、詳しいことが知り度たいたので、東方朔にたづねた、そこで東方朔の答へたものが、この「十洲記」であると巻頭に記してある。これも亦大たい「山海經」の模倣であるが、文章は「神異經」ほどに佳くない。

「漢武故事」は班固の撰となつてゐるが、これも實は後人の偽作で、多分六朝の文人の筆であらう。武帝が猗蘭殿に生れてから、崩じて茂陵に葬られるまでの雜事を記したもので、中には怪異なる話もある。元來漢の武帝は英邁な帝王で、帝威を遠く異邦に輝かしたと前古未曾有と謂はれる程であつたが、途中から方士の言を信じて、神仙説に迷つたため

漢武故事

に立派な事績に疵を附けた人だ。この漢武故事にも、西王母が武帝を訪問して桃を與へること等を記してあるが、大體に於て方士の説を信じない書きぶりであるから、無論その方面の者の手に成つたものではない。

漢武内傳

「漢武内傳」も、やはり武帝が生れた時から崩する時までの事を記してある。殊に西王母と武帝の關係を述べることに非常に詳細である。これに「十洲記」や「漢武故事」の語をかなり採用してゐるところを見ると、其二書よりも後に出了た書物で、無論班固の作といふのは偽りである。「漢武故事」を班固の作だと謂つたのは宋の晁公武「一六〇年頃の人」で、「世に班固の作といふ」と「郡齋讀書志」に書いてあるが、「漢武内傳」の方は、宋の時までは作者は明かでない。明になつて兩方とも班固の作と決めてしまつたのである。班固は「漢書」を作つた大學者であるから、後人が故らに彼に附會したのである。

「漢武内傳」の中から、試に、西王母が降つてくる一段を抜いてみる。

『夜二更の後に到ると、忽ち見る西南に白雲起り鬱然として向つて來たが、宮庭に趨るやうであつた、やがて近づくと雲中に簫鼓の聲、人馬の響がきこえ、しばらくにして王母がはるかに殿前に到着した、その光景は鳥が集まつたやうで、龍虎に駕するもの、白麟に乗るもの、白鶴に乗るもの、軒車に乗るもの、天馬に乗るもの、群仙數千人、光は庭宇にかゝや

西王母の遊
化

きわたつた、いよく到着すると、それ等の從官は何處ともなく居なくなり、たゞ王母は紫雲の輦に乗り、九色の斑龍に駕し別に五十の天仙が、鸞輿に附添つて居た、いづれも一丈以上の身長で、綵旒の節を持ち、金剛の靈璽を佩び、天眞の冠を戴いて、宮殿の下に止まつた、王母はたゞ二人の侍女に扶けられて殿上にのほつた、侍女は年十六七ばかりで、青綾の袿を着け、あでやかな眼もと、神々しい姿、まことに美人である、王母は殿上で東向きに着坐した、黄金の服を着け、あざやかに、且つしとやかに、靈飛の大綬を帯び、腰に分景の劍を佩び、頭上の美しい髪の上には太眞晨嬰の冠をいたゞき、足には鳳凰模様の玉の舄を履んでゐる、年の頃は三十ばかりに見えるが、丈は高からず、低からず、天姿掩藹、容顏絕世、眞に靈人である』

元來西王母といふのは、「山海經」に記してあるのが、始まりであるが、それには、

『西海の南、流沙の濱、赤水の後、黒水の前に大山がある、それを崑崙の丘と名づける、そこに神人が居る、面は虎で、身に尾があり、白色である、その下に弱水の淵があぐり流れ、その外に炎火の山がある、物を投ずれば立どころに燃える、そこに人が居る、鳥の羽をかぶり、齒は虎のやう、尾は豹のやうで、穴居してゐる、その名は西王母といふ』斯ういふ雌雄もわからぬ怪物が、「漢武内傳」では美しい神女と爲つた。爾來支那では西王母は美人な

漢武洞冥記

「漢武洞冥記」は「別國洞冥記」ともいふ、「十洲記」を真似て作つたもので、六十ばかりの小話が録してあるが、皆神仙怪異のことばかりである。その序文に、

「漢の武帝は明俊特異の主である、東方朔は滑稽を以て、それとなく諫め、心を道教にひらき、冥迹の奥をして照然として顯かならしめた、今舊史に載つてゐないもので、聞いたり見たりしたことを記して、洞冥記四卷を撰し一家の書を成す」

とある通り、やはり東方朔をかつぎ出してゐる。此書の作者は漢の郭憲となつて居るが「隋書經籍志」には郭氏とだけあつて名は無い。「舊唐書」にはじめて郭憲の作となつて現はれてゐるが、もとより是も眞實とは認め難い。

「飛燕外傳」は漢の成帝(西紀前三二年—八年)の後趙飛燕とその妹合徳とが帝の寵を争ふことを書いたものであるが、これも俗玄の撰といふのは假託で、やはり六朝頃の人が作つたものであらう。文章は中々美しく出来てゐる。

雜事秘辛

「雜事秘辛」は後漢の梁冀の妹が桓帝(一四七年—一六七年)の皇后となる次第を述べたもので、文辭もかなり美しいが、猥褻の嫌がある。これも漢の時の作といふが、明の楊慎(一五五〇年頃の人)の序に、安寧の土知州の萬氏から得たとあるが、つまり是は楊慎が他から得

たのではなく、自己の頭から得たものである。

以上述べた所によつて、支那には前漢後漢を通じて、眞に漢の時に出来た小説は今日見當らないので、いはゆる漢の小説と稱するものは、實は後人の手に成つたものばかりであることを知る。しかもそれらは皆文語體であつて、口語體ではない。勿論昔の口語と今日の口語とは甚だ違つて居り、昔の口語は文章に近かつたものではあらうが、然し是等漢の小説と稱するものは華麗な文章の流行した六朝人の筆であり、當時の口語でないことは確かである。

右の外に漢の高祖の孫劉安の撰した「淮南子」といふ書には、上代の神話や傳説がかなり載つてゐるが、元來小説の書ではなく、哲學的の書であるから、茲にはその説明は省略する。

淮南子

第四章 歌劇の先驅

今日如何なる未開の野蠻人と雖、言語をもつてゐる以上、歌を唱はない人種はない。人間は、悦しいにつけ悲しいにつけ、歌によつて感情をもらすことは自然の本性である。すでに歌があると、これに伴つて、踊るといふことも始まる。つまり、歌ひ且つ踊ることは、人間の感情の表現であつて、これによつて自己を慰め、また他を慰める、現代文明人の祖先も上古に於いては今日謂ふ所の演劇のやうな複雑なものは知らなかつたが、歌ひ且つ踊ることは知つて居た、此の點は今日の野蠻人と同様である、歌ひ且つ踊るは即ち歌舞である。この歌舞が発達して演劇が出来る。その發達の過程は支那も他の國も大體に於て異つたところは無い。

神前の歌舞

日本の神代に於て、天宇受賣命といふ婦人が岩戸の前で神樂をやつたといふ傳説は、歌舞を以て神に奉仕したことを意味する。即ち歌舞が一種の宗教的儀式に用ゐられたものと見做すことができる。支那に於ても之と同様で、上古に於ては、夔男とか巫女とかいふ者があつて、歌舞を以て神に奉仕してゐた。宗教的の儀式には必ず歌舞が之に伴つた

ものである。この風習は長く後世に傳はつて、今日何れの國でも宗教に音樂は附物となつてゐる。

春秋時代の
俳優

宗教的儀式に用ゐる歌舞は、主として神を樂ませるのが本旨であるが、神ばかり樂ませるには人間の方が物足りなく感ずるので、後に人間を樂ませる歌や踊りが漸次に起つて來るのは自然の順序であらう。こゝに於て、覘や巫の外に、俳優といふものがあらはれることとなる。支那に於ては春秋時代に、晉には優施楚には優孟など、いふ俳優が居た。これ等はいづれも俳優(一寸法師)であつたらしく、歌舞に滑稽を混へて、人を樂ませることを職として居た。

蘭陵王

其後秦漢魏晉いづれも俳優はあつたが、尙其の演ずる所は、歌舞を本としたる幼稚なる身振狂言の域にあつたものと思はれる。北齊(五五〇年—五七七年)の時、蘭陵王入陣曲といふものが出來た。これは北齊の蘭陵王長恭といふ武勇ある人が、容貌が美しく、婦女のやうであつたので、自ら假面をかぶつて、敵人に臨んだ事を歌舞に仕組んだもので、後世支那劇の前驅とも看るべきものである。この假面を大面或は代面ともいふ、而して大面戲は唐に於て最も盛んであつた。

大面戲

玄宗の梨園

唐の玄宗皇帝(七一三年—七五五年)は風流な君主で、殊に音樂歌舞を好み、宮中に教坊を

設けて之を奨励し、親ら教師となつて、三百人の子弟を梨園で教授した。今日芝居のことを梨園といふのは、是から始まつたことである。また今日支那の俳優が、演劇の神として玄宗を祭るのも此の因縁である。

李龜年

斯んな状況であるから、歌舞や戯劇も一時に旺盛となり、且つ整頓して來たのである。而も音楽には李龜年の如き名手があり、歌舞には楊貴妃の如き美人があつて、之に愈々精彩を加へ、實に前古に見ざる盛觀を呈した。なほ音楽歌舞の外に、前述したる大面並びに撥頭踏謡娘、蘇中郎、參軍戲等の戯劇があつた。これらは總て一種の狂言に類するものであつた。

唐の戯劇

宋の雜劇

北宋(九六〇年—一二六六年)に於ては、雜劇といふ語ができた。雜劇の初は、大體に唐の戯劇と大差はなく、滑稽な狂言であつたらしい。ところが宋が南に移つて、南宋(一二七〇年—一二七六年)と爲ると、雜劇は非常に進歩して、單純な滑稽狂言でなくなり、歌もあれば白もあるといふ一種の歌劇を構成するに至つた。

支那戯曲は
歌劇

支那で戯曲といへば即ち歌劇のことであつて、歌劇を除けば戯曲は無い。従つて支那戯曲では白や科よりも曲を重く視る。戯曲の優劣は曲文の巧拙を以て定め、俳優の優劣もまた曲の唱ひかた如何によつて定められる。故に支那戯曲の研究といふことは、曲の

研究であるとして見て差支へない。一般に支那では觀劇のことを聽戲といふ。それ程に曲を主としてゐるのである。

曲とは何かといへば、歌である。孔子の編纂した詩經の三百五篇の詩も歌である。漢魏の古詩も唐詩もみな詮ずるところ歌である。而して歌は讀むものではなくして、節をつけて唱ふものである。或は樂器に合せて唱ひ、或は樂器を用ゐずに唱ふ。いづれにしても唱ふのが歌である。ところが、完全な音譜も無く、着音器も無い時代では、年數が経つと、歌の文句は書いて残すことはできるが、唱ひ方(節)はわからなくなるものである。そこで詩經の詩なども、後代には唱ひ方がわからなくなつた。日本でも素盞鳴尊が「八雲たつ」を作られたときは、立派に節をつけて唱はれたであらうが、その節は後に傳はらないから、たゞ三十一文字の形式だけが和歌となつて残つてゐる。今日では和歌は讀むもので、唱ふものではないやうになつてゐる。支那の歌も同様で、詩經の詩は戰國時代には唱ひ方がわからなくなり、辭が出來た。屈原の九歌等は、その頃は唱つたものである。ところが漢になると、そんな古い歌は唱ふことができなくなつた。そこで漢の武帝の時には、樂府を設けて音楽の調査をすることになつた。樂府は朝廷の音楽所である。その長官ともいふべき人は、當時の音楽通たる李延年で、協律都尉といふ官名であつた。その時に詩の中で、

漢の樂府

李延年

胡樂の輸入

音楽に合せて唱ふべきものを樂府と謂ひさうでない詩は、たゞ讀むものとして別になつた。時は張騫が西域から還つて來て珍奇な胡樂を輸入したので、李延年はそれに據つて、新しく唱歌二十八種を作曲したりした。當時有名な文豪司馬相如等は詩章を作り、大に音楽の發達に貢獻する所があつた。尤も當時に於ても、宗廟郊祀の祭典に用ゐる樂は、やはり叔孫通漢の高祖の時の人の制定した古樂であつたが、武帝の當時は、遠く四方の異域と交通して、人々は常に新奇な物に接してゐたから、保守的な考を有する者が少く、大抵進取的——むしろ輕薄な進取的の思想に傾き、古典的な物寂びた古樂は、人々の好む所でなかつたらしい。

音樂の區別

後漢の明帝(五八年——七四年)の時には、朝廷で用ゐる音楽を四品に區別し、宗廟の祭や天地の神靈を祭るときは太子樂を用ゐる、宮中の各種の儀式には雅頌樂を用ゐる、天子が群臣と宴會するときには黃門鼓吹樂を用ゐる、軍歌としては短箫、鼙鼓、鞀樂を用ゐるたさうである。是等はいづれも朝廷の音樂である。勿論民間にも俚謠俗曲が流行してゐるに違ひ無いが、それ等に就いてはよくわからぬ。

漢に起つた樂府は幾分づゝの變遷はあつたにせよ、魏晉から六朝にかけて流行し、新曲も日々に増したと、思はれるが、唐(六一八年——九〇五年)に至つて絶句を唱ふやうに

唐の樂府

なり、別に唐の樂府といふものが起つて、従來の樂府は唱ふことができなくなつた。そして従來の樂府を古樂府といつて、唐の樂府と區別した、斯うなると古樂府も最早讀むものであつて唱ふものではない。

さて詩には讀むものと唱ふものとの區別を生じたことは今述べたが、その詩の内容は如何であるかといふに、詩經などにあるものは概して古雅であつて、叙事的の詩は少く、多く叙情的である。句は四言が普通である。漢になると叙事的の詩が漸く多くなり、句は七言も多少あるが、五言が最も流行した。而して漢の末頃には、一篇の戯曲としても差支へない程の長篇の叙事詩があらはれた。それは作者はわからぬが、『焦仲卿の妻の爲に作る』と題した詩で、支那文學上の珍品である。これは後漢の建安(一九〇年——二一九年)の頃、廬江府の小吏焦仲卿の妻劉氏が、仲卿の母から嫌はれて、夫婦の仲を生木を裂くやうに割かれて生家に逐ひ戻された。ところが劉氏が生家に歸ると立派な人から縁談を申込まれ、劉氏の母や兄も是非そこに嫁けと強迫したが、先夫との契を守つて、どうしても再嫁を肯かず、遂に思ひあまつて、水中に投じて死んでしまつた。焦仲卿は此事を聞いて悲歎に耐へず、これまた樹に首を縊つて死んだといふ凄惨な話で、冒頭の『孔雀東南に飛ぶ』から末句の『之を戒め慎んで忘るゝ勿れ』まで、五言三百五十七句、哀々切々の情が漲つて居る。

漢末長篇の叙事詩

長篇と謂はれる白樂天の長恨歌七言百十二句も、吳梅村の永和宮詞七言百八句も、その長さだけでさへ遠く及ばない。その文詞に於ても決して此二者に劣るものではない。漢末にこれだけのものが出たにも係らず、之に嗣ぐ雄篇が後を絶つたことはまことに心寂しいことである。

第五章 六朝の小説

六朝(吳、東晉、宋、齊、梁、陳、二二二年—五八八年)に於ける小説は、すでに述べた所の漢の小説と、文體も内容も大差はない。是れは大差がないのが當然で、漢代の小説と稱するものも、實は六朝若くは更に後の人の手に成つたのであるから、漢とか六朝とか區別するのは、却つてをかしなことである。たゞ漢代の作と稱するものを六朝のものと區別したのは、叙述の便宜に因つたのである。然し一つ注意すべきことは、所謂漢代の小説には、佛教の臭味が加はつてゐないが、六朝の小説には、佛教の説が大分混入してゐるのである。そしてこゝに小説として擧げる書も、作者自身は小説を書くつもりではなく、一種の見聞録として傳へるつもり(それが虚誕なつくりごとでも)であつたものと視るべきである。故に近代的に小説といふ意味ではない。即ち作者から言へば一つも創作は無いのである。

佛教思想の混入

六朝から隋にかけての小説で、今日その書が遺つてゐるものは、左の九種ある。

拾遺記 十卷 秦の王嘉撰

第五章 六朝の小説

- 搜神記 八卷 晋の干寶撰
 搜神後記 二卷 晋の陶潛撰
 異苑 十卷 宋の劉敬撰
 續齊諧記 一卷 梁の吳均撰
 述異記 二卷 梁の任昉撰
 還冤志 一卷 隋の顏之推撰
 世說新語 三卷 宋の劉義慶撰
 博物志 十卷 晋の張華撰

〔拾遺記〕は、王嘉の撰と傳へられてゐる。梁の蕭綺の序文によると元來十九卷二百二十篇あつたが、秦の末三九〇年頃に散逸してしまつたので、蕭綺が整理して十卷としたと記してある。王嘉は隴西安陽の人であるが、方士であつて、事を豫言する能力があつたと云はれる。それ程の男も遂には姚萇に殺されてしまつた。(三九〇年頃)〔拾遺記〕の内容は、初の九卷には、包犧神農から東晋までの事を記し、最後の一卷に、崑崙山等九仙山の事を記してある。記事は奇怪至極な話に満ちてゐるが、文章としては華麗なものである。明の胡應麟は、蕭綺が自ら撰して王嘉の名を借用したのだらうと云つてゐる。或は何とも知

拾遺記

れぬ、茲に〔拾遺記〕から一つの話を取り出さう。

〔劉向が成帝(前漢)の末に、天祿閣で書物を校閲し、専心に仕事をやつてゐると、夜に黄衣を著けた老人が、青藜杖をついて閣上にやつて來た、そして劉向が暗中で讀書してゐるのを見て、老人は杖の端を吹いて火を燃やし、劉向に開關以前の話をして聽かせた、劉向は因つて老人から五行洪範の文を教へてもらつたが、忘れないために、帛を裂いて、その教を記した、夜明になつて老人が去らうとするとき、その姓名を詢ねると、自分は太一の精である、天帝が卯金の子(卯金は劉)に博學なる者があると聞かれて、自分を遣はしたのであると云つて、懷中から天文地圖の書ある竹牒を出して、その概略を劉向に授けた、劉向の子劉歆は、父からその術を授けられた、劉向はその人が誰であるかわからなかつた〕

搜神記

〔搜神記〕は、東晋の元帝(三一七年——三二二年)の時著作郎となつた干寶の撰である。元來二十卷あつたが、漸次散逸して八卷となつた。今日二十卷となつてゐるものもあるが、それも舊の二十卷ではない。もとこの書は、干寶の父の婢が死んでから再生したのと、彼の兄が呼吸が絶えてまた蘇生したのと、二つの奇事に遭遇して、天地の間に鬼神といふものは有ること、神道の誣りならざることを發明するために撰したと稱してゐる。鬼神妖

怪の話が、中々面白く出てゐて、佛教の説なども混り、文章も雅致に富み、六朝小説中の白眉と謂はれてゐる。その一文を左に擧げる。

「豫章の太守張華は易が上手で、政刑にも明かであつたから、下吏や罪人も大に畏れて命令を犯す者が無かつた。また死刑を受ける者には、刑の執行前に、家に歸つて父母に暇乞をさせた。或時盗みのために死刑の判決を與へた者に對し、急いで刑の執行をすることゝなり、例によつて家に歸らせた。犯人はいよく、期限が來たので刑を受けるために家を出て、途中泣きながら趙朔の家の前を通ると、趙朔は何で泣いてゐるかと問うた。犯人の云ふことには、私は貧に通つて盗賊をはたらき、それがために死刑を申渡され、昨日太守に暇をもらつて、父母に今生の暇乞をしましたが、もう期限が來たので、これから刑を受けに行くところです、それで泣いてゐるのですと答へた。では逃けてしまへば可いではないかと云ふと、犯人は、太守は易の名人でありますから、逃げた者は皆捕へられます、それ故期限を違へず行かねばなりませんと答へた。そこで趙朔は、それでは汝は泣くに及ばぬ、俺が汝を生かしてつかはす、汝は俺の教へる通りにすれば死なずとも濟む、それは、此のさきの河を渡つたならば、竹筒に長さ三尺程水を入れて、腹の上に置き、黄沙の中に三日臥てから、家に歸れ、然らば誰も汝を捕へることはできぬと云つた。犯人はそれで

教へられた通りに行つた。司法官の方では期限が満ちても犯人が歸つて來ないので、その趣を張華に報告すると、張華は易を立て、六卦が出た、そして斷じて云ふことには、腹の上に水の深さ三尺あつて、背が黄沙に臥してゐるのは何故か、これ必ず此犯人は水中に投じて死んだのであるから、搜索の必要はない、これは易によつて明かであると決まつた。而して犯人は一年を経て姓名を改めて郷里に居り、遂に一命助かつたので、多くの贈物を趙朔に致したけれども、趙朔は受けなかつた」

「搜神後記」もやはり鬼神妖怪の話が載つてゐる書であるが、「搜神記」よりも簡單で、筆致も劣つてゐる。陶潛(陶淵明)の撰といふのは假託であつて、後人の偽作である。

「異苑」も奇怪な話をあつめたもので、宋の劉敬が撰したものと爲つてゐるが、現存のものは原書とは違ふだらう。劉敬は宋の初(四二〇年頃)に給事黃門郎と爲つた人である。「異苑」から一例を採れば、

「魏の時に殿前の大鐘が故無くして大に鳴つたことがある、人々は怪しんで張華にたづねると、張華は、それは蜀郡の銅山が崩れたので、鐘は之に應じたのであると云つたが、後で蜀郡からの報告で、張華の云うた通りであることがわかつた」

「續齊諧記」も今日存じてゐるものは、最初のものとは異なるであらうが、大體は吳均の筆で

搜神後記

異苑

續齊諧記

あらう。吳均はかつて齊春秋の編纂を命ぜられて、記述が不實であるといふので免職になり、後また復職して通史の編纂中に死んだと傳へられてゐる。「齊諧記」に續とあるのは、元來宋の東陽^{トウヤウ}無疑^{ムギ}が「齊諧記」七卷を撰したので、吳均はその續を撰したいふ意味である。尤も「齊諧記」七卷は皆散逸してしまつて遺つてゐない。「續齊諧記」の内容は「異苑」と同じく奇怪な鬼神譚である。その一例の概略を示せば、

「陽羨^{ヤウゼン}地名」の許彦が綏安^{スイアン}地名の山を歩いてゐるときに、年十七八の書生が路傍に臥てるのに出遇つた。書生は足が痛むから、驚籠の中に入れて伴れて行つてくれと頼んだ。許彦はそれは冗談だらうと思つてゐると、書生はほんとに籠に入つた。そして大きくもなない籠の中で、二羽の鷲と一緒に並んで坐つたが、鷲も大して驚かなかつた。許彦は、籠を負つて歩いたが、重くないやがて樹の下で休息をすると、書生が籠から出て来て、少し御馳走しませうと云つて、口から銅の箱を吐き出した。箱の中には、酒肴が揃つてゐた。暫く飲み合つてから、書生は、私は婦人を一人伴れて居りますから、今呼びますと云つて、口から十五六歳位の美しい女子を吐いて、また暫時酒を飲んだが、書生は酔つて眠つてしまつた。すると女子は、私はこの書生と夫婦ではありませんが、實は怨みがあるので、別に一男子を伴れて居ります。いま書生の眠つてゐる間に呼び寄せますから、この事をだまつてゐる

て下さいと云つて、年の頃二十三四の好男子を、口から吐き出した。そこで許彦とその男と挨拶をしてゐると、眠つてゐる書生が醒めさうになつたので、女子は口から屏風を吐いて、書生を遮つたが、やがて女子は書生と共に臥てしまつた。すると男子は許彦に向つて、この女は情があるけれど、眞實が足りない。私は別に一人の女を同行してゐますから、こゝで會ひますが、此事を洩らさぬやうに願ひますと云つて、その男子は口から年二十ばかりの女を吐き出し、共に飲み共に語つたが、書生が醒めさうになつたので、男子は今吐いた女を口の中に入れてしまつた。すると書生と共に臥てゐた女子が出て来て、書生が起きて來ると云ひさま、男子を呑んでしまひ、一人許彦に對して坐つた。やがて書生が起きて、失禮しました。もう日が晚いからお別れしませうと云つて、その女子を呑み、酒肴の器具も悉く口中に納め、二尺ばかりの銅盤をのこして、記念のためにと云つて許彦に與へて立去つた。後に許彦が蘭臺の令史となり、侍中の張散といふ者を饗應したとき、張散は銅盤を見たが、永平三年(後漢明帝の年號)作といふ銘があつた。

述異記

「述異記」もまた怪異な話を集めた書である。これは晉の祖冲之が「述異記」を作つたことがある。(今此書存せず)それを真似て、同名の書を偽作し、梁の任昉^{ニョウヘイ}の撰としたらしいが、實は任昉の作ではなく、唐宋人の偽作であらう。記載してあることも、他書の剽竊が多い。

「還寃志」は、佛法信者の顔之推の撰で、春秋時代から晋宋までの故事を、因果應報の理によつて説いたものである。つまり儒佛混合の書で、元來は教訓書として作つたものである。顔之推は博學にして文章に達した人だけに、還寃志も頗る名文との評がある。彼は初め梁に仕へ、後に北齊に仕へ、齊亡びて周に仕へ、最後に隋の太子に召されて學士と爲つたといふ、かなり苦勞もした人らしい。

「世説新語」は初め「世説」と名づけたものを、漢の劉向の「世説」と間違ふので、「世説新書」と稱したが、何時の間にか、「世説新語」といふ名に變つたのであるといふ。もと宋の臨川王劉義慶（四〇三年—四四四年）の撰といふが、一説では劉義慶は、大して文才のある人ではなかつたので、文士を集めて作らせたものではなからうかとも云はれてゐる。これは八卷であつたものを、梁の劉孝標が注を加へて十卷としたと、隋書の「經籍志」にある、今の三卷としたのは、宋（六朝の宋に非ず）の晏殊（一〇三〇年頃の人）が整理したものである。内容は三十八篇あつて、後漢から東晋までの事を記し、劉孝標の注も頗る觀る可きものである。その一例を擧ぐれば、

『石崇（晋時の人）は客を請じて宴會をするとき、常に美人に酌をさせ、客が充分に飲み乾さないといふと、黃門（宦官）に命じて、酌をした美人を斬らせた。ある時、王丞相と大將軍とが共に石崇を訪問した。王丞相はあまり飲めない人であつたが、無理に我慢して飲んで、すつかり沈酔してしまつた。大將軍は何度酌をされても飲まないで、どうかして飲ませやうと、すでに三人を斬つたが、顔色も變へず、尙飲まうとしない。丞相も一言すゝめてみたが、大將軍は、彼が自分で自分の家人を殺すのだ、何も貴殿に關係はムらぬではないかと云つた。』

「博物志」は、異境の奇物や古代の傳聞等を輯録したもので、大抵各種の書籍から抜き出したのが多く、一種の覺書である。晋の張華の撰といふも、その原撰ではあるまい。張華（二二三年—三〇〇年）は魏で太常博士に擧げられ、晋になつて、官は司空に上り、壯武郡公に封ぜられたが、趙王倫の變に殺された人である。

以上掲げた十種の書は、撰者の眞偽は別として、現今尙看ることのできる書である。また是等の書の外に、「西京雜記（晋の葛洪撰）」「神仙傳（同上）」「高士傳（晋の皇甫謐撰）」「金樓子（梁の元帝撰）」「華陽國志（晋の常璩撰）」「水經注（漢の桑欽撰、後魏酈道元注）」等にも、小説的の記載はかなり澤山にあつて、完全ではないが書卷も今日まで傳へられてゐる。

第六章 亡逸したる六朝小説

六朝頃の小説として、書卷の現存するものは前述の通りであるが、その外に、書名だけ遺つて書卷の亡逸したものの書卷は全く亡逸したが、内容の幾分か、他書に引用せられて、遺文を若干看ることのできるものに左の各書がある。

列異傳

〔列異傳〕三卷

これは魏の文帝二二〇年―二二六年の撰と云はれ、内容は鬼神怪物の話である。たゞし文中に、文帝より後のことも書いてあつたさうだから、後人が若干文章を増加したが、或は全然後人の偽作であつたかも知れぬ。

兩唐志

〔兩唐志〕

張華の撰といはれるが、別に證とすべきものはない。多分魏晉人の作であらう。遺文の他書に引かれてゐるものから一例を示せば、

『武昌の新縣の北山の上に望夫石がある。傳ふる所では、昔貞婦があつて、夫が出征して遠く國難に赴くとき、幼子を携へて、此山まで見送り、立つて望んでゐる中に、石となつた』

〔靈鬼志〕

晉の荀氏の撰といふ。

〔異林〕

晉の陸氏の撰といふ。

〔甄異傳〕

晉の戴祚の撰といふ。

〔述異記〕

晉の祖沖之の撰といふ。梁の任昉の撰と稱せらるゝ、述異記とは同名異書である。

〔志怪〕

晉の祖台之の撰といふ。

〔神異記〕

晉の道士王浮の撰といふ。その一例を示せば、

『陳敏は孫皓の世(約二七〇年)に江夏の太守と爲つて、建業から赴任の途中、宮亭の神廟は靈驗があるといふことを聞いて、在任中無事であれば、銀杖一本寄進すると祈願をした。後に任期が満ちて、杖を廟に寄進することゝなり、鐵棒を心にして、表面に銀を塗つた』

神異記

杖を作つた。そして彼が散騎常侍といふ任を拜して行くとき、その杖を廟に寄進してそのまゝ出發したところが其晩に神が巫に降つて、陳敏は初は銀杖を寄進すると約しながら、めつきの杖を與へたから、水中に投じて還してやれ、詐欺の罪は容すことにはならぬとの宣託があつた。巫は杖を取つて中をみると果して鐵棒である。そこでそれを湖の中に置くと杖は水上に浮び、飛ぶやうな速さで、陳敏の乗船に走つていつて突きあたり、乗船は顛覆した。

〔幽明録〕 三十卷

宋の臨川王劉義慶の撰といふ。大體搜神記風のもので、前人の作を集めたものらしい。

〔齊諧記〕 七卷

宋の東陽無疑の撰といふ。

〔宣驗記〕

宋の劉義慶の撰といふ。

〔冥祥記〕 十卷

齊の王琰約四六〇年頃の撰といふ。彼は幼時に交趾で五戒を受けた佛徒である。故に記の内容も多く之に關係があることは、他書に引いてある本書の遺文でわかる。晉の

趙泰といふ者が、地獄で役人となり、それで祖父母や二弟に會し、また此世に蘇生して來る話などは一寸面白い。

〔集靈記〕

隋の顏之推の撰といふ。

〔旌異記〕

隋の侯白の撰といふ。右の中、宣驗記以下四種は、神佛の靈驗や因果の實證を述べたものと推せらるゝ書である。

〔語林〕 十卷

これは晉の隆和(三六二年)頃に裴啓の撰したもので、漢魏以來の人の談片や言語を記録したものであるが、隋の時には亡逸してしまつたさうだ。他書によつて、その遺文の一例を挙げれば、

『魏の武帝が云つた、我が眠つてゐる間は、妄りに近づいてはならぬ、近づくとその人を斬り殺しても醒めぬのだから、皆よく注意せよと、その後いつはつて寒さうに眠つてゐると、平素愛してゐる兒童が、そつと夜具を持つて來て掛けた、すると忽ち斬り殺してしまつた、それ以來は誰も近づかなかつた』

「郭子」三卷

晉の郭澄之の撰といふ。これも、遺文によれば、語林など、同類の書であつたらしい。

「俗説」三卷

梁の沈約しんやく五〇〇年頃の撰といふ。「世説新語」に類したものであつたらしい。

「小説」三十卷

梁の武帝が殿芸けん芸に勅命して作らせた書である。これは各書から採集して、時代の順序に編纂したものである。先づ帝王の事を初に挙げ、餘は周から南齊までに及んでゐる。その書は今亡逸して居るが、他書に輯録してあるものから一例を抜けば、

『孔子がある時山に遊んで、子路をして水を取らせた。子路は水のある所で、虎に出逢ひ、奮闘の上虎の尾を抜いて懐中に入れ、水を取つて還り、孔子に向つて、上士は虎を殺すにどうしますかと問うた。孔子は、上士が虎を殺すには虎頭を持つと答へた。然らば中士が虎を殺すにどうしますかとまた問ふと、孔子は、中士が虎を殺すには虎耳を持つと答へた。子路はさらに、下士は虎を殺すにどうしますかと問ふ。孔子答へて、下士が虎を殺すには虎尾を持つと云つた。そこで、子路は尾を出して棄て、しまつたが、先生は水のある所に虎が居ることを知つて、自分に水を取らせたのは自分を死なせやうとしたのだと孔子

小説

笑林

をうらみ、石盤を孔子に投げつけるつもりで、之を懐中に入れ、また孔子に向つて、上士は人を殺すにどうしますかと問うた。孔子は、上士が人を殺すには筆端を用ゐると答へた。子路は、中士が人を殺すにはどうしますかと問ふ。孔子答へて、中士が人を殺すには舌端を用ゐる。子路また問うて、下士が人を殺すにはどうしますか。孔子答へて、下士が人を殺すには石盤を懐にすると云つたので、子路は石盤を棄てた。そして心服するやうになつた』

「笑林」三卷

これは笑話の書で、後漢の邯鄲淳かんたんじゆんの撰したものである。邯鄲淳は魏に入つて、博士給事中と爲つた人である。この書は今傳はらないが、笑話文學の権輿であると云つても可い。遺文によつて一例を挙げれば、

『魯に、長竿を持つて城門を入らうとする者があつた。はじめ豎に持つて入らうとしたが入ることができないので、横に持ちなほしてみたが、やはり入ることができない。そこで、途方にくれてゐると、折から老人が来て、わしは聖人ではないが、経験は積んで居る者だ。竿を鋸で切らなければ入られる筈はないと云つたので、その人はその言に従つて竿を切つた』

「解題」二卷

隋の楊松玢やうしゆうけんの撰といふ。やはり笑話集らしい。

「啓顔録」二卷

隋の侯白の撰といふ。侯白は滑稽で辯舌に巧みな人であつたさうである。この書も亡逸して見ることはできぬが、遺文は他書に澤山引いてある。その一例を擧ぐれば、

『山東の人が蒲州の女を娶つた、その女の母の頸には大きな瘤があつた、結婚後數月経つて、女の父は婿が愚鈍ではないかと疑ひ、親戚を請じて宴會を催し、席上で婿を試みることにした、女の父云ふ、婿どのは山東で讀書して居なさるから、道理には明るいこと、思はるゝが、鴻鶴のよく鳴くのはどうしたわけです、婿答へて、自然にさうできてゐるからです、女の父云ふ、松柏の冬青いのはどうしたわけです、婿答へて、それも自然にさうできてゐるからです、女の父云ふ、路傍の樹木が瘤だらけなのはどうしたわけです、婿答へて、やはり自然にさうできたのです、女の父は此等の答をきいて、婿どのは何も知りなさらぬ、鴻鶴のよく鳴くのは頸が長いからです、松柏の冬青いのは心中が強いからです、路傍の樹木に瘤があるのは車が擦れるからですと冷笑しつゝ、云つた、すると婿は、蛙はよく鳴きますが頸は長いでせうか、竹は冬青いが心中が強いでせうか、母上の頸に瘤がある

幼稚なる小説

厭世的觀念

迷信の記録

のは車が擦れたのでせうかと云つたので、女の父は一言も返すことができなかつた』
想ふに六朝前後の小説は大抵神怪變異の範圍を脱せず、その記述も別段に小説創作の意識がはたらいてゐたわけではないから、大體は、單に事柄の列記に過ぎない。間々若干の潤色を加へたものも無いではないか、小説として看るならば、誠に幼稚極まるものである。一たい六朝前後の世態は、政治的には騷亂が絶えず、人民は常に兵火に苦んで居たのであり、思想方面では、道教と佛教の衝突と融化とが起つて、一般に厭世的の觀念が人の頭腦を支配する傾向があつた。斯ういふ境遇に在ると、清廉な者は自から世塵を避けて清談を喜ぶやうになり、俗人は迷信に深入りして怪異の説を好むやうになる。漢の終りに起つた張角（一九〇年頃）の黄巾の賊の如きは、迷信的秘結社で、非常に猖獗を逞うしたのであるが、六朝の頃は一層民間の迷信が甚だしかつたものと思はれる。その迷信の記録が六朝の小説であると謂うても差支へあるまい。

尙こゝに一言述べて置き度いことは、晋末の高士陶潜（約四〇〇年頃）の作つた桃花源記のことである。これは一種の隨筆で、小説とは謂はれぬけれども、田園詩人たる陶潜の寓意に出たもので、いかにも彼の理想とする平和境が、短文の間によく表現せられてゐる。後世唐人の傳奇小説等の筆致は、斯くの如きものから暗示を多分に受けて發達したものである。

である。

源陶
記の
桃花

「晉の太元中に、武陵に魚を捕ることを職業としてゐる人があつて、溪にそふて行くうちに路の遠近を忘れ、忽ち桃花の林に出た。岸の兩側數百歩は、桃ばかりで他の樹は無く、花は美しく咲き、落花はしきりにひるがへつてゐた。その漁人は不思議に感じながら、林の奥まで見届けやうとしてさらに進むと、林は水源で盡きて、そこに山があり、山に小さな口があつて、その中が明るく見えた。彼は舟から上つて、その口に入ると、はじめは、やつと人が通れるくらゐの狭かつたが、數十歩すると廣々した平地に出た。家屋もあるし、良田美池、竹桑の類もあり、道路も整つて、雞や犬の聲も聞こえる。そして皆農耕をはげみ、男女の服装も當時の風ではなく、黄髪を後に垂らし、いづれも愉快らしい。彼等は漁人を見て大に驚き、何處から来たかと問うた。漁人は、ありのまゝを答へ、今家に歸らうと思ふと告げると、彼等は酒を備へ雞を殺して馳走した。また村中の人が聞きつたへて出て来て種々詢ねたりした。そして彼等は、自分達は祖先が秦の時の亂を避けて、妻子や邑人を伴れてこの絶境に來たのだが、それ以來他に出ないから、外の人とは全く交通してゐない。一たい現今は何の世ですかと問うた。彼等は漢をすら知らないから、魏や晉等はもとより知らない。漁人は一々自分の知つてゐることを話してきかせた。それから村民が各自の家

に漁人を招待して酒食を出してくれたりした。數日滞在の後、彼はこの村を辭したが、村民の一人は、別段案内をすることも要るまいと云つた。やがて彼は村を出て舟に乗り、路筋を誌しながら歸り、郡下に至つて太守にその旨を届出た。そこで太守は人を遣つて漁人と共に以前の路をたどつて行かせたが、路に迷つて行きつくことができなかった。南陽の劉子驥は高尚の士である。その話を聞いて、喜んで行くことにしたが、行かない中に病氣に罹つた。その後は誰も行つた者は無い。」

第七章 唐代の傳奇

小説形式の
三體

支那小説の記述形式を見ると、凡そ三つに別けることができる。第一は叙事體、第二は演義體、第三は詩歌體である。叙事體の小説は、最も古い、而して原始的の形式である。唐及びその以前の小説は悉くこれに屬する。演義體の小説は、宋に於て起つた。これが發達して、元に及んでは見事な小説があらはれるやうになつた。詩歌體は、後の戯曲を産み出したのである。

唐(六一八年—九〇五年)は支那文化史に於ては、各種の文物制度に大飛躍を遂げたときで、後世の模範になるやうな事が夥しくある。文學方面では詩に於て最も驚嘆すべき黄金時代を造り出した。而して小説の方面でも、六朝時代に比べると際立つた進歩を見せてゐる。唐の小説には創作意識がある。六朝小説の如く單なる記録ではない。従つて内容の範圍も廣大となり自己をモデルに使つた小説(たとへば會眞記の如き)等もあらはれるに至つた(晉の陶潜の五柳先生傳等も自己のことを述べたのであらうが、あれは一種の寓言で、小説ではない)。

唐詩と小説

然しながら小説記述の形式は尙叙事體であり、そして多くは短篇である。文章も當時の文豪の手に成つたものが多いから、中々絢爛であるが、之を同じ時の詩に較べると一段も二段も劣つてゐる。何と云つても當時の文運から視て、小説は未だ雄篇大作の出る時機に達してゐなかつた。

たゞ六朝以前に於ては、小説とはいふものゝ、實は一種の奇談集であり逸話集であるに過ぎなかつたが、唐では小説の分化作用が起りはじめて、奇談逸話との間に模糊たる限界が生じた。尤もその限界たるや甚だ明確ならざるものではあるが、兎も角も裴鏗(八八〇年頃)が傳奇といふ語を以て、單なる奇談逸話と區別するだけの特色は出來上つたのである。

唐の傳奇と云へば、畢竟唐の小説といふことである。後世になつては、傳奇とは戯曲を指すことになつたが、唐代ではさうした意味には用ゐて居らぬ。

いま茲に唐代小説の有名なるもの若干を取つて、その梗概を紹介すれば、

會眞記

〔會眞記〕

これは唐の元稹(八〇〇年頃)の作である。元稹は白居易樂天等と同時代で、當時文名の大に揚つた人である。この會眞記は、元稹が自己をモデルにして書いたものとして大に

西廂記の源
泉

名高い傳奇である。たゞ文章といふ點から觀れば、大した名文ではなく、元稹の筆としては多少物足りない感がある。また内容も特に奇抜な處はない。けれども此一文が後世に於て雜劇西廂記を産む源泉となつたことを想へば、支那小説戯曲の研究に於て見逃がすことのできぬ重要な傳奇である。

『唐の貞元の頃、張生といふ者が居た、性質温厚で容姿も美しく、二十三歳まで女色に近づいたことはなかつた、彼はある時蒲(地名)に行つて普救寺に寄寓したことがあつた、その頃崔氏の未亡人も長安に歸る途中で同じ寺に居つたが、未亡人は張生の異派の従母にあたる人であつた、時に渾瑊が薨じ、軍人がそれを機として蒲人を擄掠しはじめたので、崔氏は甚だ心配に耐へなかつた、ところが幸にも張生は蒲將に友人があつたので、これに頼んで保護をしてもらつてゐる間に、十數日經つて、廉使杜確が來て軍を治めたから、騒亂も遂に平靜になつたのであつた。

崔氏は非常に張生の厚意に感じ、宴を催して彼をもてなした、その席上で彼は崔氏の女鶯々を見て愛着を感じた、その後には彼は鶯々の侍女紅娘にたのんで、自己の意中を通ぜしめたが、色よい返事がない、遂に彼は春詞二首を作つて送ると、その夕紅娘は鶯々から託せられたと云つて一通の綵箋をもつて來た、それには明月三五夜と題して、斯ういふ

詩が書いてある、月を待つ西廂の下、風を迎へて戸は半ば開く、牆を隔て、花影動く、疑ふらくは是れ玉人の來ると、張生は之を見て大に喜び、その夜、杏の樹を攀ぢて牆を越え、西廂に達して待つてゐると、鶯々は端嚴な様子で出て來て、大に張生の無禮を責めて去つてしまつた。張生の失望は非常であつた、それから數日經つたある夜に、鶯々は突然紅娘の案内で張生の寢てゐる處を訪ひ、遂に張生に處女の誇りを捧げ、天明に及んで歸つて行つたが、つひに其夜は一言も發しなかつた、それから十餘日間は音沙汰も絶えたので、張生は會眞詩三十韻を作つてゐたが、また紅娘を介して鶯々にそれを贈つた、それで鶯々はまた張生の許に來るやうになり、夜入つては朝出で、一ヶ月ばかりそれが續いた、そして張生は試験を受けるために鶯々と悲しい別れをして旅立つた。

明年試験に失敗したので、長安にとゞまり、鶯々にその旨を通知すると、鶯々からも情を籠めた返書に數件の物品を添へて送つて來た、その時張生の友人にその話が傳はつたので、楊巨源は崔娘詩一絶を賦し、元稹も張生の會眞詩三十韻を續いだりした。その後張生は鶯々の如き美人は、自分の如き不徳の者が占有すべきものではない、今後尙關係を續けてゆけば、却つて想はぬ崇りを受くるものであるとて、全く鶯々のことを斷念した。後一年餘りして、鶯々は人に嫁し、張生も妻を娶つた、それから張生は鶯々の夫を通

じて、外兄として鶯々に面會をもとめたが、鶯々は終に顔を出さず、詩二章を作つて謝絶の意を示した、その一は「別れてより後容光を減じ、萬轉千廻床を下るに、懶し、傍人のために羞ぢて起たざるにはあらず、郎のために憔悴し却つて郎に羞づ」その二は「棄置して今何をか道ふ、當時且つ自ら親しむ、還舊來の意をもつて、憐取せよ眼前の人」此後つひに二人は全く相隔たつてしまつた』

以上は會真記の概略であるが、これは元稹がその表妹を誣ひて作つたものであるとせられてゐる。鶯々がはじめに詩をもつて張生を誘ひ、張生が來ると却つて眞面目な態度で彼を責問し、後みづから張生と會し、一夜の歡を共にしたが、一言なくして去るなどは、いかにも支那上流家庭の處女の氣持をよく表はしてゐると思ふ。

海山記

「海山記」

これは韓偓(八九〇年頃)の作で、隋の煬帝の誕生から即位、それから贅澤を盡して遂に江都の離宮で自殺してしまふ迄の次第を述べてある。これは文章に餘程俗語が多く混つてゐるが、一たいにあまり名文ではない。故に韓偓の作ではなく、宋人の僞作であるといふ説もある。その梗概を記せば、

「隋の煬帝が生れたときには、種々不思議な現象が起つた、父の文帝は、此兒は家を破るも

のであるとて、心中憂慮してゐた、文帝が崩じて、煬帝が天子の位に即くと、いよく驕慢を發揮して、周圍二百里の西苑を開き、珍奇な鳥獸草木をあつめ、苑内に十六院を建て、一院毎に二人の美女を置いた、また四方十里ある湖水五つを造り、その間に宮殿や築山を設け、さらに周圍四十里の北海を鑿つて、その中に三山を築き、臺榭廻廊を設けた、五湖と北海は溝を以て通じ、煬帝は船に乗つてこの間を遊んで楽しんでゐた、ある夜、帝が北海で船遊びをしてゐるとき、一隻の小舟がしづかに近づいて來たのを見た、よく見ると、帝の幼年時代に仲善くした陳の後主である、陳の後主は、すでに死んだ筈であつたが、帝はそれを忘れて、喜んで迎へた、後主は、長篇の五言詩を出して帝に看せた、その詩は、煬帝の驕奢をそしつたものであつたから、帝は怒つて叱りつけると、後主は、その元氣も長くは續くまい、一年後には吳公臺下でお眼にかゝらうと云つて、水中に没した、帝は、はじめて後主がすでに死んだ人であつたことを想出し、心中不安でたまらなかつた。

ある日、明霞院の楊夫人が來て、玉李の樹が一夜の中に繁茂したと報じた、その後、辰光院の周夫人から、楊梅が一夜に繁茂したと報じて來た、それから後兩樹とも實を結んだので、帝に獻じた、帝は院妃に、二果いづれが良いかと問ふと、院妃は、玉李の方が甘くて良いから、皆玉李を好みますと答へた、帝は梅をきらつて李を好むのは人情であらうか天

意であらうかと嗟嘆した、後に帝が揚州に幸せんとするとき、楊梅が枯死してしまつたが、果して帝は揚州で崩ぜられた。(李は唐の姓、楊は隋の姓)

またある日漁夫が洛水で捕つた鯉を獻じた、金鱗緒尾まことに美しい、帝は感心して、漁夫の姓を問はせたが、姓は解といふも名はわからない、そこで帝は朱筆で、解朱の二字を鯉の額に書いて、北海に放つた、後に帝が北海に遊ぶと、その鯉は丈餘に生長して浮び上つて來た、額の字を見ると、朱の字はそのまゝで、解の字は角偏だけほんやり残つて、旁は消えて居た、帝の側に居た蕭后が、鯉に角があれば龍でありますと云ふと、帝はそれは自分も知つてゐると、弓をもつて射たので、鯉は水中に没した。(鯉の音は李に通ず、龍は皇帝の象徴)

その後、帝は王義といふ宦官を愛して、常に側に置かれた、そして江都に幸せられて後、帝もいよく天下の人心己れを離れ、禍が旦夕に通つてゐることに氣づかれた、その時、王義は帝の驕奢のため萬民が苦み、遂に天下の救ふべからざるに至つたことを詳細に記して上奏し、而して自ら刎ねて死んだ、後數日にして、司馬戡兵を率ゐて帝に迫り、帝をして自縊するの餘儀なきに至らしめた。

隋の煬帝に關する傳奇は、『海山記』の外に、『迷樓記』と『開河記』とがある。いづれも韓偓の作

と稱せられるが、大體の筆致は海山記と同じであるから、海山記が後人の偽作とせられる上は、此二書も同一人の偽作と考ふべきであらう。

迷樓記

〔迷樓記〕

『隋の煬帝は晩年甚だ女色に溺れ、項昇といふ技師に命じて、人夫數萬を役し、一年以上を費して、大建築をやつた、樓閣高下、幽房曲室相連なり、千門萬戸上下金碧まばゆく、その工程の巧美は古より未だ有つたことのないもので、人がその中に入ると、終日出ることができない位であつた、煬帝は大に喜び、迷樓と名づけ、多數の美人をその中に蓄へて、常に淫樂に耽つた、或は官女と任意車に同乗して樓閣の間をめぐり、或は淫猥な圖を壁に懸け、或は銅屏の鏡を寢室に環らしたりして、痴態の限りを盡した。

ある日、王義の諫によつて、暫く淫蕩なる生活を罷めやうと考へ、靜室に入つて二日を過ぎしたが、とても我慢しきれず、また室を出て一層淫逸な所行を續けた、大業九年、帝が再び江都に幸せんとするとき、迷樓に居る官女が、河南に楊柳謝し、河北に李花榮ゆ、楊花は飛び去つて何處にか落つる、李花は果を結び自然に成らんと唱つてゐるのを聽き、その官女を呼んで、それはどうした歌であるかと問ふと、民間に今流行してゐる歌であると答へた、帝も、これは天の啓示であらうと深く感じ、酒を索めて、親ら唱ふ、宮木陰濃く燕子

飛ぶ興衰は古より漫りに悲を成す他日迷樓更に好景ならん、宮中豔を吐き紅郵を戀ふ
臣下は此の歌の暗示することがわからなかつたが、帝は後にわかる時が来ると云つた、
その後帝江都に幸し、唐の兵が京に入り、太宗は迷樓を焼いてしまつた』

開河記

開河記

これは隋の煬帝が洛水黄河淮水を貫いて大運河を開鑿し、自己遊幸の用に供したことを記したものである。麻叔謀を開河都護として、人員五百四十三萬を役し、開鑿の工程をすゝめたが、途中で古人の墓陵を發掘し、奇怪な事件が頻々として起つたりする。

『工事成つて、帝は大船五百隻を造らしめ、多數の群臣官女を隨へて、運河を航した、舳艫相繼いで、千里の間聯綿として絶えず、錦帆の過ぐるところ、香百里に聞こゆる有様であつた、ある所では渠の掘り方が淺く航行に不便であつたといふ理由で、その區域の工事を分擔した土民を縛して、岸下に倒さに埋むること五萬人に達した。』

『海山記』迷樓記「開河記等の記事は、後代の小説『隋唐演義』や『隋煬帝史』にも多くの材料を提供してゐる。また煬帝の豪奢の名残りたる運河は、今日支那で、南北交通の要路と爲つて、世人に尠からぬ便益を興へてゐる。』

柳毅傳

柳毅傳

これは唐の李朝威の作である。事件も珍しく文章も佳いので、かなり著名な傳奇である。金の時の雜劇にも、これを材料としたものがあり、元曲には『柳毅傳書』も出來た。また元曲の『張生煮海』も『柳毅傳』から思ひついたものである。清の李漁は、さらにそれを折衷して傳奇『蜃中樓』を作つたのである。

『唐の儀鳳(六七六年)の頃、柳毅といふ儒生が、文官試験に落第して、湘濱に歸る途中、溼陽の附近を馬に乗つてゆくと、鳥がふいに飛び立ち、馬が驚いて六七里も狂奔して、やつと止つた。そこには美しい女が憂へ顔して、羊を牧しながら立つてゐた。その様子が怪しいので、柳毅が詢ねてみると、女は泣きながら、妾は洞庭龍君の娘で、この涇川の次男に嫁入つた者であります。夫は道樂者で仕方がムりません。これを舅姑に訴へても、却つてわが子にひいきして、益々妾を苦しめます。洞庭の生家に通信しやうにも、長天茫茫と遠く離れて、致しかたがムりません。幸にあなたは洞庭の近くにお歸りになる方、どうか手紙を一通持つて往つては下さりませぬかと頼んだ。』

柳毅は、手紙は届けてやつても宜しいが、洞庭の水深く、人間には往くことができないと云ふと、女は洞庭の南に社橋といふ樹があるから、その帯を易へて、三回樹を撃てば、案内

者が出て来ると教へた、柳毅はまた女に何故に羊を牧してゐるのかと問ふと、これは羊ではなく、雨工といつて電霆の類であると答へた。

やがて柳毅は女に別れ、一先づ郷里に歸り、それから洞庭に往くと、果して社橋があつた、彼は女の云つた通りを行ふと、忽ち波間から武夫が出て来て、彼を導いて水を分けて進み、見事な宮殿に入つて、彼を待たしめた、暫くすると洞庭君は紫衣を著、青玉を手にして出て来たので、彼は託せられた手紙をわたし、女の現状を聞いたまゝに話すと、洞庭君も非常に彼に感謝した。宮中の者も皆傳へ聞いて哀れを催し、涙を流して泣きだした、その泣聲をきゝつけて、俄に長さ千尺にあまる赤龍があらはれ、電目血舌朱鱗火鬣、見るから物凄き大怪物、雷の如き聲を發して、青天をひらいて飛び去つた、この赤龍は、洞庭君の弟錢塘といふ者で、頗る剛勇であつた、かつて堯の時代に怒つて九年の洪水を起した程の剛の者であるが、今洞庭君の女が苦しんでゐると聽いて、救ひに往つたのである。

暫くすると祥風慶雨融々怡々として至り、美しき行列がやつて来たが、その間に一入氣高く見えたのは涇川に嫁いでゐた女であつた、やがて錢塘も姿をあらため紫衣を著、青玉を手にして坐に入り、柳毅に挨拶した、錢塘は先刻涇陽に至り、大に戦つて、女の夫を食ひ殺し、中間に天に上つて上帝に届け出で、そして歸つて来るまでに僅かに一時しか費

さなかつた。

その後數日間、柳毅は宮殿に於て非常な款待を受け、各種の珍寶を贈られ、尙錢塘より兄の女を娶つて呉れよと勧められたが、それを辭して一先づ洞庭を出て家に歸つた。柳毅は、その寶を賣つて大富豪となり、妻張氏を娶つたが、死んだので、次に韓氏を娶つたが、これも數月にして死んでしまつた、その後彼が金陵に移り住むと、范陽の人盧氏の女を世話する者があつたので、之を娶つた、その女が、いかにも昔日の龍女に似てゐるから、彼は前に斯様なことがあつたと話すと、世の中にそんな事はムリですまいと云つて笑つてゐた、後一年餘にして一子を産み、一ヶ月ほど経つて、實は妾は昔日の龍女であると、その素性をあかし、若し子の出来ぬ時に眞實を語れば、離縁になることを恐れ、只今申す次第でありますと述べた、柳毅は大に感じて、永く夫婦たることを約し、南海に移り、つひに洞庭に歸つて神仙となつた、彼の表弟薛誠はかつて洞庭湖上で柳毅に會ひ、仙藥五十九を貰つた。

虬髯客傳

「虬髯客傳」

唐の張説（たうたつ）の作である。これも唐の傳奇の中では、かなり有名なもので、明の戲曲「虬髯翁」や「紅拂記」は之を粉本にしたものである。

隋の煬帝が楊素に命じて西京を守らせてゐた頃、素は奢侈傲慢で、客に會ふ場合でも牀上に踞したまふ、美人を側にならべて、應對するといふ態度であつた。李靖(唐の功臣衛公)が一布衣の時に、かつて楊素に面謁したが、やはり無禮な態度であつたので、李靖は憶面なく之れをたしなめた。それで楊素は態度をあらためて、大に李靖と天下の大事を論じた。その時、座に紅拂(赤い塵拂ひ)を持つた妓女が立つてゐたが、しきりに李靖を見てゐた。

李靖が旅宿に歸ると、その夜の五更の頃、門を叩いて訪ねて來たものがある。李靖は起つて門を開くと、一人の若い男であつた。それを室内に通したところが、衣を脱し帽を去ると、意外にも十七八の美女である。誰かと問へば、楊家の紅拂妓であると答へた。彼女は今後どうか御側に置いて下されと切に頼んだ。そして李靖の間に答へて、彼女は姓は張氏で、長女に生れたものであること等を告げた。李靖はこの女を得たものゝ、若干不安を感じてゐた。數日の後に、追手が女の行衛を探してゐるといふ噂があつたが、搜索も大して厳しくなく、彼女は男装して馬に乗つて出た。

李靖が太原に歸る途中、靈石に宿つてゐると、ちんばの驢に乗つた赤髯の客が來た。女はその人の姓を問ふと、張と答へた。女は、妾も張であるから、兄妹に違ひないと云つて、李靖

を呼び、三人車座になつて食事をした。その時、李靖が酒一斗を取つて出すと、客は、拙者は着を所持してゐると云ひ、革囊を開くと、中に人の頭と心肝とがある。その心肝だけを引出し、匕首で切つて食ひながら、此人は天下の心に負いた者である。十年間の憾みを、やうやく今霽らすことができたと云ひ、また、足下は今から何處に往くつもりかと問ふた。拙者は太原に往かうとしてゐると答へた。そして太原には、李といふ同姓の二十ばかりの青年がある。それは凡人ではないから、會ひに往くのであると話すと、客は拙者も其人に會つてみたい。明朝早々汾陽橋で拙者を待ち合はせてくれと云ひ、畢つて、驢に乗り、飛ぶやうに去つてしまつた。

李靖は女と共に太原に往くと、果して、虬髯客に出會つた。彼等三人は、李靖の友人劉文靜の紹介によつて、李といふ青年に逢つたが、神氣揚揚として天子の品格を備へてゐるのに、虬髯客は大に感嘆した。

その後、虬髯客の友人たる一道士も、李青年を見て、たしかに天子と爲るべき人であると断定した。

虬髯客は李靖と女とに對して、京に往つたならば、拙宅を訪ねてくれと云つたので、李靖等は約の如く、虬髯客の家を訪ねると、堂々たる莊麗な家屋で、婢四十人庭前にならび、奴

二十人李靖等を案内して客間に請じた、物品調度いづれも立派なものであつた、やがて虬髯客は妻と共に出て来て、李靖と紅拂妓とを厚く歡待し、食膳奏樂いづれも善美を極めたものであつた。

酒食が済むと、家人をして二十箱を昇ぎ出させ、李靖に向つて、これは拙者の所有する錢である、實は拙者は天下に一大事を爲す志をもつてゐるが、今は不要であるから、足下に進呈する、太原の李氏は、眞の英主である、足下は彼に仕へて功を立つれば、人臣を極めることができるであらう、此後十年にして、東南數千里外に事件が起つた時は、拙者の志を得るときであるから、御兩人は酒をそいで祝つて下されと云ひ、家人をあつめて、この方々が今後汝等の主人であると告げ、虬髯客夫妻は一奴を従へて、馬に乗つて去るよと見る間に、もう姿は見えなくなつてしまつた。

李靖は俄に富豪となり、後に太宗皇帝の國家統一を助けることができた、貞觀十年に李靖が平章事たるとき、南蠻人が奏して、海船千艘、甲兵十萬、扶餘國に入つて、その主を殺して自立したと報じて來た、李靖はそれは虬髯客が成功したものであると、家に歸つて妻張氏と酒を東南に向つてそゝぎ祝拜した。

この話では、扶餘國が東南に在るやうになつてゐるが、扶餘は今の東三省吉林あたりに

在つた國である。そして唐の頃は、百濟が扶餘の後裔であつたが、貞觀十年頃に他から征服されたことはない。これ等は無論作者のこしらへ事である。

鹽谷文學博士は、唐代の傳奇小説を四類に分ち、(一)別傳類 (二)劍俠類 (三)豔情類 (四)神怪類とせられた。此の分類によると、初めに擧げた會眞記は豔情類に入り、「海山記」「迷樓記」「開河記」は別傳類に入り、「柳毅傳」は神怪類に入り、「虬髯客傳」は劍俠類に入るのである。

尙唐の傳奇の中、比較的人口に膾炙し、後世の小説戯曲等に關係のあるものに就いて更に述べれば、

「李林甫外傳」無名氏

李林甫は唐の玄宗の時の宰相であるが、口に蜜あり腹に劍ありと云はれた陰險な人で、自己に不利な者は、片端から誅殺したと傳へられる。この「外傳」によると、

「彼は若い時遊び好きの怠け者であつたが、一道士が彼を見て、足下は仙籍に名を列してゐる者、白日に昇天するのと、二十年間宰相の位に在るのと、いづれか好む方を選べと云つたので、宰相になる方を選んだ、後に宰相になつてから不徳の行が多かつたので、また道士が法術を以て彼を別世界に誘ひ、大に彼を戒め、六百年後に足下は此處に來るのだと告げて、彼をその宅に歸し、道士は何處かへ往つてしまつた。」

李泌傳

安祿山は常に李林甫を畏れてゐた。安祿山には五百の陰兵が左右を守護してゐるのだから、さう人を畏れなくても可い筈である。ある道士が、兩人會見の處を窺ふと、李林甫には、青衣の童子が香爐を捧げて侍してゐるので、陰兵等は遠く逃げてゐたさうである。』

〔李泌傳〕 李肇撰

李泌は唐の玄宗以後四代にわたつて仕へた賢相である。この文は李泌の幼時に、非凡の神童であつたことから説き起し、衡山嵩山に遊んで神仙に逢ひ、道術を授かり、後に京師に歸つて朝に仕へ、しばしば大功を立て、またしばしば讒言に陥れられたが、富貴の慾なく、常に誠を以て事に當り、自ら仙道を修養したことが述べてある。そして彼の死んだときに、途中で彼に逢つた者があつて、行先を詢ねたところ、これから衡山に往くと答へたとある。此文の後半には彼の逸話が記してある。

一 東城老父傳

〔東城老父傳〕 陳鴻撰

これは鬪雞の名手賈昌の傳で、十三歳ですでに鬪雞の妙を得て、玄宗に愛せられ、神童と稱せられたことから、安祿山の亂に京師が陥つて後、賈昌はひたすら佛法を信じ、遂に僧と爲つたことを述べてある。彼は鬪雞家であつたが、一面に天下の事情にも通じ、北方の胡が京中に雜居して、風俗の變遷してゆくのを慨歎してゐた。

梅妃傳

〔梅妃傳〕 曹鄴撰

〔江采蘋〕といふ美人が、玄宗の侍臣高力士に民間から見いだされ、宮中に入つて梅妃と名づけられ、その才色によつて玄宗から非常に寵愛せられたところ、楊貴妃が入り込んで來てから、その方に寵を奪はれ、悲怨に耐へなかつた。ある時久し振で玄宗と舊歡を叙してゐると、楊貴妃が踏み込んで來て、玄宗は散々に苦しめられた。

その後梅妃は高力士にたのんで、天子に意を通じやうとしたが、力士も楊貴妃の勢力を恐れて肯き入れなかつた。

安祿山の亂のとき、楊貴妃は殺されたが、梅妃はどうなつたか初めわからなかつた。後に玄宗は夢を見て、梅妃が温泉湯池の側の梅樹の下に埋まつて居ることを知つて、之を厚く改葬した。

世に傳ふる所では、梅妃は瘦形の美人で、楊貴妃は肥えた美人であつたといふ。尙此傳は宋の南渡前後の作で、唐人の作ではないと謂はれてゐる。

楊太真外傳

〔楊太真外傳〕

楊太真とは、玄宗の妃楊貴妃のことである。初め楊貴妃が蜀に生れ、開元二十二年に玄宗の子壽王に嫁いでゐたことから、後に玄宗に想はれ、宮中に入つて女道士となり、太真と

號し、さらに還俗して玄宗の妃となつて貴妃と呼ばれ、後宮の寵を一身にあつめ、一門の榮華を誇つたが、安祿山の叛するに及んで、つひに三十八歳を以て馬鬼に死ぬまでのことを書いたものである。文の終りに楊貴妃が東海の仙山に住してゐること、玄宗が楊貴妃を追念して崩すことを述べてある。この「外傳」は上下二卷に分れ、唐の史官樂史の撰とあるが、唐とは所謂南唐のことで、樂史は後に宋の太宗に仕へた人である。

「長恨歌傳」

これは白居易が歌を作り、陳鴻が傳を作つたもので、玄宗と楊貴妃のことを浪漫的に述べてある。楊貴妃が玄宗の寵幸に浴したことから、馬鬼で死んだこと、道士に託して貴妃の魂をたづねしめ、蓬壺の仙山で貴妃に會ひ、金釵鈿合(かつて玄宗より貴妃に與へたるもの)の半ばを受け、かつ昔七夕の夜に長生殿で、貴妃と玄宗の誓つた言を聽いて、道士は歸つて来て、玄宗にその状況を復命するといふ筋である。殊に長恨歌は、作つた當時にも民間で盛んに唱ひ、大評判となつたものである。後世の戲曲で、之を材料にしたものは尠くない、元(ほん)に於ける白樸の「梧桐雨」と清に於ける洪昇の「長生殿」は、殊にその中で著名なものである。

以上は別傳類である。

「長恨歌傳」

「劉無雙傳」

これは薛調の撰で、唐の王仙客とその妻劉無雙とが結婚するまでの経緯を書いたものである。

「劉無雙傳」

「王仙客と劉無雙は表兄妹同志で、幼少から親しみ、かつ許婚の間柄であつたが、會々長安に兵亂が起り、彼等は互に離散してしまつた。その後仙客は無雙が宮女となつてゐることを舊僕から聞き、古押衙といふ義俠家に、仙客を奪つて來ることを頼んだ。古押衙は之を引受け、折から園陵を守つてゐる無雙を殺し、死骸として之を仙客の許に運んで來たが、翌日の夜蘇生した。これは古押衙がある藥を飲ませたので、これは飲むと直に死ぬが三日経つと蘇生するといふ奇藥であつた。古押衙はこの事の他に漏れることを恐れ、舊僕を殺し、死骸を運んだ者どもをも殺し、最後に自分も刎ねて死んだ。そして王仙客と劉無雙はめでたく夫婦になつた。」

明の「明珠記」といふ戲曲は、これから出たものである。

「馮燕傳」

沈亞之の作で、文は甚だ短い、よく纏まつてゐる。

「馮燕は任侠な男で、擊毬闘雞を道樂にしてゐた。ふとした事から張嬰といふ者の妻と通

馮燕傳

じある日二人が張嬰の家で密會してゐると張嬰が酔つて歸つて來たので馮燕は物蔭にかくれたやがて張嬰が眠つてしまふと馮燕はその妻の首を斬り落して逃げた張嬰は翌日目醒めて妻の殺されてゐるのに驚いたが彼は遂に殺人罪に問はれいよく市に引かれ處刑せられんとするとき馮燕が自首したその行が義であるといふので馮燕も死罪を免れた』

「紅線傳」

楊巨源の作である。内容も面白く文章も立派である。明の戯曲「紅線女」はこれから材料が出てゐる。

『潞州の節度使薛嵩の女は魏博の節度使田承嗣の息の妻で兩家は親戚であるが田承嗣は自ら山東に移り度い希望があつて大に兵を養ひ隙があれば潞州を攻めやうと企んで居たそれを薛嵩は苦に病んでゐた薛嵩の家に音楽經史に通ずる紅線と謂ふ下婢が居て妾が我が主の憂を除いてあげませうと旅装をととのへ、匕首を帯び額に太一神の名を書いてたちまち出發をしたが早くも田承嗣の居に至り寢室に入つて枕許から金盒を取り曉までに七百里の往復をして歸つて來た薛嵩は驚き且つ喜び紅線の云ふまゝにその金盒を使に持たせ或人が足下の枕頭から之を取つて來たが我が家に置くべ

紅線傳

き物ではないから返還致すとの手紙を添へて送りかへしたそれで田承嗣も氣味悪くなり潞州を攻める企圖を棄て兩家は親善になつた。

紅線は前世に男であつたが罪あつて今世女に生れた然しこれでその罪を贖つたから俗世間には用が無くなつたと云つて何處かへ往つてしまつた』

「謝小娥傳」

これは李公佐の作である。李公佐が自ら遭遇した事實をそのまゝに記録したやうな體裁になつてゐるがその大部分はこしらへ事であらう。

『豫章の人謝小娥といふ女子は十四歳のとき父と夫とが強盜に殺され財産を奪はれた小娥は孤兒となつて乞食して歩いてゐると一夜の夢に父があらはれて俺を殺した者は車中猴、門東草であると告げた數日の後その夫が夢に立つて俺を殺した者は禾中走、一日夫であると云つた小娥はそれを記憶して人々にその意味をたづねたがわからなかつたその後自分李公佐が偶然にその事を聞き小娥に會つて教へた車中猴とは申門東草は蘭汝の父を殺した者は申蘭であるまた禾中走は申、一日夫は春汝の夫を殺した者は申春であると小娥は之を聽いて喜び必ず其人を尋ねて復讐すると云つて去つたその後小娥はうまく申蘭の家に男装して雇はれ二年以上家人の信用を得つゝ機會を

謝小娥傳

窺ひ、申蘭申春(兄弟なり)が酒宴に酔ひつづれた隙に乗じて、申蘭を斬り、申春を室内に閉鎖して、近隣の人を呼んで捕縛した。復讐が終ると、小娥は降る縁談を悉く斥けて、佛門に入つて尼となつた』

この話は王暉の「幽怪録」にも出てゐる。また明の小説「拍案驚奇」にも、この材料を取つてゐる。

劍俠傳

「劍俠傳」

段成式の著であるといふも疑はしい。この中には十二篇の話があるが、いづれも勇敢義侠なる人のことを書いたものである。

聶隱娘

その中の「聶隱娘」の一篇を看るに、

『唐の魏博の大將軍聶鋒といふ人に聶隱娘といふ女があつた、十歳の時、尼にさらはれて山中に至り、武術や法術を修業して、五年ばかり経つて家に歸つて来たが、父は甚だ之を不氣味に思つてゐた。女は自分から鏡磨きの少年を夫にしたが、その後數年にして父は死んだ。すると魏博の節度使は此女は何かに役立つと思つて、自己の部下として召抱へた。』

その後數年にして、魏博の節度使は、陳許の節度使劉昌裔と仲が悪く、隱娘を遣つて昌裔

を暗殺させやうとした。ところが隱娘が先方に往つてみると、昌裔は厚く隱娘を待遇した。隱娘は昌裔の方が人格が優れてゐるので、そのまゝ昌裔に仕へることにした。魏博の節度使はそれを知つて、前後二回に精々兒と空々兒とを遣はして、法術を以て身を變じ、昌裔に近づいて、殺さうとしたが、隱娘の法術のために失敗して、昌裔は命を免れたのであつた。

その後隱娘は夫を昌裔に託して、一人何處かへ往つてしまつたが、昌裔の死んだとき突然に來て、柩前に慟哭して、また去つた。その後昌裔の子が蜀の棧道で隱娘に會ひ、その身上について豫言を受けて別れた。昌裔の子は隱娘の豫言を守らなかつたので、一年の後死んだが、隱娘の行衛は知る人が無い』

聶隱娘

劍俠傳中さらに「聶隱娘」の一篇を看れば。

『唐の大曆の頃、崔生といふ青年があつた。父の使として當時の勳臣一品名は故らにあらはさず、郭子儀ならん病氣を見舞つた。一品は甚だ崔生を敬待し、座に在る三人の妓女のうち、紅綃を着た妓女に命じて、食物を進めさせたりしたが、若い崔生は羞づかしさに固くなるばかりであつた。崔生が一品の邸を辭して歸るとき、紅綃の妓は門まで送り、別れる時に三指を立て、また掌を三回反し、胸前の小鏡を指して、記えてゐらつしやいまし

と云つて引込んだ。

崔生は歸つて、その謎を崑崙奴(くろんぼ)の磨勒に告げると、磨勒は十五日の夜に第三院に來れといふ意味だと教へた。然し一品の邸には猛犬が居るから、先づ之を殺さねば入つてゆかれぬ。そこで磨勒は先づ往つて犬を殺し、次に崔生を負うて十重の垣を越え、第三院の紅繡の妓を訪ねた。そこで妓は崔生と投合し、共にこゝを逃亡することゝなつた。即ち磨勒は先づ妓の化粧具等を選び出し、そして後に二人を負つて逃げ、學院の中に匿した。此間番人共は誰も氣付かなかつた。

その後二年を経て、妓が外出したとき、偶々一品の家人に發見せられ、遂に一品は崔生を召してその事を詰つたので、崔生は具さに實際を話した。一品は、それは妓が悪いのであるが、すでに一年以上足下に連添ふてゐるから、今更仕方がない。然し天下の害は除かねばならぬと、五十名の甲兵を遣つて磨勒を捕縛させやうとしたが、飛鳥の如き磨勒をどうすることもできず、遂に取り逃がしてしまつた。その後十餘年経つて崔家の人は、磨勒が洛陽で藥を賣つてゐるのを見た。

以上の話はすべて劍俠類に屬する。

「游仙窟」

游仙窟

この書の巻頭に、寧州襄樂縣尉張文成作と題してある。張文成とは張鷟のことである。「唐書」に、新羅や日本の使が來ると、必ず金寶を出して張鷟の文を購つて歸つたとあるから、我國で頗る彼の文を愛讀したことがわかる。そして「游仙窟」は支那に在つては夙に亡逸して、日本に在つて今日まで傳へられたものである。むかし嵯峨天皇のとき、此の文を能く讀み得る者が無かつたので、學士伊時いときが深くそれを歎いてゐた。ある時木島の社頭林木の中で一老翁が「游仙窟」を讀んでゐるのに逢ひ、七日の潔齋をして老翁から讀み方を習つた。その老翁は木島明神の化身であつたと、文章生英房が文保三年に巻頭に序してゐる。それ程に當時の邦人には讀みにくいものであつた。

内容は絢爛を極めた四六體の文章で、張文成が使を奉じて河源に至る中途に、神仙の窟に迷ひ入り、十娘五嫂兩仙女に會して大に歡待を受け、盛んに詩の應酬をなし、その夜十娘と同眠して翌朝別れ去るといふことを書いたものである。末尾に近いところは、かなり猥褻の描寫があるので、我國でも淫書の一に數へられてゐる。

「霍小玉傳」

「霍小玉傳」は、詩人李益のことを傳へたもので、文章も立派である。

『大曆中、李益といふ青年があつて、二十歳で試験に及第し進士になつた。時に唐の霍王の

木島明神

霍小玉傳

落胤で霍小玉といふ美人が、長安の歌妓と爲つてゐたが、李益は小玉を納れて妻とし頗る琴瑟相和してゐた、その後李益が他地へ赴任することゝなつたとき、小玉は、君の如き才名ある人には大家から縁談の申込が澤山あるに違ひない。しかし妾は十八で君は二十二である。君が三十と爲つて正式に妻を娶るまで尙八年あるから、その間だけはどうか夫婦でゐていたゞき度いと願ふと、李益は、八年どころか一生生涯離れないと固く誓ひ、いづれ八月には御身を呼び寄せると云つて別れた。

間もなく李益は名門の盧氏の女を娶り、小玉へは音信をしなくなつた、小玉は病氣に罹り、家も貧困に陥つた、然し李益は長安に来て、小玉を訪はないので、多くの人は小玉に同情し、ある日李益が友人等と牡丹を觀に出たとき、無理矢理に李益を小玉の宅に連れ込んだ、小玉は怨めしさと悲しさに胸せまり、李益の臂を握つて、妾は死んで厲鬼となり、必ず君の妻妾に祟ると云つて慟哭し、息が絶えた。

その後李益は盧氏の女と不和となり、三度妻を換へたが、いづれも終を全うしなかつた、明の湯顯祖の「紫釵記」といふ戯曲は、この文から翻案したものである。

李娃傳

「李娃傳」

これは白居易の弟白行簡の作である。内容も珍らしく文章も佳く、唐代傳奇中では優

れたる一篇である。元の戯曲「曲江池」、明の戯曲「繡襦記」等は、これに基いて作られたものである。

『天寶の頃、常州の刺史、滎陽公に一人息子があつた、それは才貌ともに優れたる青年で、父も千里の駒であると誇り、當人もその氣でゐた、青年が京師に受験のため家を出るとき、父は二年分の裕かな費用を與へて送り出した、青年も受験すれば容易く及第する充分の自信を以つて出かけたのであつた、そして長安に着いてから一月あまりの後、散歩中に一美妓を眼にとめ、やがてその美妓と親しむやうになつた、美妓は當時京師にかくれもない李娃といふ名妓であつた。

青年は、李娃の家に宿りこんで、盛んに豪遊をつゞけたが、一年ばかりで所持金を費ひ果たし、貧乏が身に逼つて來ると、李娃の母は不愛想な態度をとり初めた、或日李娃は青年を誘つて竹林神に詣り、そこで二泊して、歸途李娃の姨の家と稱する邸に立寄り、青年は初めて姨にも面會し、茶果の饗應を受け、種々話をしていると、李娃の家から使が來て、母が急病であるから急いで歸れと云つた、李娃は取りあへず家に歸つたが、青年は姨に認められ、晩までその家に居て、李娃からの消息を待つたが、何とも云つて來ないので、自分から出掛けて、李娃の家に往つてみると、李娃の家は二日前に何處かへ移轉したさうで

空屋に爲つてゐた青年は憤り、すぐに姨の邸に往かうと思つたが、夜も更け道も遠いので、木賃宿に一泊し、翌日姨の家に向つて尋ねると、姨の邸と思つたのは他人の邸で、門番のいふ所によると、昨日一婦人が親戚を待ち合はせるのだとて、室を借りたが、晩方去つてしまつたとのことであつた。青年は狂ふばかりに怒つたが仕方がない、彼は錢もないので、最初下宿した家を訪ねて泊めてもらつたが、憤怒のため食事をしないので、病氣にかゝり、死にさうになつた。宿の主人は青年に死なれては厄介であると思ひ、彼を葬具市場に移し置いたところが、病は漸く軽くなり、葬儀人夫となつて働くやうになり、葬歌を習つて非常に上手になつた。

ある時、東西二つの葬具市場から、葬歌の唱ひ手が出て競技することがあつた。聴衆が四方から山の如く集つて来たが、その時恰度青年の父も公用で入京してゐて、平服を着て群集にまじり、それを聴きに来た。その日の唱ひ手の最優なる者は、かの青年であつた。彼の哀れつほい歌を聴いて泣かぬ者は無かつた。

青年の父は、その唱ひ手が、わが見であるとか、家を辱むる不埒な奴だとして、彼を曲江の西に引いてゆき、馬鞭で打つこと數百回、青年の苦しむ態れるのを見て、打棄て、去つてしまつた。然るに青年はやうやく呼吸を吹きかへしたが、身體は鞭のために全部爛

れて、二眼と見られぬ穢なさになつた。その後、彼は藍縷を着て、破麻を持ち、乞食をして歩いた。

大雪の朝、青年は饑ゑ凍えながら、ある門に立つて物を乞ふと、偶然それが李娃の家であつた。李娃は聲によつて舊の情人なることを知り、懇にいたはり、自分の罪によつて青年を苦しめたことを悔いた。李娃の母は青年を引取ることが肯かないので、李娃は今日まで二十年養育の費用を母に與へて、青年と共に別居し、その傷を療治せしめ、さらに學問の研究を続けさせた。

その後三年にして應試し、優秀な成績で及第し、成都府參軍を授けられて赴任することになると、李娃は、君の身分は卑賤の者が妻たることはできぬ、妾は今より家に歸つて母に仕へて一生を過ごし度い、君は大家から立派な嫁を迎へよと云ふ。青年はそれを許さず、ともかくも蜀の劍門まで一緒に往かうと、共に劍門に至つた時、青年の父が救命を奉じて赴任の途中に出遇はせ、父子の名乗りをして、あらためて青年と李娃の間に正式の婚禮を行つた。そして青年は後に顯官に陞り、李娃は、開國夫人に封ぜられた。

章臺柳傳

「章臺柳傳」

章臺とは漢の頃長安に在つた街の名で、妓女の居る處である。章臺柳とは、もと章臺の

やなぎといふ意味であるが、それを妓女の柳氏といふ意味に通はせてある。これは許堯佐の撰であるが、この話は孟榮の「本事詩」にも出てゐる。多分實説であらう。

『天寶の頃韓翃は詩名が高かつたが、非常に貧困であつた、韓翃の友人李生は彼に同情し、自分の愛する柳氏といふ美妓を韓翃に譲つた、韓翃と柳氏は互に愛し合つてゐるが、韓翃が歸省してゐる間に安祿山の亂が起り、京が騒亂の巷となつたので、柳氏は髪を剪つて寺に逃げた、その後亂が収まつて、蕃將沙吒利といふ者が柳氏を見出して、強ひて自分の妾にしてしまつた、韓翃は後に京に来て、心中ひそかに柳氏の行衛をたづねてゐると、偶然車に乗つてゐる柳氏に出會ひ、彼女の居所がわかつたが、勢威ある沙吒利の妾になつてゐるので、どうすることもできないで困つてゐた、それを許俊といふ勇者が同情して、沙吒利の不在中その邸に乗込んで、柳氏を伴れて來た』

楊娼傳

これは房千里の作である。

『楊娼は長安の名妓であつたが、某大官に落籍されて圍ひ者となつてゐた、ある時大官が病氣に罹つたので、楊娼は大官の友人の下婢を装つて、看護に赴かうとして、大官の夫人にさとられて果たさなかつた、後に大官が病死したことを聞いて、楊娼も自殺してしま

杜子春傳

つた』

以上に挙げたるものは豔情類に入る。

「杜子春傳」

これは鄭還古の作である。

『周隋の間に杜子春といふ人があつた、性質放縱で、家産を蕩盡し、長安の街を歩いてゐると、一老人が來て、三百萬錢を與へた、子春は大に喜び、毎日酒歌に耽つて、一二年で費ひ果たし、また貧窮を歎ずるやうになつた、すると又以前の老人が來て、一千萬錢を呉れたので、今度こそは確かりやらうと發憤したが、何時の間にか浪費して舊の貧生になつた、ところが又老人が來て、どうも締りのない人だと云ひ乍ら、三千萬錢を呉れた、子春は、これを以て世の憐むべき人を救ふ志を立て、志を遂げたならば老人を訪ねて往くと約した。彼は言の如く、慈善事業を起し、一家を整理し、志を遂げたので、華山の中に老人を訪ねた、老人は仙人であつたのである、そこで老人は子春を虎皮の上に東向きに坐らせ、どんな事があらうと平氣で居れ、決して物を言つてはならぬと告げて立ち去つた。

やがて彼は劍戟を以つて嚇され、猛獸毒蛇に攻められ、大水に浸されんとしたが、一語も發せぬ、次に彼の妻が彼の面前で惡鬼のため殘忍なる種々の酷刑を受けたが、さらに物

（南柯記）
南柯記

を言はぬ、彼は遂に魂魄を地獄に引立てられ、あらゆる責苦に逢ひ、遂に再び女子として世に出で、人に嫁ぎ、兒を儲けたけれど、物を言はうとしな、口をきかぬことを承知で娶つた夫も遂に怒つて、その兒を彼の面前で慘殺した。今まで黙し續けて来た彼は、兒の愛にひかされて、はじめてあゝと叫んだ。すると彼の身は初の如く虎皮の上に坐つてゐたのであつた。そして大火が家屋を焼いてゐた。老人が出て来て云ふ、汝は喜怒哀懼惡欲を忘れることができたが、愛の迷妄がとれぬ。汝が先刻あゝと叫ばなかつたなら、我が薬も成り、汝も仙人と爲ることができたのであつた。汝はさらに人の世に返れと、子春はその言に従つて家に歸つたが、後年その場所に往つてみると人跡が絶えてゐた」

〔南柯記〕

李公佐の作である。

〔東平の淳于棼は游侠の士であつた、彼の家の南に大槐樹が一株あつたが、彼はよくその樹下で酒宴を催した、ある時彼は大に酔つて二友人に扶けられて家に歸り、東の廊の下に一睡した、その時扶けて来た友人の一人は足を洗ひ、一人は馬に秣を與へてゐた。やがて紫衣を着た二人の使者が彼の側に來て、王様のお召しであると、彼を車に乗せて、槐樹の穴に入つて行つたが、中には川あり、城廓あり、城樓には大槐安國と金文字で書いた

額があつた、彼は宮殿に導かれ、國王に謁見し、王女の駟馬となつた、そして南柯郡の太守に任ぜられたが、政治がよく行届き、百姓は喜んで彼のために碑を立てたり、生祠を建立したりした。

彼は位益々高く、二男二女を生み、大に得意であつたが、後に隣國と戦つて負け、妻も病死し、國王からも疑はれるやうになり、遂に權力を失ひ、三年の後また迎へると云つて、彼を此世に送り歸した、その時彼は眠から醒めたのである、願れば僮僕は庭を掃き、二友人は足を洗ひ、日はまだ西に沈まなかつた。

彼は夢中の話をして、二友人と槐樹の下の穴に至り、下男に掘り反させてみると、穴の中は土壤で小城臺殿の形が出來て居り、多數の蟻が住んでゐた、その後三年にして淳于棼は病死した。』

この南柯記は、明の湯顯祖の戯曲〔南柯記〕の粉本である。

〔枕中記〕

これは李泌の作と傳へられる。

〔開元十九年に呂翁といふ道士が、邯鄲の道の旅宿に休息してゐたとき、盧生といふ青年が來た、盧生は大に學問をして高位大官になりたいのであるが、それも叶はず、毎日農業

枕中記

をやつて、心ばかり焦つてゐるが、呂翁に會つて、その志を話してゐると、眠くなつたので呂翁から枕を借りて寝た。その時旅宿の主人は黄梁を蒸しはじめてゐた。やがて盧生は夢に枕の中の一世界に入り、大家の女を娶り、文官試験に優等で及第し、任官して、頻りに地位があがり、遂に大政を掌ること十年であつたが、謀叛の疑を受けて下獄し、將に殺されんとしてその冤が晴れ、再び任官して趙國公に封ぜられ、子五人いづれも官を得、孫も十餘人あつた。

その後年老ひたので、辭職を願出たところ、勅使が上意をつたへ、懇ろに彼をいたはつた。そして其夜彼は死ぬところで、眠から醒めた時に、主人の蒸してゐた黄梁はまだ熟してゐなかつた。盧生は、はじめて人世を悟り、呂翁を再拜して去つた。

こゝに呂翁とあるのが、支那で有名な仙人呂洞賓のことであるとすれば、李泌よりも百數十年後に出た呂洞賓のことを李泌が書くわけがないから、これは宋人の偽作であらうといふ説がある。開元十九年頃は、まだ呂洞賓が此世に生れない遙か前である。「呂純陽集」呂洞賓は純陽子と號すに、呂洞賓が漢の鍾離に會つて、黄梁の熟さない間に、榮枯の夢を見たことが書いてある。それとこれとは全く同じ筋であるから、宋人が呂洞賓を盧生とし、鍾離を呂翁として作り易へ、李泌作としたのではないか。若し「枕中記」が李泌の眞作と

すれば、「呂純陽集」の話は「枕中記」の改作とも見られ、呂翁は洞賓ではないことになる。「枕中記」は後に明の湯顯祖の戯曲「邯鄲夢」となり、呂翁は明かに呂洞賓と爲つてゐる。因みに、呂洞賓が鍾離に度せられた話は元の戯曲「黄梁夢」に脚色されてゐる。

「離魂記」

陳元祐の作である。元の戯曲「倩女離魂」は、これに基いて作られたものである。

「張鑑」には一女倩娘と一男王宙とがあつた。倩娘と王宙とは幼より親しく、末は夫婦と思ひ込んでゐたのに、張鑑は倩娘を他に嫁することにしたので、王宙は憤つて、京に行くと云つて家を出た。その夜王宙が船中に宿し、岸についてゐると、倩娘が後を追つて来て、一緒に伴れて行つて下されと云ふので、共に携へて、蜀に往き、五年の間に二子を生んだ。後に倩娘がしきりに家に歸りたが、るため、王宙も共に張鑑の家に歸り、先づ王宙だけ家に入つて、誘拐の罪を謝した。張鑑は怪しんで、倩娘は永く病氣で家に臥ね居ると云ふ、いや拙者と共に來て今船中に居りますと王宙は云ふ、臥て居た倩娘は俄に喜んで家を出たが、二人の倩娘は相會すると、忽ち合して一體と爲つた。

「周秦行記」

牛僧孺の作といふが、實は彼と勢力を争つてゐた李德裕の門客衛瓘の手に成るとの説

がある。それを故らに僧孺の作として僧孺に迷惑させたといふ。

『牛僧孺が試験に落第して家に歸るとき、途中路に迷ひ、大邸宅に入り込んで、漢の薄太后ハクノハクノハクノ、漢の戚夫人、漢の王昭君、唐の楊貴妃、齊の潘淑妃、晉の石崇の妾綠珠等に遇ひ、宴に招かれ、詩を賦して大に楽しみ、且つ王昭君と同室に歇み、拂曉にまた別宴の催しがあつて、使者に送られその邸宅を出たが、使者は途中で見えなくなつた、後に行つて見ると、其處は荒廢した薄后廟であつた』

人虎傳

『人虎傳』

李景亮の作である。文章は美しい。

『隴西の李徴は非凡な秀才であつたが、倨傲で人と折合はなかつた。彼は江南尉の官を退き、吳楚に遊び、諸人に歡待せられ、年餘にして夥多の贈物を受け、家に歸る途中の宿で、忽ち發狂し、山中に入つてしまつた。翌年李徴の舊友が監察御史と爲つて出張の途中、山を行くと、虎が一匹跳び出たが、直ちに草叢に姿をかくし、人の言語で話しかけた。それは李徴が虎になつたのであつた。然し心は尙人であつた時とかはらず、種々の話をした。彼は狂した餘り四遺シヨウイとなり走つてゐる間に、いつの間にか虎になつたこと、初めは生物を食ふに忍びなかつたが、饑に耐へずして、獸類を取り食ひ、遂に人間まで食ふやうになつた

白猿傳

『白猿傳』

この傳は作者の名がわからない。

梁の大同の末、歐陽紇カウヤウカウは桂林に出征して、長樂に至り、山地深く軍を進めた。彼は陣中に妻を携へてゐるが、土地の者が、此附近の山には神がゐる、美女を奪つて行くと云つたので、下婢十餘名をして嚴重に妻を守らせた。しかし或夜果して妻が見えなくなつた。紇は一ヶ月餘も血眼になつて、山野を尋ねまはつたところが、草叢から妻の履を發見したので、

壯士三十名を率ゐる野宿をしながら探して歩くと、深い谷の彼岸に山があつて、そこに人の聲がきこえた。近づいて見ると、立派な邸宅で、婦女が數十名居た。紇は一人の女に、妻を探しに來たことを告げると、その方なら病氣で臥て居ると云ひ、紇を案内して妻の室に伴れて行つた。妻は臥ながら夫の姿を見ると、手を振つて、行け、と合圖したので、紇は室を出た。

一婦人は、既にこの神は幾人かゝつても退治することはできぬが、酒と犬と麻を持つて来れば、殺す方法がある。たゞし必ず午后来れと教へた。他日、龍は云はれた通りの物を持つて行くと、一婦人云ふ、神は酒を好み、酔へば力自慢をはじめ、練絹で手足を床に縛らせ、一跳して断ち切るが、先日練絹を三條合せたところが、切ることができなかつた。故にひそかに麻を絹の中に隠して縛つたならば、とても切れないであらう。また神は全身鐵のやうであるが、臍の下だけを蔽つてゐるから、恐らくその部分は弱いのであらう。君は物蔭にかくれ、妾等の招くとき出で給へと告げた。

暫くすると神は歸つて来た。六尺大の白衣の男で、諸婦人に擁せられつゝ、先づ犬を見て裂いて食ひ、次に酒を飲んで、室に入つた。やがて婦人が手招きするので、行つてみると、神は手足を床に縛られてゐる。そこで直に臍の下を刺すと、さつと血が迸り出た。神はうめきながら、俺が殺されるのは天命であるが、汝の妻は孕んでゐる。その兒は將來出世をするから殺すなと云つて、死んでしまつた。その神とは實は猿の類で、數寸の白毛が、全身に密生してゐた。龍は囚はれてゐた數十名の婦女と、蓄へてあつた珍寶を收めて山を出た。この傳奇は唐の初め頃の作で、「唐人説書」の編者陳蓮塘は、歐陽龍の子歐陽詢の顔が、猿によく似てゐたので、長孫無忌が暗に嘲つて作つたのだと云つてゐる。傳奇を作つて人を

唐人説書

毀ることは、かなり古くから行はれたものである。

以上は神怪類である。

唐代小説の
數

今日唐代小説を一部に纏めたものとしては、清の乾隆の末頃出来た「唐人説書」がある。これは陳蓮塘が、四庫書、太平廣記、說郛等から搜して百六十四種を収録したもので、唐代の小説は概略これに盡してゐるといふことができる。しかし百六十四種の中に、小説として見て看るには餘り不適當なものもあるから、それ等を除き、凡そ七十四種ほどは小説として見て可からうと思ふ。今その中からまだ前に書名を挙げなかつた分を左に列記する。

(別傳類)

「本事詩」孟啓撰、(情感、事感、高逸、怨憤、徵異、徵咎、嘲戲の七篇に分ち叙事四十條あり)。「高力士傳」郭湜撰、「英雄傳」雍陵撰(四篇あり)。「廣陵妖亂志」羅隱撰(叙事四條あり)

(劍俠類)

「奇男子傳」許棠撰、「墨崑崙傳」馮延巳撰(附錄三篇あり)

(艶情類)

「揚州夢記」于鄴撰、「杜秋傳」杜牧之撰。

(神怪類)

「夢遊錄」任蕃撰、(六篇あり)。「蔣子文傳」羅邨撰、「陶峴傳」沈既濟撰、「申宗傳」孫願撰、「睦仁
 舊傳」陳鴻撰、「靈應傳」無名氏撰、「仙吏傳」太上隱者撰、(三篇あり)。「牛應貞傳」宋若昭撰。
 「非烟傳」皇甫枚撰、「龍女傳」薛瑩撰、(三篇あり)。「妙女傳」顧非熊撰、「神女傳」孫願撰、(六篇
 あり)。「博異志」鄭還古撰、(十篇あり)。「支諾臯段成式撰、(叙事十七條あり)。「前定錄」鍾輅
 篇纂、(二十四篇あり)。「三夢記」白行簡撰、(四條ある)。「集異記」薛用弱撰、(二十篇あり)。
 「幽怪錄」王儼撰、(四條あり)。「續幽怪錄」李復言撰、(二篇あり)。「靈應錄」于濶撰、(二十五篇
 あり)。「幻影傳」薛昭蘊撰、(八篇あり)。「幻戲志」蔣防撰、(四篇あり)。「幻異志」孫願撰、(十五
 篇あり)。「冥音錄」朱慶餘撰、「再生記」闍達撰、(九篇あり)。「冤債志」吳融撰、(三篇あり)。
 「尸媚傳」張泌撰、(三篇あり)。「奇鬼傳」杜青萸撰、(五篇あり)。「才鬼記」鄭黃撰、(十三篇あり)。
 「靈鬼志」常沂撰、(十五篇あり)。「妖妄志」朱希濟撰、(四篇あり)。「夜怪錄」王洙撰、「物怪錄」徐
 巖撰、(三篇あり)。「靈怪錄」平嶠撰、(九篇あり)。「獵狐記」孫恂撰、「任氏傳」沈既濟撰、「袁氏
 傳」顧曼撰、「夜叉傳」段成式撰、(五篇あり)。

是によつて観ると、唐代の小説は大部分が神怪類である。これは六朝小説の影響する
 所が大きいからでもあるが、また一つは、唐代になつて、外國宗教の流行が盛んになり、宗教
 に伴つて珍奇な傳説なども民間に傳播したらしく、それが種々翻案されて小説に作られ

外來宗教の
影響

たものもある。唐代の外國宗教といへば、佛教の外に回々教、景教、耶蘇教の一派ネストリ
 アン、祇教(拜火教)、摩尼教等があつて、それ／＼寺院を有し、布教したのである。尙在來の宗
 教としての道教は、宗祖と仰ぐ老子が唐と同じ李姓であつたので、唐では殊に之を尊び、武
 宗(八四一年—八四六年)の如きは道教に凝り、佛寺を廢毀したことさへあつた。故に一般
 には道教的迷信も盛んであつた。是等も怪異小説の流行を促す一原因でなくてはなら
 ぬ。

第八章 宋金戯曲の進歩

支那では戯曲と小説の進歩が略々平行して、唐までは兩方ともに幼稚の域を脱しなかつたが、宋に入つていづれも稍觀るべき傾向を呈し、元に至つて殆んど完成せられたのである。

支那戯曲が歌劇であることは、前にすでに述べたが、歌劇を構成する要素となつてゐるものが四つある。それは樂曲滑稽戯、雜戯、小説である。この四種がはじめ個々に存在してゐたのが、漸次に綜合せられて、藝術的融化を遂げたものが元の戯曲である。そして樂曲滑稽戯、雜戯は、戯曲の形式方面を受持ち、小説は精神方面を受持つた。戯曲の精神とは即ち内容筋であつて、それは小説から取入れたものが多い。それを表現する方法が即ち形式である。形式とは畢竟演出方法である。

さて歌劇の要素たる前記の四種について順次にその概略を述べれば、

(一) 樂曲とは、音樂に合せて唱ふ曲のことである。すでに述べたる如く、唐では漢魏の古樂府といふものは、唱ひ方がわからなくなり、新らしく樂府が出来た、そして新樂に合せて

歌劇の四要素

樂曲の變遷

唱つたものは、五言や七言の絶句であつた。玄宗皇帝の時の李龜年といふ人は、漢の武帝の時の李延年と名もよく似てゐるが、やはり玄宗の下で、梨園の樂長となつて、盛んに作曲をした。その頃西方諸國からも種々の胡樂が入つて來たので、それ等によつても新らしい曲が出来たのである。甘州涼州伊州等の曲はそれである。これ等はいづれも唐の西邊の地名であるが、それを曲名としたのである。かの有名な霓裳羽衣の曲は婆羅門の曲であつたといふことだ。

絶句は本來字數が定まつてゐる。五言絶句ならば二十字、七言絶句ならば二十八字である。ところが、曲譜は種類が澤山ある、それを五言なり七言なりの絶句にあてはめて唱ふ場合には、字々の音の長短高低が、曲の異なる毎に變らねばならぬ、これを我國にたとへてみると、俗歌には七七七五調が多い。『なにをくよくよ(七)かは(七)たやなぎ(七)みづのながれ(七)みて(七)くらす(五)』のやうな歌を、都々逸の曲(譜)でも唱へれば、磯節の曲(譜)でも唱ふことができる。しかし音譜は全然異なるのであるから、『なにを(七)な(七)の音(七)だけでも(七)都々逸の場合と、磯節の場合とは長短高低が異なる。而も文句の切り場所まで變つて磯節に於ては『なにをくよくよかは。ばたやなぎ。みづのながれを。みてくらす。みづのネ。ながれをイソみてくらす』の如く九五七五三四五調となり、且つネとかイソとか合の手が入る。

尙歌の終りに「いさゝかりんく」云々の長い合の手もあるのであるが、絶句を種々な曲に唱ふと、やはり是と同様の事情が起る。そこで和聲を永く引くこと散聲合の手、儻聲を短くつめることといふことが、絶句の唱ひ方に工夫されてゐた。そして文句の切り方も、七言必ずしも唱ふときに四三とは切らない。或は二五と切り、二二三と切り、若くは第一句の七言の三字で切り、残りの四字を第二句の二字につけて六字として切ると云つたやうに各種の變化が生ずる。これがために絶句のうちで、一字で聲を永く引くべき處へ二字詰めてみたり、二字で短く唱ふ處を一字にしたり、或は前記磯節の如く、水の流れを見てくらすを二度くりかへす代りに、他の文句を増したり、其他様々の考案が作詩の上にあぐらされるやうになつた。さういふ歌を「詞」と名づけ、五言とか七言とかの詩と區別した。詞は、詩の末に生れたものであるから「詩餘」とも謂ひ、また五七言のやうに一句の字数が定まつてゐないから「長短句」とも稱し、また近體樂府普通の樂府は絶句とも謂はれる。

詞を作ることを填詞といふ。填詞は唐の中葉から始まつた。填といふ字は、あてはめるといふ意味で、曲譜によつて文字をあてはめなければ填詞ではないのだ。故に自分勝手に文字を排列しても唱ふことができないなら、填詞とは謂はれない。

詩と詞

填詞の一例

唐の中葉、即ち填詞の創まつた頃の作例を一つ挙げやう。

(漁歌子)

西塞山前白鷺飛。

桃花流水鱖魚肥。

青箬笠。

綠蓑衣。

斜風細雨不須歸。

西塞山前に白鷺飛び。

桃花流水鱖魚肥ゆ。

青き箬笠。

緑の蓑衣。

斜風細雨歸るを須ひず。

右は張志和(七六〇年頃)の填詞であるが、詩から分れたての頃は、斯やうに、詩と大差はない。第三第四の二句を一緒にしてそれに一字加へれば七字となり、全體が七言絶句と同じ形式になる。(尤も平仄式は異なる)

それが後になる程種々な形式の詞が出来て、最も短い詞は十六字、長いのは二百四十字もある。それに一々名が附いてゐる。前記の「漁歌子」も詞の名で、その意味は漁夫歌といふやうなものである。そして一たん詞の名が定まれば、その詞の形式にあてはめて作つた詞は、内容の如何に係らず、すべて同じ名を取る。つまり漁歌子は張志和が最初の人であるが、後世の人で、その形式通りに填詞すれば、やはりその詞を漁歌子といふ。例へば

清の陳玉瑾の詞から漁歌子の詞を擧ぐれば、

(漁歌子)春閨

繡閣香濃花綴枝。

畫簾春嫩燕融泥。

情慘澹

意迷離

欲罵東風誤向西。

繡閣香濃かに花枝に綴る。

畫簾春嫩み燕泥を融ぐ。

情慘澹たり。

意迷離たり。

東風を罵らんと欲して誤つて西を向く。

これは内容の意味は、春日の閨女の心を歌つたものであるが、詞の形式は全く漁歌子に據つてゐる。故に詞名はやはり漁歌子で、詞の題が「春閨」である。若し内容の意味が、詞名に副ふたものであれば、詞の題を「本意」とすることになつてゐる。

一形式の詞で、詞名が二つ以上あるものも尠くない。「漁歌子」の如きも、別名「漁父」とも呼ばれてゐる。

填詞は唐の中葉に起り、五代(九〇七年—九五九年)に至つて作者漸く多く、宋に入つてから全盛を極め、元では曲が之に代つたので、すでに唱ふものではなくなつた。今日に至つても填詞といふことはあるけれども、それは唐詩を作ると同様、たゞ形式を按じて文字を列べるばかりで、唱ふことはできない、讀むだけのものである。詞はその長さによつて、三つに別けられ、十六字以上五十八字までのものを小令と謂ひ、五十九字以上九十字までを中調、九十一字以上を長調と謂つてゐる。詞の種類は總計八百二十六調二千三百六體あるといふ。

詞は宴會のやうな場合には、最も盛んに唱はれたものであるが、大抵一首の詞が一曲を爲してゐた。それが後になると、多少複雑になつて、五首も十首も連続して唱ふ詞が出来た。例へてみれば、鐵道唱歌の最初の一節「汽笛一聲新橋を」以下四句を、一つの詞とする。次の第二節「右は高輪泉岳寺」以下四句も一つの詞である。各節文句は異なるけれども、樂譜は全く同一で、四句づゝで繰りかへすわけである。斯ういふやうに同一の詞(文句)は異なるが樂譜は同じをくりかへして一つの事柄を述べるものが出来た。北宋の趙德麟(一一二〇年頃)の作つた「商調蝶戀花」の如きがそれである。これは唐の元稹の傳奇「會真記」の文を切斷して散序とし、蝶戀花の詞を十闋(十節)連ねて、その詞と詞との間に切斷した「會真記」の文句をはさみ、鼓に合はせて詞を唱ひ、また散序を誦し、また詞を唱ふのである。この蝶戀花の詞は十闋の外に、前と後に別に一闋づゝ加へて、作の始末を述べてあるから、都合十二闋になつてゐる。斯くの如く詞を若干闋連ねて、鼓に合せて唱ふものを鼓子詞と

鼓子詞

いふ、この鼓子詞は南宋宋の高宗以後即ち一一二七年以後に至りなほ廣く民間に行はれてゐるたやうである。

大曲

また大曲といふものがあつた。この名稱は六朝頃からあつて、唐に傳はり、宋に入つたのであるが、大曲は舞樂であつて、唐の時までは樂を奏して舞踊するだけで、詞を唱ふことはやらなかつた。(霓裳羽衣の舞なども唱はない)、けれども同一の樂を幾回かくりかへして奏することは、同じ詞を連ねて唱ふこととよく似てゐた。その樂一節を一遍といひ、幾遍かを連ねた一舞樂を大遍といふ。大遍には、散序、破、排遍、正遍、入破、虛催、實催、衰遍、歇拍、殺袞等の順序があつて、樂や舞踊の緩急動止を調整した。そして北宋になつて、大曲に詞を唱ふやうになり、葛守誠は四十大曲を撰した。詞を唱ひつゝ、演ずる舞樂を轉踏（或は纏達）または傳踏といふのである。

滑稽戲

(二) 滑稽戲は、宋では雜劇と稱した。大體は唐の戲劇と大差なく、一種の滑稽狂言（或は戲笑）で、戲笑の中に諷刺を含むものが多かつた。また當時の施政の善惡をそれとなく當擦つたやうなものも尠くなかつたらしい。わが國の能狂言は最も宋の雜劇に類似したものである。斯うして雜劇は遼や金に於ても盛んであつた。

雜劇とは何か

雜劇といふ名は、後に至つて、漸次意味がかはり、初めは滑稽狂言を指したのであるが、南

雜戲

宋の頃は一般戲劇の總稱にも用ゐる、元に於ては北曲を指し、明の中葉以後は、短篇の戲曲を雜劇と呼んだ。

(三) 雜戲は、傀儡(人形使ひ)や影戲(影人形等)をいふ。傀儡は周末にすでに有つたといふが、巧妙なものは外國から漢代に入つて來たらしく、唐の頃はかなり面白いものであつたらしい。それが宋では餘程進歩し、種々な故事を演じてゐた。人形の種類にも弄懸絲傀儡(操人形)、杖頭傀儡(でくる坊)等をはじめとして七種ばかりあつて、むしろ人間の滑稽戲即ち雜劇よりも藝術的であつたらしいから、支那劇の進歩には大に貢獻したものである。影戲もまた傀儡と同じく、故事を演じてゐた。想ふに、傀儡や影戲は、上流の方面ばかりでなく、一般民間にも、かなり流行したものであらう。

(四) 小説は宋に至つて、口語體のものが現はれて來た。これは初め讀むためよりは寧ろ講談本的に話して聽かせるためのもので、當時の譚詞小説講談の材料に用ゐられた。そして口語で書いてあるから、平話本と謂はれる。今の支那語で白話小説と謂ふのと變りはない。この平話本が、後の元の小説の先驅であるが、宋の時には説話人(講談師)の種本として用ゐられ、また一般の讀物にもなつてゐた。(平話本はまた話本ともいふ)、さらに平話を歌まじりで説唱する陶真といふものが出來、陶真の進化したものに諸宮調がある。

平話本

諸宮調は北宋の神宗時代(一〇六八年—一〇七八年)に孔三傳が創めたといふ音楽入りの講談で、やゝ我が浪花節に似たやうなものだ。諸宮調の出来ない前、すでに述べたる大曲轉踏或は陶真などは一つの曲を幾度もくりかへしたので、鐵道唱歌の四句づゝ一節として、各節の唱ひ方は同じであるやうなものであつた。然るに諸宮調では、第一節は鐵道唱歌の譜、第二節は「敵は幾萬」の譜、第三節は「四百餘州」の譜といふやうに、唱歌が複雑になつた。一たい宮調といふのは音楽の調子のことである。諸宮調とは各調子を共に用ゐるとの意味がある。

今日まで傳へられてゐる諸宮調では、金の董解元(一二〇〇年頃)の「絃索西廂」がある。これは元稹の「會真記」を材料として、一つの物語りを仕組んだもので、趙德麟の「商調蝶戀花」に比して、ずつと複雑となり、且つかかなりの長篇である。これは搗弾詞とも謂ひ、琵琶に合せて唱ひ、詞の合間々々には、普通の言葉で補述をするやうになつてゐる。つまり音曲入りの平話と視れば可いのである。

支那戲曲は以上述べた四要素の綜合されたもので、元に至つて完全な融化を遂げたのであるが、その元に入る前に於て、宋や金に亘つて漸進的に緩漫な融化作用は常に行はれて居た。宋の雜劇も初めは幼稚なる滑稽戲であつたのが、南宋に至つては、故事を演ずる

歌劇となつた。宋末の周密(一二五〇年頃)の著した「武林舊事」といふ書に、宋の官本雜劇段數二百八十本の目録が擧げてある。その中で過半數は單なる滑稽戲でなく、纏まつた筋を演ずる歌劇であつたことは、目録で大體推察し得る。たとへば「鶯々六么」は、六么の大曲を用ゐて元稹の「會真記」の筋を演じたのである。(因に六么とは曲の名で、また綠腰とも書く)もと樂工が作譜をして天子に進呈したもの、中から特にその要を録せしめたもので、録要とすべきを後世字を易へたのである。

さて宋は金と争つて、金のために汴京を陥れられ、徽宗欽宗二帝を擄にせられたので、一二六年、高宗は臨安に都した。その後を南宋と稱する。これが支那戲曲が南北二派に分れた主因で、金の方面(即ち北京)に發達したのが、北曲で、南宋方面に發達したのが、南曲である。北曲は元で雜劇と稱するものであるが、これは南曲よりも先に出來た。そこで今、元の北曲が起る前驅としての金の戲曲に就いて少し述べてみやう。

金には雜劇、院本、諸宮調がある。雜劇と院本は名は二つであるが、その實は一つ物で、元にては異なる(金時代に倡伎(俳優)の居る處を行院と呼んでゐた。その行院で用ゐる脚本を院本といふのである。院本の種類は六百九十種あつたといふから、中々盛んなものであつた。院本のことをまた五花爨弄とも名づる。これは宋の徽宗の時に爨國(今の雲南附

近の人が来て演じたのが、原になつたからである。と傳へられてゐる。そして初めは五名の俳優を以て演じてゐたから、五花といふのであらう、尙雜劇を演ずるときは、その前と後に、簡単な滑稽戲的のものをやるのが普通であつて、之を雜扮と謂ひ、前にやる雜扮を豔段、後にやる雜扮を散段と謂つてゐた。

諸宮調のことは前にも述べたが、董解元の「絃索西廂」の如きがそれである。たと「絃索西廂」は擲詞であつて、一人で弾き語りをするのであるが、さらに一步すすんで、連廂詞となり、司唱が一人、琵琶一人、笙一人、笛一人の外に、舞ふ者が若干名あつて、やゝ能樂の仕舞の如きものが出来上つた。

金の院本では、通例登場俳優が五名である。その中「末泥」は劇中の主役で、「引戲」が末泥の命令を傳ふる者、「副淨」が滑稽役、「副末」は「副淨」の對手となつて共に滑稽を演ずる者、「裝孤」は官人等に扮する役であつた。副淨は唐時の參軍戲の參軍から出たもので、副末は蒼鶻から出たものである。唐の參軍戲では、參軍が大名で蒼鶻が太郎冠者といふやうな役で、わが國の能狂言の如き滑稽を演じてゐた。それが金の院本にも傳はつたのである。

院本の役割

口語體小説の興起

口語文學の五原因

第九章 宋代の小説

小説は宋に至つて、口語體のものが續々とあらはれて來るやうになつた。尤も唐に於ても口語で述べた書が無いではない。清の光緒年間に燉煌(甘肅省にあり)の千佛洞から發見した書籍の中にも断片的ながら數種あつた。即ち「唐太宗入冥記」「孝子董永傳」「秋胡小說」「伍員入吳故事」「維摩經」「法華經」「釋迦八相成道記」「目連入地獄故事」等がそれである。然し大體から觀ると、口語文學の興起は唐に在るといふよりは、寧ろ宋に在るといつた方が適切である。

何故に宋になつて、口語文學が擡頭して來たかと謂ふに、その原因は凡そ左の五つが主なるものであらう。

(一) 佛教の宣傳

佛教が一部の貴族階級から、一般民衆に廣まるにつれて、經文を平易に説いたり、勸善懲惡の主旨を教へたりするために、誰にも判りやすい口語を用ゐて、文書宣傳を行つた。

(二) 語録の創始

第九章 宋代の小説

佛教の中でも、禪家は不立文字など、云つて、開悟の法を文書に求めず、所謂以心傳心を主とした。従つて、禪僧は師僧の啓示をその起居や、片言隻語のなかに捉へんとして、ありのまゝの言葉や語録として記すやうになつた。僧慧忠、神清、重顯などの語録はその例である。また、儒家の方でも、禪家の真似をして語録を作つた。程頤の語録、朱熹の語類等がそれである。

(三) 詞の盛行

すでに述べた通り、詞は唐の中葉に起つたのであるが、五代(九〇七年—九五九年)から宋に及んで最も流行を極めた。これは唱ふ歌であるから、郷土歌俗語何でも詞に含まれてゐる。従つて、詞は平民的で、俗語は遠慮なく用ゐられた。これが口語文學の發達を促したことは尠少でない。

(四) 印刷術の發明

印刷は隋唐以來もあつたといふが、五代の蜀の毋昭裔(九五〇年頃)が鑄板を作つて印刷を創めてから、書籍の印行といふことが起り、書籍の販賣も宋に於ては盛んに行はれるやうになつた。また宋の仁宗の時には畢昇が活版を發明した。書籍が印刷刊行せられるやうになると、一般人が書物を手に入れることが容易になる、従つて文學が一部上

流の専有でなくなり、民衆的になる。そこで口語文學も起らずにはゐないわけだ。

(五) 異民族の雜居

漢魏以來、塞外の民族は、しきりに支那内地に向つて侵入して來た。かの匈奴、羯、鮮卑、羌、氐等の五胡が、所在に朝廷を建て、十六國の興亡があり、後に南北朝時代の北朝諸國いづれもまた塞外民族であつたから、支那の西北方は、早くすでに漢人種の間、多數の異民族が雜居して居た。宋に及んでは、契丹の遼に嗣で、女眞の金が起り、遂に揚子江以北を奄有した。斯んなわけで、支那の内地には外來人が到る處に住まつてゐるのである。それ等の者には難かしい古典的な文學はわかりにくい。故に口語で綴つた平易なものゝを要求するのである。これも口語文促進の一因である。

以上の如き原因があつて、宋に於ては、口語文學が漸く花を開きはじめていたのであるが、然し宋の小説の中でも、唐の傳奇の流れを汲んだ文語體の小説も、有ることは有る。例へば次に列挙するものゝ如きは文語體である。

一、「稽神錄」六卷

宋初の徐鉉の撰で、怪異譚である。

二、「江淮異人錄」三卷

徐鉉の女婿吳淑の撰で、劍俠譚である。

三、「乘異記」

張君房の撰である。

四、「括異志」

張師正の撰である。

五、「祖異志」

聶田の撰である。

六、「洛中紀異」

秦再思の撰である。

七、「幕府燕閒錄」

畢仲詢の撰である。

八、「睽車志」 五卷

郭象の撰である。

九、「夷堅志」 五十卷

洪邁の撰である。

右九種は大抵怪異劍俠に關する記事である。その中で「夷堅志」はもと四百二十巻といふ大部であつたが、今日はやうやく五十巻だけ遺されてゐる。

此外に亳州の人秦醇の撰に係る左の如き四種の傳奇があるが、是亦文語體である。

一、「趙飛燕別傳」

漢の成帝の趙皇后が宮中に入つてから後に自縊し、冥報を以て大龜に化した話。

二、「驢山記」

三、「温泉記」

孤翁が蜀に還る途中、驢山の下で、故老に楊貴妃の話を聞いたが、他日また其處を過ぎるとき楊貴妃に招かれて談話した夢を見たので、詩を驛に題して、野外に出ると、一牧童が、前日或る婦人から託せられたと云つて酬和の詩を送つたといふ話。

四、「譚意歌傳」

汝州の民張正が長沙の妓意歌を愛して、夫婦約束をしたが、張正は母に迫られて他から妻を娶つた。その後三年にして妻が死に、長沙から來た義俠家に説かれて、意歌を妻としたといふ話。

宋に於ける文語體の小説は、大して感心する程のものは無い。實は唐人の小説といふ

もの、中に宋人の筆に成るものがかなり有る。観るべきものは却つて其方に多いのである。(それは已に述べた)

太平廣記

尙一言したいことは、宋の太平興國三年(九八一年)に「太平廣記」五百卷の印版が成つたことである。これは三百四十四種の書を参考し、漢から五代までの小説家言を採取してあるので、後世その原書が亡逸したもので、此書によつて窺ふことのできるものが尠くない。これは太宗が李昉等をして編輯せしめたのである。

説話人

さて宋の口語小説に就て述べる前に、先づ宋の説話人のことを一應云はねばならない。説話人とは、わが國の講談師に類した一種の職業者であり、歴史とか傳記とかを、眞偽とりまぜて、見で來たやうに面白く話す藝人である。今日支那に於ける説書シユエ的といふのは、やはり是と同じ者である。わが國の講談師も、昔は太平記讀みとか軍書讀みとか謂つて、講談の種本には、眞の史書を用ゐたものらしいが、後には無學な藝人には、難かしい史書は讀み得ないので、平易な口語で書いた種本が出來た、それと同様に、支那でも、説話人の種本は平易な口語で書かれた、それを話本ワカホンと稱する。

類説話人の分

而して説話人の中にも各々専門がある、それを大別すると、

(甲) 小説

これをまた三つに別けて、(イ)銀字兒(人情物、世話物、怪談物)、(ロ)説公案(裁判物、俠客物、出世物)、(ハ)説鐵騎兒(戰爭物、修羅場物)

(乙) 説經

佛書の物語で、半ば説教を兼ねたものである。また説參といふのがあつて、僧俗の參禪悟道の話をするものもある。

(丙) 説史

歴史物を語るものである。その中で三國史の話をするのを説三分と謂ひ、五代史の話をするのを説五代史と謂ふ。

(丁) 説諺話

滑稽落語に類する話をする。

右の分類も人によつて若干か異つてゐるが、先づこの四類に分けてよからうと思ふ。兎に角斯様な説話人は、北宋の時から有つて、小兒等が三國の講談を聽いて、劉備に同情し曹操を憎んだといふことは蘇軾東坡の「志林」にも記してある。それが南宋では更に盛になり、雄辯社といふ説話人の研究團體もあつたといふ。而して此種の説話人の語り物を總稱して、諺詞小説と謂ふのである。

諺詞小説

五代史平話

宋代の譚詞小説で、今日まで傳へられてゐるものに左の如き書がある。

(一)「新篇五代史平話」

これは説五代史の話本で、先づ詩を以て始め、次に講談があり、また詩を以て終る書き方で、支那開闢から説き起し、唐末五代の興亡を説いたものであるが、勿論半眞半假の譚である。今日は上下二卷の中に上卷だけ遺つてゐるので、下卷の梁史と漢史は缺けてゐる。今その中から一片を譯出すると

『黃巢唐末の賊將は云ふ、嬰ふ時は、そなたは何も手出しは要らぬ、俺に桑門劍がある、これは天からこの黃巢に賜はつたもの、これを振りあげれば、どんな人間でも手向ひはさせないのぢや、斯う云つて出かけたが、途中に高い嶺を過ぎた、それは懸刀峰と名づけられ、半日ばかりで、やつと越えた、するぶん高い嶺で、麓は大地に坐し、頂は天に接し、蒼々たる老檜は長空を拂ひ、挺々たる孤松は碧漢を侵し、山雞は日雞と齊しく、闘ひ、天河は澗水と流を接し、飛泉たゞよひ、雨脚こまやかに、怪石は雲頭と相軋つてゐる、そも高さはいかにと云へば、

樵夫が轉落けて三四年、

山の下まで未だ落ちぬ。

さても黃巢兄弟四人、この高嶺を打越えて行くと、はるかに侯家莊が見える……」

文句の間に右の如く、滑稽を雜へて、平易な語で綴つてある。

(二)「京本通俗小説」

京本通俗小説

これはもと幾卷あつたかわからぬが、今日は十卷から十六卷まで遺つてゐる。内容は「碾玉觀音第十卷」、菩薩蠻第十一卷、西山一窟鬼第十二卷、志誠張主管第十三卷、拋相公第十四卷、錯斬崔寧第十五卷、馮玉梅團圓第十六卷で、七つの話がある。話のはじめには詩詞の冒頭を置き、それから話の本筋を述べるもの、或は話の本筋の前に、他の話を短い冒頭にしたもの等があり、また話の處々に詩詞を挿入してあるのが多い。

「碾玉觀音は崔寧といふ寶石細工人が、咸安郡王家の使女と墮落し、後にその使女は捕へられて殺され、崔寧も遂に使女の幽霊のために殺されるといふ筋で、上下二卷になつてゐる。最後にある四句は、元曲の題目正名と同じ趣がある。

「菩薩蠻は、陳可常といふ者が僧となつて靈隱寺に居るとき、吳七郡王の使女に懸想せられ、使女が孕んで、自から可常と通じたと云つたので、可常は罪せられたが、敢て辯解をしなかつた。後に使女は悔いて眞實を自白し、可常の行の正しいことがわかつた。そして可常は草舎の中に結跏趺坐して圓寂したとの話。

「西山一窟鬼」は吳洪といふ秀才が妻を娶つて安穩に暮して居たが、ある時人と外出して、多くの幽霊に出逢つたところが、同行者も實は幽霊であり、妻も妻を世話した仲人も、盡く幽霊であつたといふ話。

「志誠張主管」は張士廉といふ絲屋の主人が、六十歳で若い後妻を迎へた。その後妻は絲屋の番頭張勝に懸想したが、張勝は誠實な男で、相手にならない。後に張士廉は犯罪の嫌疑で捕縛され、店は没收され、士廉の妻は張勝の家に身を寄せたが、張勝は慎重な態度であしらつてゐた。その後、その女はもと王招宣府の使女で、財物を拐帶して逃げた者であることがわかり、張勝の不在中、捕手に家を圍まれて、自殺して死んだ。士廉が放還されて來たとき、張勝は士廉と共に女の靈を祭つたといふ話。

「拗相公」とは、宋の王安石の綽號である。安石が宰相たるとき各種の新法を實施した爲め、人民が大に困つた。それで安石が宰相を辭して、江寧に行く途中、到る處で、自分を罵り、自分を咒ふ者に遇ひ、犬や豚に自分の名を付けてゐるのを見たりして、悔恨に耐へず、遂に血を嘔いて死んだ話。

「錯斬崔寧」は二つの話があつて、前の話は、魏生といふ青年が妻に與へる手紙の中に戯れて、妾を娶つたと書いたので、妻も戯れて、別に男をもつたと書いて返事をしたため、他人か

ら誤解されて立身の障礙になつたといふことで、これは冒頭の小話である。次の話は崔寧といふ男が二人の妻をもつてゐたが、第二の妻に戯れに嘘を云つて、お前を他人に賣り渡し、すでに代價を受取つて來たと語つたのが原因で、崔寧は賊に殺され、第二の妻と、尙一人の男とは相奸して崔寧を殺したとの嫌疑で死刑に處せられた。後に第一の妻は山賊に掠められてその妻となり、その山賊の話から、崔寧を殺した者は、山賊であつたことがわかり、それ／＼處分されたといふのである。

「馮玉梅團圓」にも、はじめに小話があつた。それは、徐信といふ者が、戦亂を避けて逃げる途中に妻を見失ひ、却つて他人の妻が一人道路に困つてゐるのを助けて、夫婦となつたが、後に劉俊卿といふ者に出會つてみると、劉の妻は舊の徐の妻で、徐の妻は舊の劉の妻であつた。そこで二人を舊通りに還して、兩家は睦じく交際したといふのである。も一つの話は、馮忠翊ひょうしやくが官命を帯びて福州に行く途中に賊亂に遭つて、一女玉梅と離散してしまつた。玉梅は賊將范汝爲の子范希周に收容せられ、遂にその妻となつた。その後范等は官軍に攻められ、父の范汝爲は自殺し、范希周は妻と別れ／＼に逃げた。妻玉梅は、後に官軍に收容せられて、父の許に歸つたが、數年の後范希周に再會し、互に行末長く契つた證據としての鏡を出して合せ、再び夫婦となつたといふ。

(三)「大唐三藏取經詩話」

この書は、支那では亡逸して傳はらなかつたのであつたが、不思議に日本に宋版のものが遺つてゐた。それは三浦梧郎子の所藏であつた。羅振玉氏はそれを借りて大正四年に景印に付したのである。著作の年代は宋末と思はれるが、或は元初かも知れぬ。兎に角後に出了「西遊記」は、これに本づく所が多い。

内容は上中下三卷にわかれ、十七回になつてゐるが、第一と第八の一部が缺けてゐる。斯様に回を分けたところを見ると、これは講談の種本といふより、むしろ讀み物として作つたもので、詩話といふも詩に關する話ではなく、詩をまじへた話といふ意味である。話の筋は、唐の三藏法師玄奘が五人の弟子と共に天竺へ經文を求めに行く途すがら、猴行者すなはち舊の花果山紫雲洞八萬四千銅頭鐵額彌猴王を一行に加へ、同勢七人各種の危険を排除して、天竺に行き經文を得て歸來し、遂に現身成佛したといふのである。處々各人の詩が出てゐるが、あまり佳いのは無い。

(四)「天宋宣和遺事」

この書は前集後集に分れ、先づ堯舜のことから説き起し、宋の高宗が臨安に都した時までのことを述べてある。けれども主として徽宗欽宗兩帝の時代を中心としたもので、宣

和は徽宗の年號一、一一九一年—、一二五年、文體は純粹の口語ではなく、雅俗混合文である。作者は南宋の無名氏であるが、文中に元代の語があるから、元人が手を入れたのであらうとの説もある。

記述は編年式で、王安石の新法が天下の禍となつたことから始まり、蔡京を朝政に當らしめ、徽宗が道士に迷ひ、妓女に溺れ、上に小人跋扈して、政治は腐敗し、遂に徽宗欽宗父子は金の囚人となり、北方に護送せられ、様々な侮辱を受け、遂に異域に幽閉せられて崩殂するに至つた事情を述べてあるが、その中で、宋江等の事件は後に水滸傳の粉本となつたので、殊に重要である。はじめ楊志が刀を賣ることから人を殺し、晁蓋は蔡京の誕生祝の禮物を奪ひ、つひに二十人の豪傑が、太行山の梁山濼に集つた。また宋江は閻婆惜を殺して出走し、九天玄廟で一卷の文を見て、三十六同志の名を知り、義のために姦邪を殄滅する志を以て、九人を率ゐて、梁山濼の山寨に赴いたが、晁蓋が已に死んだ後だったので、宋江が首領に推され、淮陽京西河北三路二十四州八十餘縣を剽掠した。時に果して三十六人の猛將が揃つた。後に宋江等は朝廷に歸順し、各々官職を受け、宋江は節度使に封ぜられたといふ。是は前集に述べてある。而して、宣和遺事卷末の結論に云ふ、

「世の儒者は高宗が中原を恢復する機會を失つたと謂ふ、建炎の初に機會を失つたのは、

小説類似書

潜善伯彦が目前の安を偷んだからである。紹興の後に機會を失つたのは秦檜が虜のため、間に間を用ゐたからである。この二失敗のために、中原の境土を復することができず、君父の大仇を報ずることができず、國家の大恥をそぐことができない、これが忠臣義士の扼腕して、賊臣の肉を食ひ、その皮に寝ないことを恨む所以である。

宋の小説は前記のものを以て略々盡すが、此他小説類似のものとしては、「世説新語の類似書として、王隠の『唐語林』、孔平仲の『續世説』があり、笑話類には、呂居林の『軒渠錄』、沈微の『諧史』、周文玘の『開顏集』、天和子の『善謔集』等がある。

第十章 北曲の完成

元の北曲

戲曲は、北曲と南曲との二種に大別する。北曲は、大都今日の北京を中心として發達したもので、元の初に於て最も隆昌であり、元の末に近づくに従つて衰微し、南曲が之に代つて興隆した。今先づ北曲に就いて述べれば、元の北曲は雜劇と謂つて、金の院本雜劇から進化したものである。而して、元の雜劇には、曲もあれば、白もあり、科もあつて、歌劇としての體裁が、まづたく完備したのであつた。

一たい元が「元」といふ國號を定めたのは、西紀一、二七一年であつて、その前は蒙古と號してゐた。その蒙古時代の、太宗の九年（一、二三七年）から以後七十八年間といふものは、從來支那の各朝廷が行つてゐた所の科擧（文官試験）を廢したので、文學的才能の豊かな者が、徒らに古文に頭腦をいためる煩累から免れ、その力を平民文學の方面に揮つたことは、元曲の進歩に重要な意義をもつてゐる。元曲がその發生の初期に於て、幾多の傑作を出したやうな事實は、たしかに科擧廢止のもたらした賜物であらねばならぬ。

元曲の數

元の雜劇が、その數に於て、幾何程有つたかは、確なことはわからぬ。「錄鬼簿」元の鍾嗣成

元曲選

著の目録に四百五十八本を擧げてあり、太和正音譜(明の寧獻王權著)は五百三十本を擧げ、且つ雜劇をその内容の趣向によつて十二科に分類してゐる。實際に於ては一千本内外有つたかも知れないが、今日まで傳へられてゐる元の雜劇は甚だ僅少で、總計一百十六種に過ぎない。その中で「元曲選」に録せられてゐるものが九十四種ある。「元曲選」はまた元人百種曲とも稱し、明の萬曆年間に臧晉叔が編纂したもので、百種の雜劇が收めてあるが、その中に六種だけは明の初の人の作である。尙また元稹古今雜劇三十種といふ珍書があつて、その中十三種だけは「元曲選」にも載つてゐるが、餘の十七種は他に見ることのできぬものである。また「西廂記」が別にある。これは五つの雜劇から成立し、一部の戲曲と爲る。即ち「西廂記」は五つに數へる(但し明の傳奇を集めた六十種曲には一種として收めあり、これは西廂記を一の傳奇と見做したるなり)。これを合計すると前記の如く一百十六種となる。

古今雜劇

雜劇作者

元の雜劇作者は録鬼簿に百十一人(録鬼簿の著者を加へ百十二人)を擧げてあるが、今日それ等の作者の作つた雜劇中傳はつてゐないものが、かなり多い、今雜劇の現に傳へられてゐる作者の姓名と其作物とを左に列記しやう。(雜劇名に圈點を附したものは普通に呼ぶ略稱である)

關漢卿

第一期(一二三四年——一二七九年)作者

○關漢卿 (六十三種中遺れるもの十三種)

- | | | |
|----------------|----------|-----------|
| 關張雙赴西蜀夢。 | 閩怨佳人拜月亭。 | 錢大尹智寵謝天香。 |
| 杜蕊娘智賞金線池。 | 望江亭中秋切餠。 | 趙盼兒風月救風塵。 |
| 關大王單刀會。 | 温太真玉鏡臺。 | 許妮子調風月。 |
| 包待制三勘蝴蝶夢。 | 感天動地竇娥冤。 | 包待制智斬魯齋郎。 |
| 崔鶯鶯待月西廂記。(第五本) | | |

○高文秀 (三十四種中遺れるもの三種)

- | | | |
|---------|----------|----------|
| 黑旋風雙獻功。 | 須賈大夫諱范叔。 | 好酒趙元遇上皇。 |
|---------|----------|----------|

○鄭廷玉 (二十四種中遺れるもの五種)

- | | | |
|-----------|-----------|----------|
| 楚昭王疎者下船。 | 包龍圖智勘後庭花。 | 布袋和尚忍字記。 |
| 看錢奴買冤家債主。 | 崔府君斷冤家債主。 | |

○白樸 (十七種中遺れるもの二種)

- | | |
|-----------|----------|
| 唐明皇秋夜梧桐雨。 | 裴少俊牆頭馬上。 |
|-----------|----------|

○馬致遠 (十四種中遺れるもの六種)

第十章 北曲の完成

江州司馬青衫淚。

呂洞賓三醉岳陽樓。

西華山陳搏高臥。

破幽夢孤雁漢宮秋。

半夜雷轟薦福碑。

馬丹陽三度任風子。

○李文蔚 (十二種中遺れるもの一種)

同樂院燕青博魚。

○李直夫 (十二種中遺れるもの一種)

便宜行事虎頭牌。

○吳昌齡 (十一種中遺れるもの二種)

張天師斷風花雪月。

花間四友東坡夢。

○王實甫 (十四種中遺れるもの二種)

崔鶯鶯待月西廂記 (四本) 四丞相高會麗春堂。

○武漢臣 (十三種中遺れるもの三種)

散家財天賜老生兒。

李素蘭風月玉壺春。

包待制智勘生金閣。

○王仲文 (十種中遺れるもの一種)

救孝子賢母不認尸。

○李壽卿 (十種中遺れるもの四種)

王實甫

說鱗諸伍員吹簫。

月明和尚度柳翠。

○尙仲賢 (十種中遺れるもの四種)

洞庭湖柳毅傳書。

尉遲公三奪槊。

漢高祖濯足氣英布。

尉遲恭單鞭奪槊。

○石君寶 (十種中遺れるもの三種)

魯大夫秋胡戲妻。

李亞仙花酒曲江池。

諸宮調風月紫雲庭。

○楊顯之 (八種中遺れるもの二種)

臨江驛瀟湘秋雨雨。

鄭孔目風雪酷寒亭。

○紀君祥 (六種中遺れるもの一種)

趙氏孤兒大報讐。

○戴善甫 (五種中遺れるもの一種)

陶學士醉寫風光好。

○李好古 (三種中遺れるもの一種)

沙門島張生煮海。

○張國賓 (四種中遺れるもの三種)

相國寺公孫合汗衫。

薛仁貴榮歸故里。

羅李郎大鬧相國寺。

- 王伯成 (三種中遺れるもの一種)
李太白、夜郎。
- 孫仲章 (三種中遺れるもの一種)
河南府張鼎勸頭中。
- 康之進 (二種中遺れるもの一種)
梁山泊李逵、負荆。
- 岳伯川 (二種中遺れるもの一種)
呂洞賓度鐵拐李岳。
- 石子章 (二種中遺れるもの一種)
秦脩然竹塢聽琴。
- 孟漢卿 (一種)
張孔目智勘魔合羅。
- 李行道 (一種)
包待制智勘灰闌記。
- 狄君厚 (一種)

○孔文卿 (一種)
晉文公火燒介子推。

○張壽卿 (一種)
東窗事犯。

○李時中
謝金蓮詩酒紅梨花。

○花李郎 (三種)

○紅字李二 (三種)
邯鄲道省悟黃梁夢。

『右は馬致遠及李時中花李郎紅字李二の合作なり』

第二期 (二、二八〇年——一、三四〇年作者)

○宮天挺 (六種中遺れるもの一種)
死生交范張雞黍。

○鄭光祖 (十九種中遺れるもの四種)

傷梅香、騙翰林風月、周公輔成王攝政、醉思鄉、王粲登樓、迷青瑣、倩女離魂。

第十章 北曲の完成

○金仁傑 (七種中遺れるもの一種)

蕭何追韓信。

○范康 (二種中遺れるもの一種)

陳季卿悟上竹葉舟。

○曾瑞 (二種)

王月英元夜留鞋記。

○喬吉甫 (十一種中遺れるもの三種)

玉簫女兩世姻緣。 杜牧之詩酒揚州夢。

第三期 (一、三、四一年——一、三、六七年作者)

李太白匹配金錢記。

○秦簡夫 (五種中遺れるもの二種)

東堂老勸破家子弟。 宜秋山趙禮讓肥。

○蕭德祥 (五種中遺れるもの一種)

楊氏女殺狗勸夫。

○朱凱 (二種中遺れるもの一種)

吳天塔孟良盜骨。

喬吉甫

○王擘 (三種中遺れるもの一種)

桃花女破法嫁周公。

○楊梓 (三種中遺れるもの一種)

霍光鬼諫。

○李致遠 (一種)

都孔目風雨還牢末。

○楊景賢 (一種)

馬丹陽度脫劉行首。

右の外に無名氏の作が二十七種ある。

嚴子陵垂釣七里灘。

小張屠焚兒救母。

隨何賺風魔刺通。

硃砂擔滴水浮漚記。

小尉遲將鬪將認父歸朝。

龐涓夜走馬陵道。

諸葛亮博望燒屯。

包待制陳州糶米。

爭報恩三虎下山。

包龍圖智賺合同文字。

神奴兒大鬧開封府。

朱太守風雪漁樵記。

張千替殺妻。

玉清庵錯送鴛鴦被。

龐居士誤放來生債。

凍蘇秦衣錦還鄉。

謝金吾詐拆清風府。

孟德耀舉案齊眉。

北曲完成期

李雲英風送梧桐葉。
逞風流王煥百花亭。
風雨像生貨郎旦。

兩軍師隔江關智。
錦雲堂暗定連環計。
薩真人夜斷碧桃花。

玳瑁瑤盆兒鬼。
金水橋陳琳抱妝盒。
馮玉蘭夜月泣江舟。

無名氏の作は、作者の時代を推定するわけにゆかぬが、右に名を挙げた四十五名の作者を、三時期に別けてみると、第一期に属する者が三十二名、第二期に属する者が六名、第三期に属する者が七名ある。第一期は蒙古の太宗(窩淵台)が中原を取つてから宋の亡ぶまでの間で、此時期が北曲の完成期であり、また最も盛觀を呈した時である。有力な作家は多く、此第一期に活躍してゐる。第二期になると、すでに北曲は下り坂にかゝり、第三期に至つては、やつと情性を保つてゐるに過ぎない状態を示してゐる。

また各作家の出身地を查べると、第一期の作者は悉く北方の人である。即ち關漢卿、馬致遠、王實甫、王仲文、楊顯之、紀君祥、張國賓、孫仲章、石子章、李時中、紅字李二等は大都(今の北京)の人であり、花李郎は不明であるが、多分大都の人と考へられる。また王伯成、李好古、白樸、李文蔚、尚仲賢、戴善甫は、いづれも今の直隸省の人、武漢臣、岳伯川、康進之、高文秀、張壽卿は、すべて今の山東省の人、吳昌齡、李壽卿、石君寶、狄君厚、孔文卿、李行道は今の山西省の人、鄭廷玉は、河南の人、孟漢卿は安徽の人、李直夫は女真人である。第二期に於ては、北方の人と南方

雜劇家の地方別

北曲の六大家

北曲中の傑作

の人とが混つてゐる。會瑞は大都の人、宮天挺は直隸人、喬吉甫、鄭光祖は山西人、金仁傑、范康は共に今の浙江省杭州の人である。第三期では、秦簡夫、蕭德祥、王擘、楊梓等皆浙江の人である。李致道と楊景賢は不明、是に由つて觀ると、北曲は北方の作者によつて支持せられてゐた間が盛んであつて、南方に移つてからは振はなくなつたことがわかる。因みに、浙江省の杭州は臨安と謂つて、久しく南宋の都してゐた處である。

元の雜劇の作者で特に著名な人は、關漢卿、馬致遠、白樸、鄭光祖の四者であつて、常に並稱せられてゐる。また之に王實甫、喬吉甫二名を加へて、北曲の六大家とも謂ふ。その代表的傑作として一般に認められるものは、關漢卿の「竇娥冤」、馬致遠の「漢宮秋」、王實甫の「麗春堂」、白樸の「梧桐雨」、鄭光祖の「倩女離魂」、喬吉甫の「金錢記」等であるが、特に王實甫、關漢卿の「西廂記」は北曲中の大明星として、燦爛たる光輝を群星の間に放ち、南曲の琵琶記と相對して、支那戲曲中の兩大關となつてゐる。

太和正音譜に元明戲曲家の詞を品評した語がある。甚だ漠然として握み處の無いやうなものであるが、試に前記六大家に關するものを抜いてみると、馬致遠が第一に擧げてあつて、『馬東籬致遠の號の詞は朝陽の鳴鳳の如し』とある。白樸は三番目に、『白仁甫の詞は鵬の九霄に搏つが如し』とあり、喬吉甫は五番目に、『喬夢符の詞は神鼉の浪を鼓

するが如し。』とあり、王實甫は八番目に『王實甫の詞は花間の美人の如し。』とあり、關漢卿は十番目に『關漢卿の詞は瓊林の醉客の如し。』とあり、鄭光祖は十一番目に『鄭德輝の詞は九天の珠玉の如し。』とある。此中關漢卿は、北曲興始の先輩で、作物も最も多いが、太和正音譜では、可上可下の才など、評して、彼の價值を極めて優秀なものとは認めてゐない。

第十一章 北曲の體製

雜劇は歌劇であるから、曲に重きを置くことは當然である。曲には宮調がある。宮調とは洋樂のハ調(C)ト調(G)ニ調(D)といふが如き調子のことである。北曲には宮調が十二調あつて、すべての曲はそのいづれかに屬するのであるが、實際に用ゐられてゐる調子は九調だけである。それは、

黄鐘宮(二十四曲) 仙呂宮(四十二曲) 正宮(二十五曲) 中呂宮(三十二曲) 南呂宮(二十一曲) 雙調(二百曲) 大石調(二十一曲) 越調(三十五曲) 商調(十六曲)

右五宮四調を九宮といふ。九宮とは九種の調子といふ意味に外ならぬ、而して北曲に於ては一折(一幕)には一宮調を限つて用ゐる一韻を押す。同一宮調に屬する曲を若干曲連ねたものを一段として一折を完る仕組みになつてゐる。斯様に同一宮調の曲を若干曲連ねて一段としたものを套數と謂ふ。つまり北曲の一折は、一套數で成つてゐるのである。曲には名がある。點絳脣とか、混江龍とか、油葫蘆とか、いつたやうなもので、恰も詞に詞名があるのと變りはない。つまり我國でいふと、都々逸とか追分とかいふ名があるや

北曲の十二宮調

套數

北曲の曲數

うなものである。都々逸ならば文句は何とあらうと、節は同じであるやうに、點絳脣の曲ならば、文句は種々異つても、節は同じ節である。北曲に用ゐる曲の數は三百十六曲ある。そして曲は詞が變化したもので、詞が唱はれなくなつて、曲が出来たのであるから、詞名と曲名は同じものが多い。然し名は同じでも、字數や平仄は全く異つてゐる。たとへば「醉花陰」といふ名は、詞にもあり、曲にもあるが、文字排列上の構造は異なるのである。

詞と曲との別

詞と曲との構造の上に、最も著しい差異は、詞は詩と同じく、文字の平仄だけを區別して排列するのであるが、曲は平上去の三聲を區別しなければならぬ。そして古來の四聲の中で、入聲だけは元の時代に北方には無くなつてしまつて、現在も北方に入聲無し、入聲は平上去の中に含まれてしまつた。そして平聲には陰陽の別が生じ、韻字も従つて詩の韻字とは違ふ。

北曲の形式
一劇は四折

北曲は通例四折(四幕といふが如し)を以て一劇を成す。一折には一宮調を用ゐること前述の通りであるが、折が換れば、當然別の宮調を用ゐるのである。「元曲選」の例に依ると、第一折には最も多く仙呂宮を用ゐる、第二折には南呂宮正宮中呂宮を多く用ゐる、第三折には中呂宮正宮商調越調雙調を多く用ゐる、第四折には、中呂宮雙調等が比較的多く用ゐられ、黃鐘宮大石調は割合に用ゐられる場合が少いやうである。

北曲の楔子

四折で一劇を成すのが北曲の例であるが、四折だけでは、表現が不十分なときは、楔子を加へる。これは第一折の前に置く場合もあれば、折と折との間に置く場合もある。楔子とはつまり序幕、第一折の前に在るもの若しくは間幕、折と折との間に在るものにあたるもので、それに用ゐる曲は、仙呂宮の賞花時か端正好が普通である。尙稀には第一折の前と、折と折の間と、二箇所、楔子を用ゐた雜劇もある。これは元曲選にも三つしか例がない。また四折一劇の例を破つてゐるものに、紀君祥の「趙氏孤兒」がある。これは五折あつて、その上楔子もあるが、まつたく異例に屬するものである。

北曲の脚色

北曲で登場する俳優には、それ／＼名が附いてゐる。その名は役割の區別を示すもので、之を脚色と稱する。わが謡曲で、シテ、ワキ、ツレ等の名稱を附するやうなものである。

正末(男)に扮する主役、シテの如し)

正旦(女)に扮する主役、シテの如し)

外、淨(男女)いづれにも扮す、ワキなり)

沖末、旦、僂、副淨、丑(ツレ)の如し)

雜(右以外の端役)

旦字の附く者はすべて女形で、僂は童僕である。旦、僂は下婢や侍女、侍女はまた搵旦と

北曲は唱者一人

もいふ。また外の男に扮する者を孛老、女に扮する者を卜兒といふ。

登場俳優は、一折に幾名出ても、曲を唱ふ者は一折に一人と限り、正末か若くは正旦が唱ふことに決まつてゐる。支那戯曲は、舞臺の上で時間と空間の觀念は無視するのが常で、一折の間に場面が變つて、その間に幾月幾年の経過を意味し、舞臺を一周して數百里の旅行に擬することは珍らしくない（これは北曲に限らない、そんな時でも、北曲では一折に唱ふ者は一人で、他の登場人物は白を述べ所作をするばかりであるし、一劇四折を通じて、たゞ一人の正旦或は正旦のみが唱ふのも少くない。

雑劇を演ずるには背景を用ゐない。背景は舞臺の上に距離や時間を設定するから、却つて不便である。たゞ俳優の服装等は各々役割によつて適當に扮装し、また各種の小道具を用ゐる。小道具は之を砌末と稱する。

北曲の末尾には、題目正名がある。これは二句か四句の聯句で、一句は七言か八言が普通である。俳優が下場の際に、伶人が吟誦するので、これを以て一劇を閉づるわけである。而して雑劇の名は、多くその正名から取る。例へば馬致遠の「漢宮秋」は、

題目『黑江に沈む明妃青塚の恨。』
正名『幽夢を破る孤雁漢秋の秋。』

題目正名

而して雑劇の名は正名を取つて「破幽夢孤雁漢宮秋雑劇」と謂ひ一般には略して「漢宮秋」と稱するのである。

第十二章 西廂記概観

今北曲の例として有名なる西廂記に就いて述べる。西廂記の淵源は唐の元稹の傳奇「會真記」に在る。北宋の趙德麟は「會真記」を基として「商調蝶戀花」十闕の鼓子詞を作つた。後に金の董解元解元は舉人の首位を謂ふ名は不詳は、さらに「絃索西廂」を作り、大に「會真記」の内容を劇的に變改した。元の王實甫はそれを粉本として、雜劇「西廂記」を作つたのである。たゞ普通の雜劇の例によれば、一劇は四折で完結する筈であるが、「西廂記」は一劇五本に分れ、一本四折であるから、五本通計二十折の長篇となる。しかし北曲はどこまでも北曲で、「西廂記」が二十折あるにしても、四折一本の劇が五本あるので、二十折の續いた劇と見るのは不穩當である。内容は連續してゐるにしても、つまり一口に西廂記といふが實は左の五本が各々一劇であるのだ。

- 第一本 張君瑞鬧道場雜劇
- 第二本 崔鶯鶯夜聽琴雜劇
- 第三本 張君瑞害相思雜劇

西廂は五本雜劇

絃索西廂

第四本 草橋店夢鶯鶯雜劇
 第五本 張君瑞慶團圓雜劇

「西廂記」は北曲の通例を破つてゐることが三つある。第一に、一つの事件を一本四折で片附けず、五本二十折を續けたこと、第二に、楔子は「大抵仙呂の賞花時或は端正好の曲に限られてゐるのに」「西廂記」の第二本には一折に等しい套數を以て楔子としてあること、第三に、北曲は一折一人の獨唱が普通となつてゐるのに、西廂記は第一本第四本第五本の各第四折では唱ふ者が二人ある。尤もこれは明代に於て改めたのか知れぬが、兎も角も、今見る西廂記はさうなつてゐる。この三者の外にも他の元曲に比べて多少異なる所はあるが、主なる違ひは以上の三點である。

「西廂記」の作者に就いては異論がある。或は全部が關漢卿の作と云ひ、或は全部王實甫の作と云ひ、又は王實甫が第四本第三折の正宮端正好の曲まで作つて、精力盡き血を吐いて死んだので、關漢卿がその後を續けたなど、いふ小説的の話も傳はつてゐるが、今日では第四本までを王氏が作り、第五本だけを關氏が作つたといふ説が認められてゐる。而して「西廂記」の現今傳へられてゐる本は一種ではなく、内容も幾分づゝか後人の刪改を経てゐるので、いづれが最も原本に近いものであるか、その判定さへ困難である。然し今日

西廂の作者

金瓶歌第六才子本

では「即空觀本」が比較的原作に近いものと見做されてゐる。清の金人瑞(聖歎)の批評した「第六才子西廂記」は、世上に最も流布してゐる本であるが、これは金人瑞が意のままに改作したもので、原作とは全然違つたものになつてゐる。ことに「續西廂」(即ち第五本)を筆を極めて批難してゐるなどは、わざとらしくも見える。恐らく彼には何等かの考があつたのであらう。

「第六才子西廂記」には、初めに題目總名がある。

『張君瑞巧に東床の婿と做り、

法本師南禪地に住持す、

老夫人宴を聞く北堂の春、

崔鶯鶯月を西廂に待つ記』

これは原本には無かつたものであらうが、「錄鬼簿」に王實甫の戯曲目録が列してある。それにも「崔鶯鶯待月西廂記」と出てゐるから。王實甫自身も別に總名を附けてゐたものであらう、因みに「西廂記」といふ名稱は、元稹の「會真記」中の崔氏の詩「月を待つ西廂の下」といふ句から出たのである。

西廂の構成

さて西廂記の構成を記せば、

○第一本(劇名は前に擧ぐ)

楔子 『登場』 外老夫人、旦俵(紅娘)。正旦(鶯鶯)、(外、正旦唱)。

『曲』 仙呂賞花時、么篇(東鍾韻)。

第一折 『登場』 正末(張生)、俵人(琴童)、小二、法聰、正旦、紅娘。(正末唱)。

『曲』 仙呂點絳脣套數(先天韻)。

第二折 『登場』 夫人、淨(法本)、法聰、正末、紅娘。(正末唱)。

『曲』 中呂粉蝶兒套數(江陽韻)。

第三折 『登場』 正旦、紅娘、正末。(正末唱)。

『曲』 越調鬪鶴鶩套數(庚青韻)。

第四折 『登場』 法本、法聰、正末、夫人、正旦、紅娘。(正末唱)。

『曲』 雙調新水令套數(蕭豪韻)。

○第二本

第一折 『登場』 孫飛虎、法本、夫人、正旦、紅娘、歡郎、正末。(正旦唱)。

『曲』 仙呂八聲甘州套數(眞文韻)。

楔子 『登場』 夫人、正末、法本、孫飛虎、惠明、杜將軍、卒子。(惠明唱)。

【曲】正宮端正好套數(鹽咸韻)。

第二折 『登場』夫人、正末、紅娘、(紅娘唱)。

【曲】中呂粉蝶兒套數(庚青韻)。

第三折 『登場』夫人、紅娘、正末、正旦、(正旦唱)。

【曲】雙調五供養套數(歌戈韻)。

第四折 『登場』正末、正旦、紅娘、(正旦唱)。

【曲】越調鬪鶻鴉套數(東鍾韻)。

○第三本

楔子 『登場』正旦、紅娘、(紅娘唱)。

【曲】仙呂賞花時(廉纖韻)。

第一折 『登場』正末、紅娘、(紅娘唱)。

【曲】仙呂點絳脣套數(支思韻)。

第二折 『登場』正旦、紅娘、正末、(紅娘唱)。

【曲】中呂粉蝶兒(寒山韻)。

第三折 『登場』紅娘、正旦、正末、(紅娘唱)。

【曲】雙調新水令套數(家麻韻)。

第四折 『登場』夫人、紅娘、正旦、法本、太醫、正末、(紅娘唱)。

【曲】越調鬪鶻鴉套數(侵尋韻)。

○第四本

楔子 『登場』正旦、紅娘、(紅娘唱)。

【曲】仙呂端正好(江陽韻)。

第一折 『登場』正末、紅娘、正旦、(正末唱)。

【曲】仙呂點絳脣套數(皆來韻)。

第二折 『登場』夫人、歡郎、紅娘、正旦、(紅娘唱)。

【曲】越調鬪鶻鴉套數(尤侯韻)。

第三折 『登場』夫人、法本、正旦、正末、紅娘、(正旦唱)。

【曲】正宮端正好套數(齊微韻)。

第四折 『登場』正末、琴童、小二、正旦、卒子、(正末唱)。

【曲】雙調新水令套數(車遮韻)。

○第五本

楔子 『登場』 正末、琴童、(正末唱)、

『曲』 仙呂賞花時、(皆來韻)。

第一折 『登場』 正旦、紅娘、琴童、(正旦唱)、

『曲』 商調集賢賓套數、(无侯韻)。

第二折 『登場』 正末、琴童、(正末唱)、

『曲』 中呂粉蝶兒套數、(支思韻)。

第三折 『登場』 淨、(鄭恒)紅娘、夫人、法本、杜將軍、(紅娘唱)、

『曲』 越調鬪鶴鴒套數、(眞文韻)。

第四折 『登場』 夫人、正末、紅娘、正旦、法本、杜將軍、鄭恒、(正末唱)、

『曲』 雙調新水令套數、(魚模韻)。

右五本とも、一本毎に、終りに題目正名がある、それを記せば、

第一本 『老夫人春院に閑に崔鶯鶯夜香を燒く、小紅娘好事を傳ふ、張君瑞道場を鬧がす。』

第二本 『張君瑞賊計を破る、莽和尚殺心を生ず、小紅娘畫客を請す、崔鶯鶯夜琴を聽く。』

第三本 『老夫人醫士に命す、崔鶯鶯情詩を寄す、小紅娘湯藥を問ふ、張君瑞相思を害ふ。』

第四本 『小紅娘好事を成す、老夫人由情を問ふ、短長亭に別酒を斟む、草橋店に鶯鶯を夢

む。

第五本 『小琴童捷報を傳ふ、崔鶯鶯汗衫を寄す、鄭伯常捨命を干め、張君瑞團圓を慶す。』

金人瑞評の第六才子西廂記は、内容を左の如き標題を以て分けてゐる。

驚豔借廂酌韻、鬧齋、寺警請宴、頼婚、琴心、前候、鬧簡、頼簡、後候、酌韻、拷艶、哭宴、驚夢、捷報、猜寄、爭

豔、團圓。

右の中、捷報以下は續西廂(第五本にあたる)であつて、第六才子の原本には標題は無い、然し坊間で勝手に標題を附けたので、本によつて標題が一致してゐない。

尙また陳眉公批評の西廂記は全く南曲の體裁になつてゐて、題目正名も無く、第一齣から第二十齣まで、四字づゝの標題がある。

陳眉公

佛殿奇逢、 僞房假遇、 齋角聯吟、 齋壇鬧會、 白馬解圍、 紅娘請宴、 夫人停婚、

鶯鶯聽琴、 錦字傳情、 妝台窺簡、 乘夜踰牆、 倩紅問病、 月下佳期、 堂前巧辯、

長亭送別、 草橋驚夢、 泥金報捷、 尺素緘愁、 鄭恒求配、 衣錦還鄉、

いま左に西廂記の梗概に就いて述べれば左の如き筋である。

『唐の徳宗の時に張珙字を君瑞と呼ぶ青年があつた、もと西洛の人で、才貌人にすぐれ、學問も深かつた、幼少の時に父母をうしなひ、貧困の間に苦學してゐたが、貞元十年の春、一

人の童僕琴童を従へて、故郷を立つて皇都長安に向つた。これは、長安で文官試験を受け、名譽ある官位を得たためであつた。

黄河の畔、今の山西省蒲縣に近い處に、普救寺といふ唐の則天武后勅建の名刹があつて、その頃、此寺の西廂には、故宰相崔珪の遺族が、故人の柩を奉じて假寓してゐた。張生は、途すがら蒲を過ぎて、名にし負ふ普救寺に参詣しやうと思ひ、琴童を旅店に留め、一人此寺に往き、寺僧法聰に案内されて寺内を參觀したが、折しも崔家の姫鶯鶯が侍女紅娘と共に庭園を散歩してゐるのに出逢つた。姫は當時妙齡で、その美しい姿が、張生の眼に映じたとき、姫もまた張生を一瞥し、こゝに兩人奇縁の端が開かれた。二人は互に見ること一瞬時で、姫は牆門深く歩み入つてしまつた。

張生その日は寺を辭して旅店に歸つたが、姫を忘れがたく、翌日さらに寺に赴いて、住持の法本和尚に會ひ、口實を設けて寺内の一室を借り、そこに起居することにした。張生は、姫が毎夜花苑に出て焼香祈禱することを知り、ある夜ひそかに牆邊に潜んで、姫の焼香の濟むのを待つて、試に一首の詩を吟じたところが、姫も牆の彼方から詩を酬ひたので、張生は一道の希望を認めたのであつた。その後寺内で崔家の法事を營んだとき、張生は法本和尚にたのみ、同じ時に自分の亡父母の供養をしてもらひ、一堂の中で鶯々と張生

は相見ることができた。

その頃に孫飛虎といふ者が、地方の亂に乗じて、蒲東の地を掠めはじめたが、崔家の姫を自己の妻にしやうとして、普救寺を兵五千を以て圍み、若し姫を獻じなければ、寺を焼き人を殺すと聲言した。寺中の僧俗は恐惶して、何等の手段も無い。崔家の夫人は己むを得ず、姫の言に従つて、若し此賊を退ける人があつたならば、姫をその人に與へると寺中一般に傳へさせた。張生これを聞いて喜び、勇僧惠明を使として、折から遠からぬ蒲關に鎮守してゐる盟友杜將軍に救援を頼んだ。杜將軍は友人の請に應じ、軍を率ゐて來り、賊將を捕へ、賊兵を討拂ひ、普救寺の危難を除いてくれたので、姫の身も無事なることを得た。ところが崔家の夫人は、前言をひるがへし、姫はすでに夫人の甥鄭恒に許嫁してあるといふ口實で、張生に與へやうとせず、たゞ張生の勞を謝するため、小宴を催して、張生と姫とに兄妹の禮を執らしめ、夫婦の杯をすることを許さなかつたので、張生は憤慨に耐へなかつた。

その後、姫の侍女紅娘のはからひで、張生は一夜琴を弾いて、姫の心を引かうとしたが、姫の胸の中はともも知ることができなかつた。それが爲め、張生は病氣になつてしまつた。姫は張生が病んでゐることを聞き、紅娘をして見舞はしめたので、張生は紅娘に託して

手紙を送つた。姫は手紙を受取つて、紅娘の前では怒りつゝも、一通の返書を読み送つた。張生はその返書の文外の意を推察して、夜中、姫が花苑に焼香するとき、籬を越えて苑内に入つたが、意外にも姫から散々の責罵を受け、紅娘からさへ罵られて、愧恨に耐へず、すゞくとわが室に歸つたこともあつた。

然し姫も實は張生を深く想つてゐたのであつたから、遂に紅娘の手引きで、二人はわりなき仲となつてしまつた。ところが、事はつひに夫人の耳に入つた。夫人は初め大に憤つたが、原をたゞせば、自分に罪があるので、結局二人が結婚することに同意した。たゞし、崔家の家柄として、官位の無い者に姫を嫁らすことは面目にかゝはるから、速かに張生に都に到つて試験を受け、官位を得て来るやうに勧めた。

張生も、それは初志であるから、直ちに承諾し、旅装をとゝのへ、秋の暮つ方、崔家の人々と法本和尚たちに見送られ、十里の長亭で、別杯を酌んで、相わかれ、琴童を従へて、秋風に涙を拂ひつゝ、旅途に上つた。その夜、旅店の床の上で、鶯鶯姫が後を追つて來た夢を見て、離別の悲哀一入にせまるのを覺えたのであつた。(以上で王實甫の第四本は完つてゐる) さて張生は都に到り、翌年試験を受け、首位で及第したので、早速普救寺の姫に通知したところ、姫からも種々の意味ある贈物を添へて返事を遣つた。

その前に、夫人の甥、鄭恒は、都に在つて、夫人から速かに來て共に柩を送れといふ書面を受け、受けたのであつたが、家事のために延引して、此頃やつと蒲東に來てみると、姫を張生の妻として與へたといふ話をきいたので、嫉妬を起し、張生は都で大官の婚に爲つてゐると詐つて、張生の歸らぬ前に、姫と結婚してしまはふと企てた。それには夫人も惑はされ、張生との婚約を破らうかと考へてゐる矢先に、張生が河中府尹の官を授けられて歸つて來たので、鄭恒の詐偽も露見し、杜將軍も來て、鄭恒を責めたから、鄭恒は恥に耐へず、他に逃れて自殺してしまつた。

張生は積日の煩悶拭ふが如く消え、杜將軍の媒約で、鶯鶯姫とめでたく偕老の契を結んだといふ。

今左に第四本第四折、張生が鶯鶯等にわかれて、受験のため琴童を従へて都に向ふ第一夜、草橋の旅店で夢を見る。條を邦文に譯して讀者の参考に供する。これは第六才子西廂では「驚夢」と題する一段である。たゞし、此の譯文は即空觀本に依つたのである。

尙譯文には必要はないが、調と曲の名だけ某唱の下に括弧をして書いて置いた。「雙調」は調子の名、即ち宮調で、以下「新水令」「步々嬌」「落梅花」等すべて曲の名である。そしていづれの曲もこの一折だけは皆雙調に屬してゐる。某唱とあつて、下に曲名の無いのは、前曲の

つゞきである。つまり一つの曲の間に白が入つて、曲が割れてゐるのである。白は譯文の如く原文も簡單である。元曲は大抵斯様である。またこれは第四折であるから、最後に伶人が題目正名を吟ずるのであるが、それは前にすでに掲げたから茲には省略して置いた。

x x x x x x x

第四本第四折

(張君瑞、童僕を伴れ馬に乗りて登場す。)

張云。『はや蒲東から三十里も歩いたが、そこに見えるのは草橋の旅籠屋だ、一晩そこに泊つて明日の朝早く出立としやうだが、この馬も足が緩いぞ』

張唱。(雙調)新水令

ながむれば夕の雲の
たれこむる蒲東のみ寺
森の落葉のかなしき別れ
馬おそく人はものうく
わたる雁なゝめに翔けて

風あらく離恨のなみだ

せきあへぬ首途の今宵。

張云。『先日のだのしさに引き換へて、今日の悲みは何としたことだ……』

張唱(歩歩嬌)

翠被のうち蘭麝を薰じ
身をよせて枕そばだて
互に看るうれしの姿
くろ髪鋪き玉梳なゝめに
新月の雲を出しか
君をしのび昨日戀しや。

張云。『さて、こゝが旅籠屋だ、もし番頭さん』

番云。『檀那さま、さあこちらの良い部屋にお入り下さい』

張云。『琴童よ、馬をあちらへ伴れて行き燈火を點けてくれ』

『俺は飯は食ひたくない、はやく休みたいのだ』

琴云。『わたくしもすつかり疲れちまつたので、やつぱり寝やうかと思ひます』

(張君瑞は寢臺に眠り、琴童は寢臺の下に夜具を舖いて眠る)。
張云。『今夜はとても眠られさうでない』

張唱(落梅花)

枕はひとつ旅のやど
秋野にすだく蟲のころ
風にうなれる窓の紙
悲む人を哀ます
ひとり臥戸の寒くして
夜具の薄さに夢成らず
いつ暖まる此のねぶり。

(張君瑞遂に眠る。鶯々登場す)

鶯云。『長亭で張様にお別れはしたものの、どうも残り惜しくてなりません。母様と侍女が眠つたのを宜い機会に、こつそりこゝまで出て來ました。張様に追ひついて、一緒に伴れて行つてもらひませう』

鶯唱(喬木查)

さびしき荒野たどり
怯に胸ときめき
急ぎて呼吸はせまる
草分け蛇をおどし
ありかを追ひ尋ねん。

又唱(攪箏琶)

君はわが胸をばむしる
さればわれ遠みち走り
むづかしき母が眼を避け
そば去らぬ侍女を賺しぬ
馬にのりためらふ君の
痛傷ましくしほるゝ姿
想ふだに耐へざるものを。

わかれ來て日の傾けば

憂きおもひいよゝせまりて

束のまに身も瘦せほそる

君を送り半ば日を過ぎ

衣きぬの褶ひらひろきを覺ゆ

誰か斯くかつて瘦せけん。

又唱(錦上花)

むつ言のかたらひしばし

「功名は君をへだてぬ

負ひきれぬ戀のなやみは、

のがれても今ぞくるしむ

哀別のいたき思に。

清き霜は波より澄みて

白きつゆは落葉に結ぶ

降りて上り上りて降り

まがりくねる野路ゆけば

みぎ左に風吹き捲く

われいそぎて走れるとき

何處に君眠り在す。

又唱(清江引)

はたごの内ひとり物わび

年のごとき夜に對はゞ

暮の雨と蟲鳴きしきり

曉の風に月さむからん。

別の酒さめんはいづこ。

鶯云「おゝ此の旅籠屋に居られるやうす戸を敲いてみませう」

張云「誰か戸を敲いてゐる女の聲らしい戸を開けてみやう」今頃來られたのは何誰で
すか」

張唱(慶宣和)

人ならばとく語れ

亡靈なら失せてゆけ。

鶯云『わたくしで御座います、あなたにお別れした上は、いつ又お眼にかゝられるやらわ
かりませぬので、母上のお眠りになつた隙に、出て参りました、どうぞわたくしをお伴れ
下さいませ』

張唱

言きゝて香になづむ

羅（しやう）の袖とらへ

あゝ妻よわが妻よ。

張云『心づくしかたじけない』

張唱（喬牌兒）

一徹（ちやく）なる志

衣（い）のやぶれものとせず

繡（きう）の鞋（せ）はどろまみれ

足のそこも痛からん。

鶯云『あなたのお爲ならば、遠い道も遠いとは思ひませぬ』

（鶯々は痛みを耐へて口にてししくと云ふ）

鶯唱（甜水令）

眠らず食はずうつらくに

おもひやつれし君を想へば

散るとも咲ける花こそまされ

枕（まくら）つめたく衾（ふとん）は冷えて

ひとりぬる夜のさびしき心

月まろければ雲ぞさへぎる

なけきは常に世にあるものを。

又唱（折桂令）

人の世は

離別こそいとくるしけれ

いとほしや

ひとり往く千里關山

かくばかり

斷腸の思せんより

恩愛の

ちぎりをば捨てんに如かじ。

月の缺け

花散るは一ときなれど

簪折れ

瓶墜ちなば舊にかへらず

われ二人

別れても月花のごと。

豪傑と

驕奢とはわれは好まず

たゞ君と

生けるとき同じふすまに

たゞ君と

死なるとき一つの墓に。

(兵士數名登場す)

兵云『先刻一名の女が河を渡つたところを看たが、何處に行きやがつたのか、わからない。』

松明をたかく擧げろ』

『やあ、たしかに此の旅籠に入ったのを看た』『ひき出せく』

張云『いつたい何事なのだ』

鶯云『あなたは出ずにゐらつしやい、わたくしが戸をあけて、あの者共にいふことが御座います』

鶯唱(水仙子)

普救寺かこみむたいの狼藉

劍を喉に人おびやかす

けがれ心のたはけ痴者。

兵云『お前は何家の娘だ、なぜ夜更けに河を渡つたのだ』

鶯唱

口うごかすな後にすざれ
英傑杜將汝も知らん
彼もし暇み指もてさゝば
あはれ汝が骨身とろけん
やがて白馬にまたがり來ます。

(兵士等にはかに鶯々を掠めて退場す。この時張君瑞はじめて眠りより醒む。)

張云「あゝ夢であつたのか、まあ兎に角戸を開けて外を看やう」空は露をこめ、地上は霜を鋪いて、曉の明星は幽にまたゝき、残月は尙あかくと照らしてゐるのが眼に映るばかりだ」

張唱(雁兒落)

なよくとふりすてがたき
青やぎは墻のあなた
しんくと静かなる夜に
門とぢて秋清らか

はらくと風ふきゆけば
落葉して林さびし
どんよりとにぶき光よ
窓もれてさす月かけ。

又唱(得勝令)

あやしくも竹影ゆれて
龍蛇とく走るに似たり
飄々とあへなき思ひ
莊周の蝴蝶の夢か
機織蟲のひまなきかこち
小夜砧かすかにつやく
むねを刺すわかれの傷
よき夢の醒めてくやしも
宿さびし悲みふかし
あでやかの人はいづこぞ。

琴云 『夜が明けましたよ早く出かけて一丁場さきで、食事いたしませう』
 張云 『番頭さん、旅籠賃を拂ひませう、琴童お前は馬の支度をしておくれ』
 張唱(鴛鴦煞)

柳の枝の細ながに

垂れてからまるわが情

誰がむせぶらんいさゝ川

流るゝ音のかすかなる

斜月残短ほのかにて

消えなんばかり消えもせず。

舊き恨の盡きもせて

あらたに愁こりむすび

離苦のなやみに塞がりし

肺腑ひらかんすべもなし

紙と筆とを舌に代へ

北曲の悲劇

書かば書きなんこの思
 誰にか告げんこの思。
 (登場者みな退場す、たゞ張君瑞のみは退場しつゝ左の歌を唱ふ(絡絲娘煞尾))
 官位をのぞむ心
 二人を遠くへだつ。

x x x x x x x

一た元曲には悲劇が少い、今日残存してゐる元曲の中で悲劇と見做し得べきものは、『漢宮秋』『梧桐雨』『西蜀夢』『火燒介子推』『張千替殺妻』『齋娥寃』『趙氏孤兒』の七種であるが、『西廂記』も王實甫作の第四本までとすれば、これも悲劇の一つである。然し關漢卿の第五本が後を續いだので、悲劇ではなくなつてしまつた。尤も、雜劇『西廂記』は、董解元の『絃索西廂』の趣向を踏襲したのであるから、絃索西廂が大團圓で完つてゐる以上は、『雜劇西廂記』に第五本があつて、目出度く、で結ぶのも當然の成行であらう。

西廂記は明代以後大に諸名士に研究せられ、また李日華、陸天池等の『南西廂』をはじめとして、續撰の西廂十數種を見るに至り、清の道光年間には湯世澐が『東廂記』といふものを作つて、『西廂記』の誨淫なるに反抗するものさへ出たのであつた。

西廂の續撰

第十三章 南曲の興隆

支那の北方と南方では、文字の發音が甚だしく違ふ。その著しい例は、北方には久しく胡人が侵入して雜居してゐた故か、入聲が無くなつてしまつたことである。然し南方は入聲があるのである。斯う發音が違ふと、北方で發達した北曲は南方人の耳には適當でない、そこで南方には南方人の耳に都合の宜い戲曲が出来なければならぬ。それが即ち南曲の出現した理由である。(尤も元の沈和等は、南曲と北曲とを混合はせた南北合套を創めたが、これは特殊のもので、餘り流行しなかつた)。

宋が南に遷つてから後は、今の浙江省一帯が南方文化の中心地と爲り、すでに温州(浙江に在り)近傍に於ては、温州雜劇といふものが、流行してゐた。これは北方に北曲の現れないう前から存在したものであるが、北曲の盛んなときには、その勢力に掩はれて、著しい活動も見えなかつたが、元の代が衰へると共に、北曲は衰へ、遂に元末から明初にかけて、大に南曲が勃興したのである。

南曲はまた傳奇ともいふ、唐人の傳奇といふのとは趣がちがふ。一たい傳奇とはロー

南曲の先祖

マンスの意味であるから、諸宮調でも雜劇でも、廣義の傳奇ではあるが、いつしかに南曲の^レみを以て傳奇と稱するやうになつてしまつた。その南曲の先祖ともいふべきものは、琵琶記と荆劉拜殺との五種である、これはいづれも元末明初に出来たものである。荆劉拜殺とは、荆釵記、劉知遠(白兔記といふ)、拜月亭(幽閨記ともいふ)、殺狗記の四種を並稱したものである。

南北曲の差異

今茲に南曲が北曲と異つてゐる點について述べる、と大凡左の通りである。

(一) 北曲は宮調が十二調あるが、實際には九調(即ち九宮)しか用ゐない、然るに南曲は十三調用ゐる、それは、

仙呂宮(九十二曲)、羽調(九曲)、正宮(六十四曲)、大石調(十八曲)、中呂宮(七十四曲)、般涉調(二曲)、南呂宮(百十七曲)、黃鐘宮(五十二曲)、越調(五十七曲)、商調(六十四曲)、小石調(一曲)、雙調(三十九曲)、仙呂入雙調(九十一曲)

右の如く調の數も多いが、曲の數に於ても、北曲の三百十六曲に對し、南曲は六百七十九曲ある、しかも南曲にはさらに引子、過曲、慢詞、近詞等の區別があつて、唱ひ方の強弱緩急を定めてゐる。

尙北曲は、曲の間に襯字といふ字餘りの文字を夥しく用ゐるが、南曲は襯字が少い、そし

て南曲の方が多く詞に近い、これは填詞流行時代の發音が概して南方に遷移したからであらう。

(二) 北曲は文字の發音に入聲がなく、そして平聲には陰陽の別があるが、南曲には入聲があり、平聲に陰陽の區別はない、其他は大體北曲と同じく、中原音韻(元の周德清著)を標準にしてゐた。

(三) 北曲は四折で一劇を完結するのが普通であるが、南曲では折を齣といひ、幾齣を續けても差支へない、而して毎齣に標題を附ける。

(四) 北曲の如く一折は必ず一宮調の套數でなければならぬといふこと無く、南曲は一齣の中で異つた宮調を用ゐることが多く、また一齣中の各曲の韻も換へて差支へない。

(五) 北曲は一折の間に唱ふ者は一人であつたが、南曲では登場人物はいづれも唱ふことができ、従つて一曲を分割して數名で唱ひ續ひたり、合唱したりすることも多い。

(六) 南曲には楔子といふものが無い、然し第一齣は通例戯曲内容の大意を述べるやうにしてある。これが北曲の楔子に似たものである。

(七) 北曲には一本の終りに、題目正名がある、南曲にそれは無い、その代り毎齣の終りに下場詩といふものがあつて、俳優が退場の際に、これを吟じながら引込むのが常である。

(八) 北曲と南曲とでは、登場俳優の役割(脚色といふ)の名稱が少しく異なる、南曲では左の通りである。

生(男の主役、北曲の正末)

旦(女の主役、北曲の正旦)

外(北曲の外に同じ、ツキに當る)

淨、丑、末(北曲の沖末、旦、俵、副淨、丑の如し、ツレに當る)

尙生に次で主立ちたる役は小生、外の女に扮する者は外旦、その老年なる者は老旦、相役の旦は貼旦といふ、是等の脚色は後世になる程、名稱が複雑に派生した。

さて今南曲の一例として、最も古い、そして最も優れたる琵琶記に就いて少しく述べてみよう。

琵琶記は永嘉(浙江省温州)の人高明(則誠)が作つたもので、著作年代は元の至正の末年(一

三六〇年頃)であらうと謂はれる、全篇は左の如く四十二齣に分れてゐる。

第一齣 副末開場。第二齣 高堂慶を稱ぐ。第三齣 牛氏奴を規す。第四齣 蔡公試を逼る。第五齣 南浦の囑別。第六齣 丞相女を教ふ。第七齣 才俊程に登る。第八齣 文場士を選ぶ。第九齣 粧に臨んで感嘆す。第十齣 春杏園に宴す。第十一齣 蔡母兒を嗟しむ。第

十二齣旨を奉じて婿を招く。第十三齣官媒婚を議す。第十四齣當朝を激怒す。第十五齣金閨配を愁ふ。第十六齣丹陛情を陳ぶ。第十七齣義倉の賑濟。第十八齣再び佳期を報す。第十九齣強ひて鸞鳳に就かしむ。第二十齣勉めて姑嬪に食ましむ。第二十一齣精糠目から厭く。第二十二齣琴荷池に訴ふ。第二十三齣代つて湯藥を嘗む。第二十四齣官邸に憂思す。第二十五齣祝髮して買葬す。第二十六齣拐兒の結誤。第二十七齣感格して墳を成す。第二十八齣中秋月を賞す。第二十九齣乞巧して夫を尋ぬ。第三十齣衷情を囑ひ詢ふ。第三十一齣幾言して父を諫む。第三十二齣路途に勞頓す。第三十三齣女の親を迎ふるを聽す。第三十四齣寺中に像を遺す。第三十五齣兩賢相遭ふ。第三十六齣孝婦眞に題す。第三十七齣書館の悲逢。第三十八齣張公使に遇ふ。第三十九齣散髮して林に歸る。第四十齣李旺の回話。第四十一齣風木の餘恨。第四十二齣一門の旌獎。登場人物の主なる者は左の通りである。

蔡邕(生)

趙五娘(旦)、蔡邕の第一妻

蔡公(外)、蔡邕の父、

蔡母(淨)、蔡邕の母、

張太公(末)、蔡邕の隣人、

牛丞相(外)

牛氏(貼旦)、牛丞相の姫、後に蔡邕の第二妻、

惜春(丑)、牛氏の侍女、

院子(末)、牛丞相の執事

李旺(丑)、牛丞相の家僕、

(副末)、開場の役、

副末は劇中の人物には何等關係なく、第一齣に於て、琵琶記の大要を唱つて、その梗概を述べるのである。そして北曲に於て題目正名の、正名の一句から、戯曲の名を取るやうに、南曲では普通に第一齣の下場の詩から戯曲の名を取るののであるが、琵琶記は例外である。

「琵琶記」の第一齣下場の詩は、

「富を極め貴を極む牛丞相

仁を施し義を施す張廣才

貞あり烈ある趙眞女

忠を全うし孝を全うす蔡伯喈」

琵琶記の名

南曲一般の例に従へば「琵琶記」ももとは「蔡伯喈」と呼ばれたものではあるまいか、それが後に「蔡伯喈琵琶記」と呼ばれるやうになり、遂に單に「琵琶記」といふやうになつたのであらう。その内容の大略は、

琵琶記梗概

『漢の蔡邕(さいひょう)字は伯喈(はくけい)は學問深く才能ゆたかなる青年であつたが、兩親が老ひたるため、青雲の志を抛つて、妻趙五娘を娶り、父母の膝下に孝養を盡してゐた、ところが蔡邕の學才は、そのまゝ、田舎に埋もれることを許さず、郡中より彼の名を擧げて、彼を都に受験に遣るやうに推薦をした、然し彼は老ひたる父母を棄て、遠く都に赴くことを肯んじやうとしなかつた。

父の蔡公はわが子の立身と家門の名譽を切望する心から、強ひて蔡邕に受験を促した、母は蔡邕を遠く離すことを大に反對したが、隣人張太公も父と共に熱心に勧めたので、蔡邕は新婚二ヶ月の趙五娘に別れ、不在中の世話を張太公にたのんで、都に向つて出發した、そして都に於て試験を受けると、首尾よく狀元(じやうげん)第一番に及第をした、この試験科目に對句とか謎解(なぞとく)とか唱曲とかあるのは、もとより作者の諧謔(たがひ)に過ぎない。

當時の大臣に牛丞相といふ人があつた、勢威百官を壓してゐたが、早く夫人を失つて、たゞ一人の姫があつた、その姫は才色すぐれた貞淑なる女で、丞相の最も愛する者であつ

たが、丞相は常に姫のために學徳深き讀書人を婿にしたいと心懸けてゐた、折柄蔡邕が狀元に及第したので、聖旨を以て彼を婿に選んだ、蔡邕は故郷に老親と妻とがある故を以て、上表して、官を辭し歸郷せんことを願つたが、却つて丞相の怒に觸れ、遂に已むことを得ず、牛氏の婿となつて、その邸宅に留ることになつた、蔡邕は想掛けなく斯様な富貴を得たのであるが、胸の中では、絶えず家郷のことが氣になるのであつた。

家郷は如何であるかといふに、蔡邕が都に出發してから後、非常な饑饉が襲つて、裕かならぬ蔡家は困難のどん底に落ちた、たゞ趙五娘は心を碎いて父母への奉仕に努め、義倉で施米するとき、自から出かけて米を貰つたが、歸途悪人にそれを奪はれ、途方にくれて死なうとしたりした、幸に張太公の義侠によつて、僅かの米を分けて貰ひ、父母には米を食はせ、自分はひそかに糠を食つて餓をしのいだのであつた。

趙五娘その時に唱ふ、

『荒れすさみたる凶年(きよつとし)

ゆきて歸らぬわが夫のきみ

いよゝいらだつ二人の親

力およばぬかよわきわれ。

あゝ衣も賣りはて、
身につくる物さへ無し
死なんとは幾たび思へど
われ亡くば、父母のいかにせん
こゝろもとなき命かも
おそろしの災しのび難や』
又唱ふ、

『湧き湧くよ涙のつゆ
みだれ亂るゝ愁の緒
細りほそるよわき身體
をのゝきをのゝく此の歲月』

彼女は強ひて糠を口に入れるが、喉につかへて吐きかゝる。
『吐くとき肝腸ひきつり
なみだ出で喉ふさがる。』

糠よ

杵もてうすづかれ
簸もてあふられ
あくまでも堪へ得し汝は
いく千のくるしみ經たる
わが身にぞ似たりける
苦しき人と苦しき物
相逢ひぬれば
喉通らぬもことわりぞや』
彼女はつくくゝと我身を糠にひき比べ、

『糠と米とはじめは一つ
簸にあふられて離れくゝ
こなたは賤しく
あなたは貴く
われとわが夫の』

わかるゝに似たるかな。

わが夫は米

米は遙けく尋ねもあへず

わが身は糠

糠は饑餓を救ひもあへず

きみ家に在らで、われのみ残る』

『生くるも死ぬるも益なきわれ

むしろ饑餓を忍びしのびて

呼吸絶えばや、怨鬼と爲らばや

たゞ父母われをたよれば

しばしが程もつとめて生きん

生くるとも長からなく

この糠の如き身のはて』

これ程に耐へ忍んで、ひたすらに父母のため安穩をはかつてゐたが、その心盡しの甲斐もなく、老母はつひに衰へて死に、續いて老父もまた此世の人ではなくなつた。すでに家財も衣裳も賣りつくして、何一つ残らぬ趙五娘は、埋葬の費用など有らう筈は無い、いろ／＼に思ひなやんだ末に、彼女は遂に髪を剪つて賣り、張太公の援助によつて棺材を求め、自から土を運んで墳墓を築いた。この時天神は趙五娘の孝心をあはれんで、二神將を遣はし、陰兵を以つて墳墓の築造を助けた。墓の出来上つた頃張太公も來合はせて、此の不思議に感じた。五娘は父母も死んでしまつたことであるから、夫を尋ねて都に上ることとなり、父母の畫像を描いて脊に負ひ、道姑の妾となつて、琵琶を抱き、途々之を弾いて人の憐みを受けつゝ、旅路に就いた。

都では蔡邕が、つひに故郷に父母と妻を留して來た事情を牛氏に告げたので、牛氏も大に同情して、父丞相に申出で、夫婦共に蔡邕の故郷に往くことの許を乞ふたが、丞相はそれを肯かず、結局故郷から父母と妻を迎取ることにして、李旺といふ家人を使者として遣つた。

一方に、趙五娘は長途の旅をして、やつと洛陽に着し、彌陀寺の法會に詣つて、父母の畫像を出して禮拜してゐると、官人が従者を従へて參詣に來たので、いそいで避けたが、畫像

を片付けることを忘れた、その官人はすなはち蔡邕で、彼は父母等が道中無事に上京するやうに祈願するために來たのであつたが、畫像の置き忘れてあるのを見て、従者に拾ひ取らせた。

趙五娘は後にその官人が蔡邕であることを知り、翌日その邸宅に尋ねて行つて、はじめ牛氏に會ひ、牛氏の取計ひによつて蔡邕にも再會した。牛氏は謙遜な心を以て、趙五娘を第一夫人に推し、自からその次たることに甘んじ、且つ蔡邕と共に三人、郷里に往つて父母の喪に服することにした。また使者として出掛けた李旺は蔡邕の故郷に赴いたが、それは父母が死に、五娘が旅立つた後であつたので、張太公に會つたところが、太公は蔡邕の不孝をいたく罵つた。李旺はそれで空しく歸つて來て、牛丞相にその趣を復命した。蔡邕等夫妻三人が、父母の墓前に在つて、三年の喪を守り、その期が済んだときに、彼等の孝行が天聽に達したので、彼等は旌表せらるゝこととなり、牛丞相が勅使となつて、蔡邕の郷里に來り、聖旨を傳へた。此時蔡邕は中郎將を授けられ、趙五娘は、陳留郡夫人に、牛氏は河南郡夫人に、それ〴〵封ぜられ、一門の光榮に感泣した。

琵琶記の材

抑も琵琶記は如何なる故事を材料として作つたものであるかは若干の異説がある。一たい蔡邕といふ人は東漢の大學者であつたが、後に逆臣董卓の黨與となつたために、獄

中で死んだ然し琵琶記にあるやうな事跡は、傳へられてゐない。清の毛宗崗(聲山)は、作者高明が、その友人で糟糠の妻を棄て、宰相不花氏の女婿となつた王四といふ者を諷して作つたものと云つてゐる。また明の王世貞(弇州)は、唐の小説に牛相國僧孺の子に繁といふ者があつて、友人の蔡生にわが妹をめあはせやうとしたが、蔡生は妻がすでにあるので、初め固く辭した。そして後に己むを得ず、その妹を娶つた。その新妻はよく舊妻に服従して、一家は平和であつた。高明は此話によつて琵琶記を作り、當時の一士大夫を諷刺したのであると云つてゐる。

然しながら、南宋の時にすでに「蔡中郎」といふ鼓子詞が民間に流行してゐたことが陸游(放翁)の詩によつても明かであるから、高明の琵琶記は、その頃の俗説を取つて作つたものと考へればよからう。尙毛宗崗は琵琶記を第七才子書として、痛快なる評を加へてゐる。

「琵琶記」につゞいて出た南曲で、有名なものは前に述べた通り「荆釵記」、「白兔記」、「幽閨記」、「殺狗記」である。これはいづれも明の初に出たものであるが、その中で、幽閨記は、元の末に出たかとも思はれる。明の戯曲に就ては後章別に述べる筈であるが、前記四種だけは説明の便宜上、こゝに解説する。

「幽閨記」は「拜月亭」といふのが舊の名であつたが、明末汲古閣出版の「六十種曲」には幽閨記

といふ名で收められてゐる。第一齣家門始終の下場の詩に、

「老尙書虎狼軍を緝探す、

窮秀才鳳鸞羣を拆散す、

文武の擧雙びて黄金榜に第す、

幽閨の怨佳人拜月亭」

この末句から取つて拜月亭と謂ひ、また幽閨記とも謂ふ。原作者は元の施惠君美であるといふのが一般の説である。然し王國維北京大學教授氏の説では施惠の撰ではあるまいと云ふ。曲文は元人の作らしいが文中に明初の人の語があるから明人の刪改を経たものであるらしい、全篇は四十齣で、その大要は、

「金元の戦亂に際して、中都の貢士蔣世隆といふ青年と、妹の瑞蓮、丞相陀滿海牙の子陀滿興福、王尙書の女瑞蘭等が逃難の途中で種々の困難に遭遇し後に世隆は文官の試験に及第し、興福は武官の試験に及第して、義兄弟ならびに名譽を得、世隆と瑞蘭、興福と瑞蓮いづれも互に夫婦と爲つたといふ趣向である」

「拜月亭」といふのは元の北曲にも、王實甫の作として「才子佳人拜月亭」といふのがあり(但し本は現存せず)また古今雜劇三十種の中にも閨怨佳人拜月亭といふのがある。誰の作

荆釵記

といふことを明かにしてゐないが、王國維氏はこれを關漢卿の作と認めてゐる。兎も角も南曲の「幽閨記」は是等の雜劇を基として作つたものである。

「荆釵記」は柯丹丘撰と題してあるが、これは明の太祖の第十六子寧獻王權の作である。その大要は、

「南宋の王十朋は博學の貧生であつたが、錢員外といふ富豪が、人物を見込んで、その女玉蓮を妻はさうとした、十朋は兩家が釣合はぬので、その婚を辭したが、たつての懇望で、つひに承諾し、十朋の母の挿してゐた荆釵を贈つて結納とした、十朋の友人孫汝權は富裕であつたが、學問は劣つてゐた、その汝權も玉蓮に戀慕して、婚姻を望んでゐた、玉蓮の繼母姚氏は十朋の貧いことを嫌つてゐたので、どうかして玉蓮の心を汝權に傾けしめやうとしたけれど、玉蓮は背き入れずつひに十朋と結婚してしまつた。

その後十朋と汝權は都で文官試験を受け、十朋は及第して、饒州簽判の任を授けられたが、汝權は落第した、ところが十朋は、万俟丞相の婿に望まれた、十朋はすでに妻があるのので之を辭ると、丞相は怒つて、彼の任地を遠き朝陽に改めた、汝權は此時惡計をめぐらし、十朋の書信を偽造して、十朋は萬俟丞相の婿となり、玉蓮を離婚する旨を錢員外の家に申送つた、そして汝權は玉蓮に結婚を申込んだ、繼母姚氏は大に喜んだが、玉蓮は母の勸

めを肯かず、つひに家を逐はれ、江水に投身しやうとしたところが不思議なことで、錢安撫に救はれ、その養女となつた。

後に十朋は潮陽から吉安の太守に陞任し、錢安撫の養女と結婚したが、それは玉蓮であつた。

この戯曲は全篇四十八齣で、その材料については種々の説がある。王十朋も孫汝權も宋の名士で、この戯曲のやうな事實はないけれど、王十朋がかつて丞相史浩を弾劾したことがある。それは孫汝權が使噓したといふので、史浩の門客が、兩人を怨んで、一の傳奇を作つた。それを寧獻王が潤色して「荆釵記」を撰したといふ説は道理らしく思はれる。

白兔記

「白兔記」は無名氏の作である。上篇十三齣下篇十九齣合せて三十二齣の大意は、

「五代の漢主劉知遠が微賤で世に知られない頃に、李太公といふ富豪に救はれて、その女李三娘の婿になつたが、李太公夫婦が死ぬと、三娘の兄は三娘と知遠を離さうとした。知遠は邠州（びんしゅう）に往つて岳公の軍に投じ、岳公の女に想はれて、その婿となり、武功を立て、高位に陞つた。三娘は知遠の去つた後に、兄夫婦から他に嫁ぐことを逼られたが、肯かず、虐待を忍びつゝ、一男子を産んだ。兄はその男子を殺さうとしたが、老僕が救つて邠州の知遠の許に送つたので、知遠の妻岳氏は、わが子として養育した。男子が生長して十六歳

殺狗記

のとき狩に出て故郷の徐州附近に至り、偶然に白兔を見つけて追つて行くと、井戸の傍に困臥してゐる婦人に出遭つた話をしてみると、それが男子を生んだ眞の母であつたので、男子は歸つて、父の知遠に告げ、つひに迎へて知遠の第一夫人とした。

この戯曲は五代漢の高祖劉知遠と妻李氏とのことであるが、五代史によると、李氏は晉陽の農家の女で、劉知遠が軍卒の時に、夜その家に入つて掠劫して妻にしたとある。李氏に兄はあるが、妹を虐待したことは史上に無い。元の劉唐卿に「李三娘麻地捧印」といふ雜劇がある。その本は今傳はらぬが、多分これが白兔記の粉本であらう。

「殺狗記」は明の初の徐暉（じゆい）の撰である。すべて三十六齣で、その大意を述べれば、

「孫華といふ富人があつた。彼は彼に阿諛する友人を近づけて酒色に耽り、實弟の孫榮を虐待してゐた。ある時孫華の妻楊氏は、夫の心を改めやうと考へ、ある夜夫の酔つて歸宅する時、犬を殺して、人の殺されたやうに装ひ、門前に屍體を棄て、置いた。孫華はそれを人間の死屍と思ひ、平生親密にする二友人に、速く持つて行つて棄てるやうに頼んだが、後難を恐れて應じない。孫華は已むを得ず、破密（しやくみや）に居る弟をたづねて、その事を頼むと、弟は直に承諾して、死屍を負つて城外に運び埋めてしまつた。

孫華は弟の親切がわかつて、兄弟は睦まじくなつた。ところが、悪友等は、また孫華の家に

來て酒食にあづからうとしたが、孫華が彼等の不人情を責めて、相手にしないので、二人の悪友は、孫華兄弟が殺人をして、ひそかに死屍を埋めたと訴へ出た、いよく裁判になると、妻楊氏が眞實の事を申出たので、官吏が城外に行つて、埋めた死屍を掘出してみたら、まさしく犬の屍體であつたから、悪友は却つて罰せられ、孫氏一門は褒賞せられた。

この話は元の蕭德祥の「楊氏女殺狗勸夫」といふ雜劇の内容と同じである。たゞ人名等は異つてゐる。例へば雜劇の方では兄の名が孫榮で、弟の名は孫蟲兒と謂ふ。

さて今こゝに元の戲曲に關する説明を終結するに臨んで、元の院本に就いて一言附加して置き度い。元には雜劇が流行したのであるが、金の院本の名残りとして、元にも院本はあつたのである。たゞ雜劇に壓倒されて、大した名作は無かつたらしいし、また今日金の院本で遺つてゐるものが無いから、明かにその構成を知ることができないが、明の周憲王の雜劇の中に院本が一段ある。多分元の院本は斯くの如きものであつたらうと推察せられる。それに依ると、院本には數名の登場人物があつて、曲も唱へば、白も述べる。しかも曲を唱ふ者は一人と限らない、たゞ幾折も續いたものは無く、簡單なる一幕芝居であつたらしい。

元の院本

第十四章 元代の小説

宋の平話は、元の末葉に至つて長足の進歩を遂げ、ついに有名なる小説「水滸傳」を出すに至つた。但し「水滸傳」が果して何人の作であるかは、古來大なる疑問になつてゐる。作者が疑問である以上、著作の時代もまた甚だ不明瞭で、或は元のものでなく、明のものであるかも知れぬ。今しばらく一般の説に従つて、假に元末の作として茲に列するのは説明の便宜に過ぎない。

「水滸傳」の作者に關して、古來議論せらるゝ主要なる説は四つある。

(一) 羅本(貫中)の作といふ者。

明の郎瑛、王珩、田汝成等がそれである。尙田汝成は、羅本が斯うした強賊讚美的の小説を作つたために、子孫三代啞が生れたと云つてゐる。

(二) 施耐菴の作といふ者。

明の胡應麟はこの説である。

(三) 原作は施耐菴で、羅本が編修したといふ者。

水滸傳の作者

明の李贄(卓吾)がそれである。李贄は、水滸傳に忠義の二字を冠し、之を評した最初の人である。

四) 施耐菴が作ったもの(七十回まで)を羅本が後を續けたといふ者。

明末清初の金人瑞はこれを斷言してゐる。金人瑞も、水滸傳の評者として有名である。

金人瑞と同時代の周亮工は、水滸傳の作者に就いては施耐菴とも羅本とも斷定してはゐないが、金人瑞がみだりに七十回迄を施耐菴の作とし、その後を羅本の續けたものとして罵つてゐることに不平を有してゐた。

此他「水滸傳」の著作者に關しては今日に於ても尙諸説紛々たる状態であるが、その主なる二三を挙げると、わが幸田文學博士は施耐菴の筆に上り、羅貫中(羅本)の補編に成ると言ひ、胡適氏は七十回本の「水滸傳」が出たのは明の中葉で施耐菴といふ名は文人の假名である、また百回本は明初の羅貫中の著であらうと言ひ、謝无量氏は「水滸傳」中に「三國志演義」中の語があるから、「水滸傳」は羅本が「三國志演義」を作つた後に作つたものと斷定してゐる。

さて「水滸傳」は、百八人の豪傑が宋の徽宗の頃に天下を横行し、離合集散の末、梁山泊に會合することを叙し、さらに梁山泊の主領宋江等が官府の招諭に應じ、朝廷のために北征南伐して功をあらはしたが、豪傑等は漸次に離散して、つひに宋江等は讒人のため毒酒に死

水滸傳の故事

ぬといふ悲惨なことで局を結んでゐる。

「水滸傳」に關する故事は、南宋以來民間の傳説として大に流行してゐたものらしい。宋史に、

「淮南の盜宋江等が淮陽軍を犯したので、將を遣はして討捕せしめた。又京東、江北を犯し、楚の海州の界に入つたから、知州張叔夜に命じて、之を招き降らしめた」

とある。また宋史の「侯蒙傳」に、

「宋江が三十六人で齊魏を横行してゐるが、官軍數萬これに抗することができない。むしろ宋江を赦して方臘を討たせて罪を贖はせた方が可い」

と侯蒙が上書したことがある。「宋江が方臘を收めて功があつたので、節度使に封ぜられた」等の話(宣和遺事にあり)は、これから起つたのであらう。然し洪邁の「夷堅乙志」に蔡居厚といふ者の妻が蔡の死んだ後に、その夫がかつて鄆に帥たる時、梁山濶(泊に同じ)の賊五百人の降を受け、妻が諫めるのも聽かずして悉く殺したことを悔んだとの記事があるところを見ると、宋江等豪傑の終局は悲惨であつたと視る方が確かであらう。

すでに述べたる宋の平話本「大宋宣和遺事」に宋江等の事が記してあることは、前にも説いた。水滸傳の作は、これ等に負ふ所は頗る大きいのである。また宋末の遺民、龔聖與と

いふ人が「宋江三十六人贊」を作つたことがある。その序によると高如とか李嵩とかいふ人々がすでに宋江の事跡を傳寫してゐたといふから南宋の頃すでに宋江その他三十六豪傑の物語は種々に傳へられてゐたのである。たゞその三十六人の姓名や諱號には多少異つたものがある。今「宣和遺事」と「水滸傳」とで姓名も諱號も同じものを擧ぐれば、

青面獸楊志、九紋龍史進、入雲龍公孫勝、浪裏白張順、霹靂火秦明、活閻羅阮小七、豹子頭林沖、黑旋風李逵、小旋風柴進、金鎗手徐寧、撲天鵬李應、赤髮鬼劉唐、挿翅虎雷橫、美髯公朱仝、神行太保戴宗、病尉遲孫立、小李廣花榮、浪子燕青、花和尚魯智深、行者武松、急先鋒索超、拚命三郎石秀、

姓名諱號の一方若くは共に異なるもの(但し括弧の中は「宣和遺事」による)

智多星吳用、吳加亮、玉麒麟盧俊義、李進義、混江龍李俊、李海、立地太歲阮小二、阮小五、短命二郎阮小五、阮進、大刀關勝、關必勝、雙鎗將董平、一攬真、病關索楊雄、賽關索王雄、沒羽箭張清、張青、沒遮欄穆弘、穆橫、雙鞭呼延綽、鐵鞭呼、船火兒張橫、火船工張岑、撲著天杜遷(撲著雲、杜千)、呼保義宋江、宣和遺事には諱號なし)

「水滸傳」百八人の豪傑は天罡星三十六員と地煞星七十二員に分けるが右の内、孫立と杜遷は三十六員の方には加はつて居ない。ところが「宣和遺事」では宋江を三十六員の外

にして鐵天王晁蓋を加へてゐる。「水滸傳」では晁蓋を加へない。それは早く死んだからである。そして孫立杜遷の代りに、兩頭蛇解珍と雙尾蝎解寶を三十六員の方に加へてゐる。尙「水滸傳」三十六人の姓名諱號は「宣和遺事」よりも、龔聖與の「三十六人贊」の方に一致してゐるのが多い。

元の雜劇の中にも梁山泊傳説に關するものは總數二十一種あつたことが、その名目によつて推知せられる。その中で左の五種は今日尙遺つてゐる。

- 「黑旋風雙獻功」高文秀撰
- 「同樂院燕青博魚」李文蔚撰
- 「梁山泊李逵負荊」康進之撰
- 「都孔目風雨還牢末」李致遠撰
- 「爭報恩三虎下山」無名氏

高文秀は黑旋風の擬家とでもいふべく、彼の雜劇三十四種中八種の黑旋風雜劇を物してゐる。

「水滸傳」といふ小説が、一纏めのものとなる前に、すでに前記の如く梁山泊關係の話は種々な書物によつて傳へられ、わが忠臣蔵四十七士の銘々傳の如く、一般から大に歡迎せら

れてゐたことは明かである。たゞ「水滸傳」の出来る以前に於ては、主として天罡星三十六人の話であつたのが、「水滸傳」に於ては、それに地煞星七十二人を加へて、百八人の豪傑を出し、雄渾な規模の上に大活躍を演じさせた手腕は、まことに驚嘆に勝へない、また百八人の豪傑の性格等も一人々々異つてゐるが、是等の性格が、従來の戯曲等に描かれた梁山泊豪傑と同一ではなく、まつたく別の性格を與へられてゐるものもある。

故に「水滸傳」は従來の断片的な傳説を、單に綴り合せたものではなく、従來の梁山泊傳説を根據として、全く獨創の見地から一個の世界を描き出したもので、實に神來の妙筆といふを憚らぬ。支那に於ては、「水滸傳」と「三國志演義」及び「明の小説」「西遊記」と「金瓶梅」を合せて小説の「四大奇書」と稱へてゐる。清初の文豪金人瑞の如きは、「水滸傳」を以て、文學上の價值は「史記等」と同様なりとし、『天下の文章、水滸の右に出づるもの無し』と極讚した。

水滸傳の諸本
李卓吾の水滸傳

〔水滸傳〕の今日現存してゐるものは一種ではない、その中で主なものに就て述べると、

(一) 一百二十回忠義水滸全書
この本は明の李贄(卓吾)が批評を加へたものではじめに施耐菴集撰羅貫中纂修と記してある。これが今日存してゐる「水滸傳」中で最も正確なものと認められてゐる。是には李贄の序と、楚人楊定見の序がある。

(二) 七十回本水滸傳

これは正傳が七十回で、その前に楔子が一回あるから都合七十一回ある。金人瑞は此本が古本であると稱し、「莊子」「離騷」「史記」「杜詩」の次に此書を配して、天下第五才子書と云つてゐる。此書は百二十回本を中途から截断したので、百八人の豪傑が梁山泊に會合する迄を以て結末としてゐる。その以後の分は羅本が續けたものであるとて口を極めて羅氏を罵り「惡札」と稱して排斥した。また此書には、施耐菴の序文が一篇あるが、これも金人瑞の偽作であらうといふ、尙最後の第七十回梁山泊英雄惡夢に驚く一段もまた金氏が、「水滸傳」を七十回で完らせるために、強ひて偽作したといはれてゐる。兎も角もこの本は、百二十回の前七十回と大した差異はないのである。金氏は「西廂記」を刪改したり、「水滸傳」を刪削したり、かなり亂暴な行爲をしたが、その評言の明快と眼力の非凡とは、古來稀なる奇才で實に文壇の偉人として、比肩すべき人多くを見ない。故に七十回「水滸傳」は「水滸傳」として見るよりも、金氏の評文を見るための書であると謂つた方が適切である。

(三) 一百回本忠義水滸傳

これは百二十回本と大差なく、やはり李贄の批評したものである。つまり原來は同じものであるが、田虎王慶を討平する話が缺けてゐるので、二十回だけ少くなつたわけであ

金聖歎の第五才子書

る。

(四) 一百十五回忠義水滸傳

卷頭には「東原羅貫中編輯」と題してあつて、明の崇禎の末に、三國演義と合訂して「英雄譜」と名づけて刊行せられたものである。大體の終始は一百二十四回本と同じであるが、文詞の拙劣なるを以てみると、水滸傳の原作ではないにしても、それに近いものであらうと云はれる。尙別に、一百十回本、一百二十四回本等がある、一百十回本は一百十五回本と内容が略々同じであり、一百二十四回本も、これと同類であらうとのことである。

右のやうな次第で、異本が種々あるけれども、まづ李贄評の一百二十回忠義水滸傳を、最も「水滸傳」中の良書と看做して可からう。

今左に水滸傳の文例として、第四回の「魯智深大に五臺山を鬧がす」の一段から、花和尚魯智深が酒を飲んで亂暴する一條を譯出する、但しこれは原文の中で名文といふわけではない。魯智深の面目が若干あらはれてゐるといふだけである。(魯智深はこの時、軍人から僧侶に爲つたばかりである)

「魯智深は五臺山の寺に来て、もはや四五ヶ月も経つた。時あだかも冬の天氣で、智深もぢつとしてゐられない。天氣の晴れたのに乗じて、黒の直綴を着、紺の襪を結び、僧鞋

を換へて、どつしくと山門を出て、氣の向くまゝに山の中程の亭に至り、腰掛に腰をおろし、

「あゝ馬鹿々々しい、今まで、酒と肉は、口から離れたことがなかつたのだが、坊主になつてからといふものは、乾物かわものみたいになりやがつた、趙員外も近頃は、何も持つて来て食はしてくれず、口寂しさは何とも云はれない、斯ういふ時に酒があつたらばなあ……」

しきりに酒のことを考へながら、ふと向ふを見ると、遠くの方から一人の男が、桶を二つになつてやつて来た、桶には蓋がしてあり、男は手に柄杓へしやくを持つて、歌を唱ひながら歩いて来る。

「九里山前の作戰場、

牧童拾ひ得たり舊刀鎗、

順風は吹いて烏江の水を動かし、

あだかも虞姫よひめの霸王おうおうに別るゝに似たり。」

魯智深はぢつと、その男をながめながら亭いんに腰掛けてゐると、男も亭に上つて来て休んだ。魯智深云ふ。

「おい若衆、その桶の中は何かね」